第15回 銀華文学賞発表

第一五回銀華文学賞は、日本全国及び海外から、二〇九篇の御応募をいただき、まことにありがとうございました。国際色も交わり、また先端技術世界も反映されて、今年も多彩な内容となりました。

予選選考を経た作品の中から、大高雅博・八覚正大・小浜清志・五十嵐勉の選考委員による厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに結果を発表させていただきます。

作品は、誌面の都合により、今号は最優秀賞と優秀賞の一部のみを掲載させていただきますが、奨励賞など秀でた作品は次号以降に順次掲載の予定です。

申し訳ございませんが、コロナウィルスの影響が尾をひいた事情から、授賞式・祝賀会は今年度も見送らせていただきます。賞状・賞品などは後日直接御本人宛てに送らせていただきますので、御了承ください。

なお銀華文学賞は明年も年齢を四十歳以上に繰り下げさせていただき、枚数、締切、審査料など他はすべて同じとして募集させていただきます。どうぞまた奮って御応募ください。心からお待ちしております。

銀華文学賞

最優秀賞

「父の回心」 戸塚邦子（東京都港区）

「ぬくもり」 長野正毅（東京都杉並区）

優秀賞

「無垢なる子宮」 西村修子（山口県宇部市）

「ブレイクスルー」 塩崎憲治（山形県米沢市）

「雪かき男」 青木ガリアン（北海道札幌市）

「妻のVT（ヴァーチャル・トリップ）」 菊野　啓（徳島県徳島市）

「震災を越えて」 高橋惟文（山形県山形市）

「上山宿始末」 小笠原新（山形県酒田市）

奨励賞

「テロの源流」 風樹　茂（東京都荒川区）

「双眼鏡」 松本りゅうじ（東京都練馬区）

「大回り」 高杉晋太郎（大阪府豊中市）

「一粒の実りを願って」荘ユリコ（USA ヴァージニア州）

「ゲームの行方」四方康嗣（東京都杉並区）

「雨女」 室町　眞（東京都杉並区）

「独り、壊れていく」高橋ひとみ（千葉県船橋市）

「弁才天マヤミ」永田祐司（兵庫県西宮市）

「オムライス」 秋野佳月（埼玉県北足立郡）

「マジックヒューズ」山田　明（千葉県流山市）

「ゴーストバスター」中野雅丈（大阪府大阪市）

「青春の彷徨」 折口　真（埼玉県所沢市）

「瑠璃の家」 松本昂幸（東京都世田谷区）

※「震災を越えて」の作品掲載は、誌面の都合により、次号に掲載させていただきます。

佳作

「髪あらい」　和田さとし
「怪雨」　中崎紫紅
「Boy hits the Bank」　椚木拾五
「沈下橋」　諏訪崎はるえ
「夜の訪問」　宮脇すみれ
「七月のカモメ」　林野浩芳
「満洲補充読本」　朝川あきら
「娘との和解」　谷口俊明
「引き出しから蝶が飛びたつ」　松下　卓
「弔問」　安芸木菟
「セピアの渓」　根岸幸晏
「無償の愛」　飯塚久美子
「黒い森、あるいはミハイル・アレンスキーという男」　土屋　慶
「巡礼」　あおいなつ
「裸木の願い」　涼山　晃
「バイバイ、グッド・ラック」　国梓としひで
「雫の祈り」　ユラン
「家族のホゾ」　阿鳥美央
「いつか　どこかで」　待木　啓
「春の浅い夢」　奥村郁雄
「カルメンさんのドライブ」　北原　岳
「橘柑匂う頃」　吉田宏子
「天国の扉」　米蔵
「大津絵」　伊吹耀子
「百鬼夜行」　夏目由美子

選評

層が厚くなった

五十嵐　勉

今回の銀華文学賞は、層も一段と厚くなり、読み応えがあった。この充実は、人生を省察する年代層の、成果ある方向性が定まってきたような印象を与える。銀華文学賞の大きな果実の一つを得つつある気がした。特に優秀賞、奨励賞レベルの層の厚さは、それを物語っていた。

当選となった最優秀作は、二作あり、どちらも大きな人生の巡りののちに到達する深い輝きを獲得していた。

戸塚邦子氏の「父の回心」は、商社マンとして海外で長く働く父親の、キリスト教への回心を辿る物語である。当初「私」は、日本に残した家族を顧みず企業戦士として働く父親への不満を大いに覚えていたが、回心して出世コースを降りた父親の変節に寄り添っていく。帰国後さらに癌に倒れ、末期の病床での看護の会話のうちに、どうしてキ

銀華文学賞選考委員プロフィール

大高雅博
おおたか　まさひろ
1954 石川県生まれ　日大国文学科卒
80「旅する前に」で群像新人長編小説賞受賞
他に作品「跡地の王」、共著「トライ・トゥ・リメンバー」など

八覚正大
はっかく　まさひろ
1952 東京生まれ
早大理工学部数学科・都立大仏文科卒
91「十二階」で新潮新人賞受賞　文藝学校・NHK 学園講師　主著『「シェルター」発』（けやき出版）『夜光の時計』（新読書社）詩集『朝一の獲物』『学校のオゾン』（共に洪水企画）

小浜清志
こはま　きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務める
88「風の河」で文学界新人賞を受賞

五十嵐勉
いがらし　つとむ
1949 山梨県生まれ　早大文芸科卒
79「流謫（るたく）の島」で群像新人長編小説賞受賞
84-90 タイ在住、カンボジア問題を取材「東南アジア通信」「ASIA WAVE」編集長
主著『緑の手紙』（インターネット文芸新人賞）・『鉄の光』『ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ』「破壊者たち」

作家集団「塊」新メンバー募集中
連絡 090-8171-9771

リスト教へ回心したのかその過程を明らかにしていく。そして父の死後、回心した現場のシリアの鄙びた協会を訪れて、そこに残された芳名帳に、何十年も前の父の真の言葉を発見する。遠い異国の地に年月を経て見出した肉声は感動的である。時空を隔てて思いは伝わり、新たな心の絆を得て人生の力となっていく、文学の原点をも示してくれる優れた作品となっている。

長野正毅氏の「ぬくもり」は、青春の輝きと挫折を人生のぬくもりとして抱き締め直す、その姿形の結晶感が素晴らしかった。ロックバンドに夢を賭けて活躍する主人公に、憧れを抱いて近寄ってくる少年との、夢のやりとりのうちに、やがて挫折して平均的なサラリーマンになっていく自分に対し、逆に音楽から離れて世間的な成功を得、羽振りよく昔のロック喫茶に出入りする二人の心理的な隔たりが、人生の深い溝を覗かせている。燃えた昔の懐かしさが、いきなり「抱き締める」という奇矯な行為によって爆発し、実現する。それはその行為によってしか成し遂げられない、人生への遡及であり、夢に賭けて生きた者同士の、過去の絆であり、「ぬくもり」にほかならない。「彼」と「少年」で最後まで押し通す工夫も含めて、長野氏の高度な技量によってのみ可能な結実を見せていると同時に、何十年という日々の積み重ねを経たのちにこそ初めて、その真の輝きを知ることができる、人生の妙味をも覗かせている。

今回の応募作品全作のうちで、最も文章の魅力と吸引力の強さを感じたのは西村修子氏の「無垢なる子宮」だった。描写の綾をちりばめながら快く流れていく運筆力は、ハイレベルの研磨を感じる。むしろストーリーの組み立てがそれに追いついていかない恨みがある。性を遠ざけようとする動機が、父親と後妻との性行為を目撃するそのトラウマにあることは自然なものの、その嫌悪が、父親の車に細工をして二人を死に至らしめるのは、やりすぎで、それが、この主人公の生活的な根拠のなさにも結びついて、現実の根を薄くしている。結末もはっきりせず、やや逃げている印象がある。タイトルも露骨で、奥行きがない。一つ作品を結実させれば、たわわな果実群を生み出せそうな技量と豊穣感を覚えた。

前回最優秀賞に輝いた塩崎憲治氏も実力を発揮した。最優秀賞の次の作品は力が落ちるものだが、今回の作品はそれを感じさせなかった。むしろ題材を「空手」というスポーツに置き、ゲーム会社のクリエイターを主人公にすることによって、前回の野生世界とは全く異なった世界の舞台構築に成功している。現代の素材も創りあげることのできる幅の広い領域を有していることに驚かされる。空手の試合や稽古の臨場感、またゲーム会社内部の直面する問題のリアリティなど、迫真力があり、最後まで一気に読ませていく。惜しいのは、ゲーム会社の創作に命を懸けるのは

選評

わかるが、それ自身の方向性や意味に触れていないのが、会社への忠誠度の枠に留まって、スケールの広がりが小さくなっている点である。それが最後の感動に高まっていかない惜しい読後感をもたらしている。タイトルもカタカナの分、弱くなった。しかし相変わらずの力量は十分感じた。

同じく安定した力量を示したのは、菊野啓氏の「妻のVT」である。これは設定が斬新でおもしろい。神経の難病に罹って寝たきりになった妻のために、遠隔カメラで外の世界を見せる、現代でなければできない視覚の旅が試みられる。「私」が車を運転し、隣の同乗者の頭にカメラを付けて、そのカメラに映る画像を寝たきりの妻が見て、バーチャル旅行をする。同乗者は日本語が話せる、雇われベトナム人で、そのヘッドに付けられたカメラに映る画像をそのまま妻が見て応答する、奇妙な臨場感が醸し出される。外部の新鮮な世界に画像を通して触れ、また四十年前に訪れた店に来て、そこで食事をしたりして、過去も新しい力となって、妻の内部を蘇生させる。決定的なことに、最後交通事故を起こし、自分もベトナム人も九死に一生を得る。それを妻が病床で見ている。それらの事件によって、延命治療を拒んでいた妻が、生きる契機を強く得ていくというストーリーである。原題の「一本杉」が今日的設定にそぐわず、改題してもらうことにしたが、問題の提起に比して、結末がやや調和的で弱い点、また交通事故の出来事があまりに大きくて、問題を消してしまうきらいがある点が、設定の斬新さを薄くしているのが惜しまれた。

オーソドックスな筆致の作品も、優秀作の重みを有していた。青木ガリアン氏の「雪かき男」も、ある交通事故を契機に駅付近の雪かきを黙々と続ける男の背景を辿って、奥行きのある構造を築いている。新聞記者の立場から迫る組み立ても、推理と検証を伴って、吸引力がある。最後にすべてが明らかになって、一つの社会問題を含んだ人間の温かみに到達する帰結は一篇の完成を得ている。何かが胸に残る作品である。

高橋惟文氏の「震災を越えて」は、常に安定したレベルの作品を生んでいる高橋氏の中でも指折りのもので、久々の三塁打の印象である。結婚間近のカップルが大津波によって、別れ別れになり、消息が知れないまま、女性は他の男と結婚して、子供まで設ける。しかし互いに未練を消すことができず、男は独身のまま女性を追い続け、女性は離婚する。男が新たに就職した会社の好人物の社長と、男に思いを寄せる女性社員の協力で、女性の居場所がわかり、再出発するというストーリーは、高橋氏ならではのあたたかいヒューマニズムに包まれて、心を結ぶものの成就が胸を熱くさせる。ただ、男に思いを寄せる会社の女性の処理が最後宙に浮いたままになってしまった点、またタイトルがやや大きすぎる点に、このままではベスト作品と言

い切れない未消化部分が残った。修正の上で掲載に踏み切りたい。

小笠原新氏も健在である。江戸時代に舞台を得た時代小説は、手堅い筆致で、最後まで濃密に読ませる。「上山宿始末」に流れるストーリーのうねりは、因果の起伏に富んで善悪・報復の糸を綾織っていく。江戸時代の藩政のあり方や大名行列の宿場の背後の景色など、臨場感も豊かで、生き生きと昔が蘇ってくる点も評価を得た。

奨励賞は、地味な領域を題材にしている作品に、輝きがあった。「大回り」（高杉晋太郎）は破綻した家庭とサラ金やアパート大家の請求から逃れる毎日の惨めな生活の中で、唯一の息抜きが電車に乗って巡る時間という、現代の下に埋もれた実相を描いて、共感が深かった。また「ゴーストバスター」（中野雅丈）は、新聞の校正の作業実態を克明に描いて、活字文化がこのような労苦の上に載っていることをあらためて認識させてくれた。「瑠璃の家」（松本昂幸）は、義足の老年生活が身に染みるタッチで、晩年の彩の一つを失う翳りを味よく描いている。

これらと根も共有していて、五十代以後の成熟した時期でなければ書けない結実を示して出色だったのは、「双眼鏡」（松本りゅうじ）である。人物の行動の契機が利欲であり、破滅に向かうしかない流れでありながら、なぜか胸に深く残るものがあり、読んだ翌日も、翌々日も登場人物の存在が脳裏に蘇ってきた。これは悪を犯しながら、その動機に人間として年齢や社会からの阻害に追われていく普遍的な人間の悲しさが底に波打っているからだろう。意外に胸に残るのはやはりいい作品の証左と思った。

ありそうで意外に書かれていないものに、老人ホームに追いやられる主体者の側の小説である。「独り、壊れていく」（高橋ひとみ）は、周囲からいやいや老人ホームに追い立てられて、そこで次々に主体性を奪われて「壊れていく」老年の一つの姿を、的確に筆にしている。老年にとっての幸せとは何か、あらためて考えさせられた。「弁財天マヤミ」（永田祐司）は、ステージⅣの膵臓癌を宣告され、インドで余生をと覚悟して渡航した地で、インド美人のケアと言葉に蘇生されるストーリーは、新機軸も示して、迫ってきた。「雨女」（室町眞）は、雨に祟られる女性の運命を軽妙に描いて、切れのある展開が機知を光らせている。「テロの源流」（風樹茂）は塾のベトナム人の同僚英語教師が、南ベトナムの母国が消えて行き場を失くし、その天才的物理学の才能を結局北朝鮮の核開発に投じる過程を描いて、素材の新奇さに鋭さがあった。しかしタイトルは大袈裟過ぎるかもしれない。「青春の彷徨」（折口真）は警察学校の訓練期間を記して、その挫折の中で落ちこぼれていく友を通して青春の影を摘出した。珍しい素材をよくものにした。佳作もかなり惜しい作品、もったいない好素材の作品も多く、言及したいが、今はすでに触れられないので、批評コメントの希望に託したい。一つだけ、神郷愛光氏の「ハープの調べに誘われて」は引きこもりの少年がハープ演奏会に行ったりすることを契機に、積極的な外へ出る過程を鮮やかに書いていて、魅力を覚えた。残念ながら他の選考委員の賛同が得られなかったが、筆者の弱者や虐げられる者への寄り添いには、底に深い優しさが漲っていて、共感できた。これを大事にしてほしい。

総じて、いい作品がたくさん集まって、文学の豊饒が感じられた今回の銀華文学賞だった。

入選

「鷹匠」　原口賢治
「青く染め」　切塗よしを
「ドライバーズライセンス」　ながのともこ
「存えて」　白峰　綾
「潮騒～真琴の純情」　北条かおる
「家族全員・精神科・更に夫婦別居」　横田　明
「おやじの嫉妬」　鈴木邦夫
「旅立ちの切符」　友　修二
「結婚しない」　九条之子
「パステル・パーク」　中庭昌樹
「秋子と雀と艦載機」　湖條登四季
「ロッキングチェアーとゆりかご」　木澤　千
「オンリー・ロンリー」　山本御覧
「ドドンパ」　松本　馨
「カスパの女」　竹中　寛
「夜を往く」　朝比奈豆杵
「JB」　寺内あきこ
「霧のむこうに」　東間征子
「警察署長の手控え帖」　梶川洋一郎
「万劫の花」　小野満志呂
「風を感じたとき」　山崎ゆのひ
「許してやる、と言え」　前岡光明
「ヒゲボウボウの空き地」　天野秀作
「渦」　雨原　歩
「未遂」　沢村　基
「右手」　邑崎龍哉
「雪鬼」　清畠美のり
「河畔の家」　鐸木英莉

※今回も力のある作品が多かったため、入選として賞揚させていただきます。

秀れた書き手の存在

小浜清志

毎回驚かされることであるが、こんなにも秀れた書き手が存在していることである。たまたま文壇への切符を得られなかったが、既存の作家と遜色のない方々が現実にいるという事実は日本文学にとって宝ではないだろうか。長年このような場に立ち会えたことは私にとって至福なことであった。これからも大勢の方が参加してくれることを祈っています。

私の印象に残っている「瑠璃の家」は登場人物と作者の間のとり方が絶妙で、夫から逃げてきた女性の表情すらすぐに浮かんだものである。小学四年になる娘と二人で暮らしている女性は主人公の建築設計の手伝いをしている。どこかで男と女の世界が現れるのかと期待していたが、ある日、別居中の夫が顔を出し、二人の関係をうたがわれる。暴力事件に発展しそうな迫力は素晴らしかった。せっかく五十枚の分量があるのだから作りきればもう少し深みが出たのではないかと思うと残念であった。

当選作となった「ぬくもり」は読みごたえのある展開と構成の技が秀逸であった。夢に生きることのむつかしさと挫折が痛いほど伝わってくる。多くの人が味わったことのある感覚を的確に描写している。作者がこれから出会う何かに感動することがあればその作品はもっと輝きを増すだろう。そして、読みたい。

昨年当選作になった筆者の「ブレイクスルー」は、昨年とはまったく趣を変え、空手にのめり込む坂上をそつなく描いている。どんな材料でも見事な料理に仕上げるコックのように、素材の良し悪しに限らず小説に仕上げる腕を身につけている。

「大回り」は人生の坂道をころがり落ちていく人間を哀しいほどに描いていて心にしみるが、どこかで救いが欲しかった。しかし筆力は確かであるから、身に合ったテーマを捜しあてれば豹変する書き手だと思う。この作品では書き出しの部分は不要ではないだろうか。

「震災を越えて」は何度も目にしたことのある作者でベテランである。歳をとっても作品作りはおとろえることなくきちんと感動を詰め込んでくるあたりは素晴らしい。

今回は豊作

大高雅博

今回は力作が多く、選考はかなり時間がかかるが、当選作はすんなり決まるかもという気がして臨んだ。

結果的には、やはりかなりの時間がかかったものの、当選作は、僕にはやや意外な結果に終わった。

当選作戸塚邦子さんの「父の回心」は、家族を置き去りにして外国で暮らした父の足跡を辿ることで、そうではなかったことがわかるという話だ。その外国が日本から遠いシリアである。シリアはイスラム国だと思っていたが、首都ダマスカスには聖アナニア教会があり、パウロが回心した場所であるという。父はそこでキリスト教の洗礼を受ける。娘はさらにマアルーラ村、聖シメオン教会等キリスト教に関係ある場所をめぐる。読んでいると行ってみたくなるような描写ではある。今回、この評を書くために読み返すと、アレッポという町の名前に気づいた。そして、この小説の年代が一九九六年であることに気がついた。

かなり経ってからシリアは内戦となり、二〇一六年政府軍を支援するロシア軍が反政府軍がいるアレッポを包囲し、これを殲滅した。この時の勝利の経験が、ロシアがウクライナを攻める一つの動機となっている。今はどう変わっているか分からない、より良きシリアがこの小説にはあるのだ。

当選作長野正毅さんの「ぬくもり」は、かなりの腕を持つギタリストだが、上手くいかず、挫折をする。ギターを教えた弟子と、その妹には作文を教える。小説は上手だと思う。ただ、主人公は、ギターを捨て単なるサラーリマンになっていて、弟子も羽振りの良い大人になっていて、弟子の妹は死んでいる。皆中途半端のままで、救いがない。そういう小説だからという意見もあったが、弟子の方は、一旦ギターを諦めるがたとえば、妹の死を境にして一念発起してプロのギタリストになったという方向もあったかもしれない。そして、再会した時に言うのだ。「僕は先生ほどの才能はない。だけど、病気であっという間に亡くなった妹のためにも、僕は輝く必要があった。だから、先生の何十倍も練習することにした。時間はあったし、僕は恵まれていたからね。先生に言われたことを思い出しながらね。先生、意外と本気で教えてくれていたんだね」と言うようなことも考えられる。ただし、これでは「ぬくもり」と言う題名は合わなくなるが。

優秀賞塩崎憲治さんの「ブレイクスルー」は銀華文学賞始まって以来の本格的な空手小説であり、塩崎さんの引き出しの多さには感服する。

優秀賞青木ガリアンさんの「雪かき男」は最初の頃、主人公の新聞記者が男かと思えたくらいで、後は文句がつけにくい作品である。点字ブロックの雪かきをする耳の不自由な男を巡る本当に良い話である。

時代物小笠原新さんの「上山宿始末」は何か資料があるのかどうか分からないが、物語としてよく出来ている。とても面白い。

優秀賞高橋惟文さんの「震災を越えて」は震災で別れ別れになった男女の話だが、これもとても良い話だ。この何作か、別のシチュエーションで、かなりの質を保ちながら良い話を描き続けられているのには感心する。僕は、個人的には特別賞をあげたい気持ちだ。

優秀賞の西村修子さんの「無垢なる子宮」は問題作。新人賞の「作品」、これから出てくる「一粒の実りを願って」と同じように、男では書けない作品になっている。これは女性から見えてくる性の話で、迫力はある。

奨励賞も力作揃いで、触れざるを得ない。

奨励賞の松本りゅうじさんの「双眼鏡」はピカレスク（悪漢）小説であるが、頭に残る作品。

奨励賞の中野雅丈さんの「ゴーストバスター」は、校閲者の話で、新聞の電子版の校閲で、題材が良い。

奨励賞の山田明さんの「マジックヒューズ」は不思議な作品だ。病院の夜間の調理室に勤める男、とキャサリンと呼ばれる看護婦。奇妙に心に残る作品だけど、話が終わっていない気もする。

奨励賞の四方康嗣さんの「ゲームの行方」は、弁護士資格を剥奪された男が、友人の娘が巻き込まれた事件を解決する。設定が面白く、作者は法律の知識があるらしく、それを生かして書かれている。

奨励賞の荘ユリコさんの「一粒の実りを願って」は、アメリカ人と結婚し、「周りのアメリカ人に倣い、ショートパンツを身につけて」「大股でぐんぐん前に進む」というようにアメリカで暮らしている三十七の彼女が、体外受精で子供を得ようとする話である。排卵誘発剤で三十七個採卵できたが、その後、三個ずつ「移植」するが上手くいかず、二回目で、妊娠が確認されたが、十四週で、消えてしまう。心が折れそうになるが、9・11の自爆テロが起き、再度挑戦し、採卵できたうちのあまり望みがないと思われたその一つが奇跡的に妊娠し、子供が生まれる。話は二十年後、息子が大学に入学し、家から離れていくことで終わっている。確かに報告書のようで、小説であるかと言われると自信はなくなるが、女性にしか書けない切実な小説だと思う。これが僕の今回の本命だった。結果はしかたがない。

最後に触れたいのは奨励賞の室町眞さんの「雨女」で、雨に祟られる女性の一生を描いている。面白い発想だし、最後も洒落ている。ただ、選考委員の全てを納得させる作品を期待したい。

以上の他にも面白い作品もあり、今回は豊作だったのだろう。その人にしか書けない場所を見つけた人が多かったのかもしれない。来年も選考委員を悩ますような小説を期待したい。

「気づき」と「受け継ぎ」

八覚正大

夏の猛暑酷暑激暑、それから急に気温が落ち、また好天が続き……一方コロナは姿を変容しつつまだ拡大し直そうとしたり……、あり得ないロシアの侵略戦争は延々と意地になっているかのように続き、壮大な国家と一人の脳との関係を（どんな地位についても一個の脳であることに変わりはない）否応なく見せてくれている。……かつて作家集団「塊」で、『チェルノブイリの祈り』を読書会に用いたことがあった。それはホロコーストを扱った例えば『ショアー』に似て、巨大な事象は一人の見解で覆うべくもなく、膨大な数の関係者の証言を並列させ、後は読者に委ねる形式（それしかない）だった。

群盲象を撫でる……コロナも戦争も、一人の人間が見切れるわけはない。だから想像の飛翔は芸術で広げ、具体的現実行動は科学を用いて着実に――その二足歩行こそ、人類（とその脳）を曲がりなりにも着実に歩ませ得るホモサピエンスの智慧ではないか、と考える昨今である。まだ冬にコロナ第八波が懸念される中、銀華文学賞選考会は無事行われた。以下感想を述べておきたい。

「ぬくもり」長野正毅

はじめ、この小説は〈一対一で教えるプライベートレッスン〉の中で、教える側の現役ミュージッシャンの主人公が、一人の少年に興味を持ち関わっていく、マイナーな小説のように思われていた。さもない淡い関り、〈ロックバーの店主が、彼と少年をゲイカップルだと勘違いしていた〉ような、評者もそんな感覚を捨てきれなかった。しかし、月日は流れ、少年は育ち世に名も出る。そして再会した時、主人公は〈軽くうなずき、そのまま戸口とは反対に少年に近づいて……周囲の連中が、突然視界に入ってきた初老の男を怪訝そうにながめ〉る中、少年を背後から抱きしめる……。それはラストの感懐に凝縮され、ここで一気にこの小説の姿がマントを翻したように（でも格好良さとは対極

の形で）現れる。〈最後の最後は、あんな形でしか表現できない感情が世のなかにはあるものだ。一週間たっても十日たってもひと月たっても。ぬくもりは残されていた。〉そしてそれが、淡くも関わった人たちとの〈奇跡の恩寵〉なのだと気づき、人気のない駐車場で静かに泣く……人生の真の事実に触れた瞬間だ、そして〈大きく口を開けるとかえって声を出さずに泣けるのだということを、生まれてはじめて知〉るのだ。この初老の「気づき」は人生を扱う文学のテーマとして見事に浮上した、田山花袋に触れるまでもなく……。

「父の回心」戸塚邦子

一読して、実に清々しいものを感じた。亡くなった父親は、かつてシリアのダマスカスに単身赴任していた。主人公はアラビア語学習のために在学していた東京の大学院を休学し当地のアラビア語センターに留学する。その一番の目的は父親の足跡を訪ねてみたいという思いからだった。その頃の父親は〈仕事第一の家庭など顧みない、いわゆる企業戦士〉だと思われていた。

帰国した生前の父親からは、かつてダマスカスで教会に行き、飛行機に乗り遅れた偶然から、墜落したそれに乗れず命が助かったことを聞かされたりする。そして彼の体験とパウロの回心が重なり合い、その教会で洗礼まで受けたことも。一方主人公も、その父の後を辿り、父に導かれて当地へ来る。その経緯も瑞々しく描かれ、〈仕事優先で子供たちの事など気にも掛けていないと思われた当時の父が、この聖アナニア教会で神に願った事は仕事の成功でも自分の出世でもなく〉自分たち子どものことだったことを知り、父親の大きな愛に改めて気づく……それから十年後、主人公は父親の思いを受け継ぐように東京の教会で洗礼を受けるのだった。

「妻のVT」菊野　啓

定年退職し、年金が入るようになった矢先、凶事に見舞われた夫婦の話。妻が神経系の難しい病気に掛かったのだ（ALSか）。そこから、偶然見つけたサイトから不思議な、VRを用いた「試み」に入っていく。それは妻とオンラインでつながりながら、間にその会社で雇っているベトナム人の二十歳の実習生を入れ、彼女と主人公が実際にドライブをし、妻もリアルタイムで関わらせるというものだった。

その近未来的試みの発想は斬新さを感じさせ、不思議な関係、主人公の回想の瑞々しさなどに惹かれて読み進めた。〈「ふう、何だか疲れたな。家に隠っていたから足腰が鈍ったようだ」横にいるヒエン（実習生）にこぼしたが、頷いたのは自宅にいる夏子（妻）だった。〉そして、かつて妻と行った「一本杉」というどん屋へ行く……つまり主人公が、身体的にはヒエンという若い実習女性の身体を通して、妻と記憶の旅に出、妻もオンラインでそれに同行しているというわけだ。そして〈自分がすっかり忘れ去っていた場所で、細い糸のように連綿と続いていた『時間』を、何だか愛おしく思〉う。

ラスト、ドライブ中の車は事故に見舞われる。気を失ったヒエンがしかしなぜか動き夫を助ける、その時夏子は祈るしかないと念じつつ、自分の身体がその状況に入り込みヒエンを動かしたという不思議な感覚を持つ。それは〈ヒエンの助けを借りれば、夏子は閉じかけた自分の世界を、しばしの間ほんの少しだけでも取り戻せる。……人間の命は有限だが、その思索に限界はないのだ〉という主人公の気付きも促すに至る。どんな状況になっても生きている意味を模索する――その人間の可能性を描いた出色の快作だと感じられた。

「ブレイクスルー」塩崎憲治

〈大手ゲーム会社でノベルゲームのシナリオを描いていた〉主人公、しかし突然スランプに陥る。〈アクションゲームのシナリオライターとして復活するには〉何かが必要と感じる。そして偶然、空手道場に関わることになる。それからはとにかく空手三昧の境地になり、これでもかと空手に励んでいく、その描写はなかなかだ。ラストは〈本格的に空手ノベルゲームの製作が始まった。タイトルは「ブレイクスルー」暗く長いトンネルの先に、かすかな光が見えて来た〉と終わる。

「上山宿始末」小笠原新

時代小説、良く調べ、想像力も加味されている。思いのままに女を切り殺す上司と、それを成敗する厳格な侍、しかし彼もまた謀（はか）られ伐られてしまう、それを息子兄弟が仇討する……という上山宿での凄惨な過去の記録が再現される。刀という手近な武器によって、善にも悪にも凄惨な結末を生んだ時代の話である。結末にこうある。〈前の藩主は、信じ難いことだが、自ら手打ちにした数は百四十に上る。斬首、切腹、上意討ちを含めると、……何と三百名余の死者が出た。藩主の聡明さは時に果断となり、癇癪の強さは時に理不尽な過酷さとなって現れた。前者は美談として酒井家世紀に記された。だが後者は、後難を恐れて記す者はいなかった。わずかに、「……家日記、……家文書、……聞き書き」等の形で断片的に記されているのみである。……この話は主として池田家文書に拠っている〉と。作者の思いが込められている箇所と強く感じられた。

「雪かき男」青木ガリアン

その街には雪かき男と呼ばれる男がいて、彼を取材する女性記者があれこれ立ち回る話。途中まではミステリアスな部分も含め惹かれてはいった。〈雪が降ると駅前に現れ雪かきをする男と、その男にしつこく話しかける女。いつしか、この二人を街の人は、「雪かき男と話しかけ女」と

呼ぶようになった〉と。しかし、それは歩道の雪かきではなく、点字ブロックの雪かきをしていたのだと分かる。そして、後半絵解きが出て来る。県内で初めての点字ブロック、盲学校、視覚障害を乗り越えようと誓った二人……そして事故、加害者の男、雪によって点字ブロックが消されてしまったこと――そのために男が……内容のヒューマンな観点は評価するとして、なぜ推理的な仕立てを用いたのか。それは却って読み手の理解を遠回りさせたような気がする。

「無垢なる子宮」西村修子

美大に集まった学生たちの、若い性の目覚めと教授たちのどこか狡猾さ、揺れる気分、モデルへのまなざし、芸術的対象への考察……そこまではアーティストたちの青春の揺籃期として読めた。しかし主人公の出自と旧家族が、唐突というかバランスを欠いたように感じられた。〈サエコは実の母親が駆け落ちして出ていった直後、妙な病気に罹ったことがある。夏の風が鉄筋コンクリートの壁をすり抜けて冷たい風に変わり、全身が凍りつくような激しい寒さに見舞われるのだ。その感覚が今でも時々蘇る。〉とある。これが何なのか。また父親の後妻エミコ（主人公と年齢差もない）との葛藤（父親との性行為を見せつけるような）、それに対し、車のブレーキオイルに細工をし、そのため両親は事故死する（性行為の最中での死のような……衝撃的ではあるが、かつて某映画のストーリーに既視感はあるような）。そして父親と後妻との間で生まれた障害を持つ娘カナとの関り、その成長（初潮）が出て来る……。テーマと描写に鋭さ生々しさは感じられるが、世の重すぎるテーマが部分的に混在している感を否めなかった。

「震災を越えて」高橋惟文

この賞でも数々の受賞をされてきた作者。とにかく登場人物たちの情を交えたダイナミクスを描く名手。そして、毎回舞台設定を見事に変容させている。今回は自動車販売の世界、それに9・11の東北大震災を絡めてもいる。曲がったことは嫌いな車のセールスマンが、上司の嘘の隠ぺいに我慢ができず退社する。しかしまた拾う神もいて、彼と情を共にできる社長（わけ有って服役したことがある）とも関わりができ、その繋がりで離ればなれになっていた恋人とも再会できる。その彼女とは、車のフロントガラスのエアコン吹き出し口にボールペンの筒の中に入れた手紙を通し、気持ちを伝え合っていた……それをかつて言い争った上司が持っていて最後に詫びと共に差し出してくれる、小粋な技も冴えている。

「テロの源流」風樹茂

かつての下町の塾、そこで講師をする主人公、ニュージャージー出身の巨漢とベトナム出身の国費留学生の二人も、そこでアルバイトをしている。一方、集まってきた生徒たちは中学生ながら、柄は相当なもので、頭は良いがいい加減な態度で講師を馬鹿にしてくる者、講師を挑発する女子……など、悍ましさのリアリティがけっこう読ませ伝わってくる。そんなある種の「教育戦場現場レポート」のようにも感じられた。〈中学二年の教室からは講師のヒステリックな怒鳴り声のあとに、生徒たちの残忍な笑い声が聞こえてきた……新たな一四歳たちが、講師を自らの充たされない欲望のはけ口にしているに違いなかった〉と。

ラスト、後年、ある科学の学会の中に、ベトナム出身の元講師に似た顔を見た――というシーンは一瞬の救いに思えた。タイトルはちょっと伝わらなかったが。

「バイバイ、グッド・ラック」国梓としひで

沖縄の戦後間もなくの頃、黒人を父親に持つ少年が主人公の話。一人の仲間の少女がアメリカへ養女として行ってしまう。後年、映像作家として沖縄戦のドキュメント映像を収集する立場に主人公は育っている。とある閉館する映画館で記念上映があり、その際、病気に冒された姿のかつての少女が映っているのを発見する。当時流行っていた少年探偵団にあやかり、仲間として「センター少年探偵団」を結成し少女もその仲間にいたのだ。呼笛の音が確かに効いている……評者も、その歌は今でも時々歌っている（笑）。胸にしみる作品だった。

「マジックヒューズ」山田明

病棟の調理室での、調理師の男と日系三世の母とユダヤ系米国人の父をもつナースとのやりとり……。主人公は彼女から、手中に収まる古びた銀色のクルスを渡される。彼女の祖父は従軍牧師で、沖縄戦で護衛空母に乗艦していた時、マジックヒューズで撃ち落とされたカミカゼの青年が足元に倒れた……クルスはその機体の破片から加工して作られたものだと。……よく分からない小説だった、でもこのタイトルから発せられる「何か」が命の深い層を伝わってくる気がした。

「ゴーストバスター」中野雅丈

新聞記事校閲者の若い女性の話。その普通では見えない世界の仕事を淡々とよく描いている。データの部分が、不思議に新鮮だった。花結びの色の濃淡の誤植に気づいた場面もなかなかだった。

「独り、壊れていく」高橋ひとみ

認知症になった女性の思いを内側から描いている。この作者ならではの体験から来る臨場感が、伝わってくる。

「双眼鏡」松本りゅうじ

妻子を交通事故で亡くした男が、ギャンブルにはまり、女（ナミエ）の世話になっている。その女は火事が好きで、消防車の音が聞こえると部屋の窓を開け、双眼鏡で見まわす。一方男は、前に付き合っていた女と寄りを戻し新しい住まいに住もうと思い出す……ところが、その家が燃えて

しまう、〈そのときナミエの穿いているデニムのパンツから灯油の臭いがした〉。男はこいつが放火したに違いないと気づく――面白く作られた作品だ。

「青春の彷徨」折口真

警察学校の訓練生時代の話、ストレートに良く描けている。入隊試験の身体検査時、医者にペニスを掴まれショックを受ける。志を持って入ってきた同僚が辞めてしまい、それほど強い思いのなかった自分が残った事に、人生の不可解さを感じたりもする。ラストがある意味、警察官の集団の内面を垣間見せてくれるようだ。〈太陽の陽ざしを受けながら、胸元にツーと汗が流れていく。私は番犬に追い立てられる羊のように、分隊の動きに従って黙々と訓練に従事していた。しかし、心は彷徨える羊のままだった。見えない相手に向かってひたすら警棒を押し上げながら、その時ふっと、白衣の男に掴み取られたのは、私の肉体と魂の存在だと確信した〉と。

「セピアの渓」根岸幸晏

山に思いを掛けた女性の話、登山と情景の描写は中々だ。しかし、ストーリーとして、助けてくれた男性と不倫に走りその男性が自死に近い形で命を失っていくというのは、何か読んでいて湧きあがるものが感じられなかった。

「一粒の実りを願って」荘ゆりこ

人工授精の経緯が刻銘にひたすら記されている。小説としてより、実録的な感覚として優れているとは思われた。

「右手」邑崎龍哉

工務店の父親と、息子兄弟の人生。淡々とよく描けているとは思われる。視点を兄と弟と双方からのものにしている所に特徴を感じた。

「大回り」高杉晋太郎

小さな印刷会社をやっていた男。妻は入院し、子どもたちからは金を貸して欲しいとせがまれる。六十歳前で定職を失い、支給される生活保護費で細々と暮らす。糖尿病にもなり、妻も亡くす。それでも人生の元は取れた、生きているだけでありがたいと思う主人公、何という慎ましさ――に少し打たれた。

「怪雨」中崎紫紅

学生運動時代の話。仲の良かった、男性二人と女性の三人仲間、その人生の変遷を描いている。主人公は学生時代、小競り合いの中で警察隊に左足を殴られ、それが尾を引いて行く。それから結婚し、東京で家庭ももつ。かつての仲間だった男性は、企業ビルの爆破事件を起こし命を失った。一方女性仲間は司法試験に受かり検事になっていた。事実に近い話があるのかもしれないが、もう少しテーマが絞られることを期待したい。

「未遂」沢村基

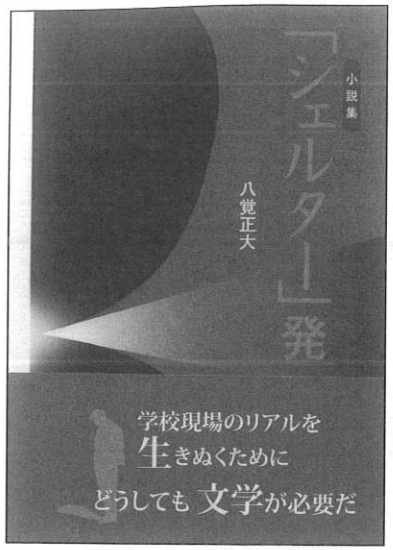
祖母と言っても後妻だったので、孫の主人公とは血が繋がっていなかった。主人公が幼い時、赤ちゃんの扱いを知らない祖母のため、空腹で死にかけたことがあった。祖母はそれをずっと悪く思っていた……大きな展開はないが命の繋がりは描けていると思われる。

「ある傷痍軍人の戦後」西山慶尚

友人の父親は傷痍軍人で、友人からその話を聴く主人公。状況はさすがの筆者、よく描かれている。その父親が、自分の幼い息子が赤痢で死んだときは泣かなかったのに、なぜか道で死んでいた猫を抱えて来て、上り口の板の間で号泣した、という話は印象に残った。

「雨女」室町眞

かつて雨女と言われた女性が、気象予報士になる話。力のある常連の筆者の、器用に造った作品と感じられた。



けやき出版　1500円（税込）

選考会風景　2022.11.8　「サロン・ド・八覚」にて

銀華文学賞 優秀賞

妻のVT（ヴァーチャル・トリップ）

菊野 啓

玄関のドアを開けると、青空に白い太陽が輝いていた。夏至の空気はじっとりとして、麻のシャツが重たく感じられた。狭い庭は雑草に被われていた。エノコログサの花穂が微かな風に揺れている。カーポートの扉を開ける耳障りな音が響いた。車の運転は一ヶ月ぶりだ。新型コロナウィルスが怖くて外出を控えていた。ネット通販で不自由はないのだが、今日は外出せざるを得なかった。

車は黄砂で汚れていた。何だか前より大きく見える。運転席に座ってみても、そのしっくりこない感じが消えなかった。シートの位置をずらし、ルームミラーを調整して、シートベルトを装着した。一抹の不安を抱きながらセルを回すと、エンジンはいとも簡単に始動した。助手席にはベトナム人女性のヒエンが乗っていた。彼女のシートベルトを確かめてから、糸田はそろそろと車を発進させた。

坂道をゆっくりと下り、点滅信号を左折しかけて驚いた。角にあったコンビニが閉店している。駐車場はトラ柵で封鎖されていた。糸田がこの団地に家を建てた三十年前から営業していた店だった。通勤していた頃は、毎日行き帰りに寄っていた。朝は出掛けにタバコとコーヒーを、夕方は弁当や菓子を買って帰った。その頃はまだ妻の夏子が働いており、娘がまだ小さかったこともあって、近くにあるコンビニは何かと便利だった。休日には親子三人で立ち寄った。急に経営が立ちゆかなくなったのだろうか？　団地から子供がいなくなり、めっきり人通りも少なくなっている。コロナのせいもあるのかもしれない。糸田は息を吐いた。

国道11号線を北上し、徳島ICから、徳島県と香川県を結ぶ高速道路、『高松鳴門自動車道』に乗った。上りも下りも空いており、舗装も真新しくて走りやすい。これならと糸田は自信を取り戻した。目的地まで一時間ちょっとというところだ。

「早くなったもんだ。昔は下手すると半日仕事だったのにな」

糸田は助手席のヒエンに声をかけた。

「そうね。この道が出来たのがいつだったかしら」

答えたのはヒエンではなく、彼女が付けているVR*バイザーのスピーカーだ。声の主は自宅のベッドにいる夏子である。

「さて平成何年だったかな？　もうずいぶんになる」

定年まで勤めた電気設備会社の高松支店に、徳島から度々出張していた頃は、一般道しかなくて大変だった。国道が混んでいて遅刻したこともある。高速の開通を待ち望んだものだが、今では年に一回も利用しなくなっていた。

「まるで宙を飛んでいるみたい」

「高速には珍しい対面通行だったのが、最近やっと四車線化されたんだ」

事故多発を受けて全線拡幅工事が成されている。しばらく制限速度で走った。

「右手に海が見えるわ。まるで本物を見てるみたい」

夏子が感心した声で言った。

彼方の靄（もや）の下で緑色の海がうねっている。

「津田の松原だよ。だいぶ慣れたようだな」

最初のうち、目眩（めまい）がしそうだと案じていたのも、どうやら杞憂に終わったようだ。

「徐々に視覚と聴覚が映像とシンクロしてくる感じ。何だか他人の身体に取り憑（つ）いた悪霊になったような気分だわ」

夏子の言葉には自虐的な色合いが含まれていた。

ヒエンはシートから背中を少し浮かせている。ヘルメットに近い形状のVRバイザーと、大判のマスクのせいで表情は窺えなかった。ずっと無言のままだが、イヤホンからは夏子の声が伝わっているはずで、指示に従って顔を動かしているようだ。ヒエンが見ている景色が夏子のVRバイザーに写し出され、周囲の音声も同時に伝わる仕組みになっている。

「こんなことが出来るんだな。便利になったもんだ」

依頼者は家に居ながら臨場感溢れる擬似旅行を体験することが可能だ。インターネットで知って、初めて利用するサービスだった。

「旅行のやり方が変わってしまうのかもしれないね。まだ

＊電子画像を送信・受信するためのカメラとイヤホンを内蔵したヘッドマウント・ディスプレイ

まだ進化するんだろう」

ガラケーしか持たない糸田は感心しながらも、どこか違和感を拭えず、よからぬ道に誘われているような抵抗を覚えた。

フロントガラスが陽光を銀色に反射していた。日曜日だというのに、行き交う車は商用車以外ほとんど見かけなかった。何だか急に人口が減ったような気がする。一年以上たつというのに、コロナの脅威がだらだらと続いていた。先月、徳島県は連続するクラスターに見舞われ、病床の使用率がうなぎ登りとなり、どうなることかと気を揉んだものだ。日々報告される感染者数に一喜一憂しているうちに、今はどうにか小康状態になったものの、期待のワクチンはまだ届かないし、予断を許さない状況が続いていた。そんな中、外出を敢行したのは、糸田の発案によるものだった。糸田には果たしたい約束があった。会社を定年退職し、再雇用の五年が過ぎて、厚生年金が入るようになった矢先、糸田夫婦は凶事に見舞われた。三つ年下の妻の夏子が神経系の難しい病気に罹ったのだ。病状は徐々に進行した。筋力が衰えて車椅子にも乗れなくなり、現在は寝た切りの状態となっている。人工呼吸器が必要になる日も近いのだが、夏子は頑なにそれを拒み、延命治療を拒否する由の誓約書を、今月中にも主治医へ提出するつもりでいた。

「指輪を買いに行こう。そう言ってたよな」

還暦祝いに指輪を買ってやるはずが、発病のどさくさに紛れて有耶無耶（うやむや）になっていた。

「買いに行くって？」糸田の突然の申し出に夏子はぽかんとした。

「インターネットで面白いのを見つけたんだよ。ちょっと話を聞いてみないか？」

偶然見つけたあるサイトのＨＰ（ホームページ）で興味を引かれ、メールで連絡をしてみた。すると山崎という担当者が状況の確認にやって来た。ＮＰＯ非営利活動法人『旅サポート・写楽』の本来の仕事は、高齢者や障害者の旅行に随行することだが、最近ＶＲ機器を使った新しい試みを始めていた。自宅から動けないクライアントの旅行を代行し、その視覚・聴覚・触覚などの情報をリアルタイムで伝えるのである。

「慣れたら自分の身体みたいだって、皆さん、感動しますね」山崎が自信ありげに言った。

「ダメ元でやってみようよ。嫌なら途中で器械を外しちまえば終わりじゃないか」

糸田は半ば一方的に夏子を説得した。そのサポート役に選ばれたのが、ベトナムから来ている外国人技能実習生の女性ヒエン・ヴァン・フエだった。

「日本語はまだ百点とはいきませんが、機転の利く頭のいい子だから大丈夫ですよ」

山崎が太鼓判を押した。今朝、山崎はヒエンを連れて来

て、二人に機器を装着した。

「操作は至って簡単です。このスイッチでイヤホンとスピーカーを切り替えるだけ。スピーカーを使わずに代行者に喋らせるのもありです。無理な動作でなければ、お客様の指示通りに代行者が自分の身体を動かします。最初はタイムラグに違和感があるかもしれませんが、そのうち息が合ってくると、阿吽（あうん）の呼吸で細かい動きが可能になって、まるで自分の肉体のように感じられますよ。でも、すぐには無理ですから、徐々に慣らしてください。たとえ失敗しても怪我はしませんから」

山崎の『肉体』という言葉に、糸田は生々しさを感じたが黙っていた。

「あっ、写った。すごーい」と最初は恐る恐るだった夏子が、子供のようにはしゃいだ。

「よろしくです。わたしいっしょうけんめいおてつだいします。なんでもいってください」

ヒエンは明るい声で言った。このあと、夏子が自分の声をスピーカーから出す方式を選んだので、ヒエンは黒子に徹することとなった。糸田は最初のうち、誰と話しているのか混乱したが、やがてそれも気にならなくなって、隣に座っているのが夏子のようにも思えてきた。しかし、彼女は二十歳の肉体を持つ外国人なのだった。

高松中央ＩＣまではあっという間だった。高速を下りて一般道を高松市の中心へ向かった。道はいつになく空いており、街が少し狭くなったように感じたが、それでも徳島よりは華やかな気がした。九十年代の初頭、バブルの最盛期、糸田の会社は多忙を極めた。特に高松市での仕事が多くあり、週の半分以上を営業所に泊まり込んだ。管理職だったために、毎夜得意先を連れて繁華街へ繰り出し、会社の金で派手に飲み食いした。日曜日はゴルフの接待に付き合い、盆暮れの付け届けを欠かさず、揉み手をしながら見積書を出すと、黙っていても利益のたんまりと出る仕事を受注させてくれた。しかし、そんな狂騒も長くは続かなかった。あっけなくバブルが崩壊し、その痛手から立ち直れずにだらだらと時間を食っているうちに、今度はリーマンショックで屋台骨をへし折られた。厄介なデフレスパイラルがどこまでも居座り、削りに削った利益は雀の涙ほどになり、それでもなかなか仕事を確保出来ずに、大勢の社員がリストラに近い形で辞めていかざるを得なかった。会社は日本経済の低迷に合わせて業績を落とし、青息吐息の低空飛行を続けた。それでもどうにか倒産には到らず、糸田が無事に定年を迎えることが出来たのは幸運だった。

目的地の高松三越百貨店に到着した。ここもいつもより人出は少なく、珍しく路面のコインパーキングに車を停めることが出来た。検温と手指の消毒を済ませて入店し、エ

スカレーターに乗った。スピーカーから夏子の声がするが、館内に谺して聞き取れなかった。ヒエンは邪魔っ気な機器をものともせず、軽やかな足取りで付いて来る。今はまだ大仰なVR機器も、今後は驚くほど小型化され、そのうち眼鏡の一部になるそうだ。いずれ携帯電話みたいに必需品になっていくのかもしれない。お目当ての宝飾店は五階にあった。

「指輪を見せて貰えますか?」

ガラスケースの向こうに立っている女性の店員に声をかけた。

「はい。どのような物をお探しでしょうか?」

ヒエンの出で立ちを見た店員は、不織布のマスク越しに一瞬戸惑いを浮かべたが、すぐに普段通りの接客に戻った。

「真珠が付いたやつがいいんです」ヒエンと立ち位置を替わりながら糸田は言った。

「リングはシルバーとゴールドのどちらがお好みですか?」

「シルバーの方を。冠婚葬祭にも使えるから」

そう答えたのは、ヒエンのスピーカーである。糸田は葬儀と聞いてドキッとした。

「真珠の色が何種類かございます」

「色はオーソドックスな白でいいわ」

やりとりの方式を理解した店員が、いくつかの商品を提示してきた。

「いかがでしょうか? 当店の真珠は国産の極上品のみを使用しております」

「よく光ってきれい。触ってみていいかしら?」

「どうぞどうぞ。ぜひ嵌めてみてください」

手に取ったのはヒエンである。左手の薬指に嵌めようとしたものの、指輪のサイズが小さすぎて入らず、小指で再度試してみるが、それでも無理で指に重ねて見せた。

「どれも素敵。目移りしちゃうわね」

イヤホンから指示が出ているらしく、ヒエンは次々と品定めしていく。その態度は平静だが、指先に少し緊張が見て取れた。おそらく真珠の指輪に触れるなど生まれて初めてなのではないか? ヒエンのプロフィールには、ベトナム南部の町で生まれ育ったとあった。どんな夢を抱いて日本へ来たのだろう? 外国人技能実習生について、糸田はネットで調べていた。三年間の実習制度を利用して、毎年大勢の外国の若者たちが来日している。中でもベトナムからが最多で、彼らの多くは貧しい家の出身であり、来日のためには母国の送り出し機関から多額の借金をしているそうだ。三年間の実習中に給与で返済せねばならず、日本での生活は決して楽ではないらしい。糸田は純朴そうなヒエンに親近感を抱いたが、同時に分不相応な優越感にバツの悪さを覚えた。

「どれがいいと思う?」と夏子が糸田に聞いてきた。

「さあてね。気に入ったのにすればいい」

大きさがまちまちの真珠がボードの上に並んでいる。どれもやたらと眩く輝いているのは、天井から差すLED照明のせいか? 何よりまず価格が気になるが、値札の米粒みたいな文字が読めるはずもなく、かといって手を伸ばすのも気が引けた。

「迷うわね。どうしよう?」と夏子は別のタイプを幾つか吟味したが、結局決められず、少し疲れたからと言って、一旦そこから離れることになった。

エスカレーターで一つ下の階に下りた。休憩用のソファがあったので、ヒエンと並んで腰掛けた。そこは婦人服売り場で、マネキンが落ち着いた雰囲気の洋服を纏っていた。今後夏子がよそ行きの服を買うことはないだろう、と思うと寂しかった。

「少し休んでいる間に、どの指輪にするか決めておいてくれ」

聞こえなかったのか夏子は答えなかった。糸田はぼんやりとフロアを眺めた。ちらほらと客はいるが、そのほとんどが自分のような高齢者だった。

「デパートも売り上げが落ちて大変そうだな」

糸田は閑散としたフロアを見渡しながら、いつも数字との戦いだった現役時代を思い出した。会社勤めをしていた頃は、毎月の売り上げを少しでも上げるために奔走したものだ。しかし、それは社会情勢によって大きく左右され、潮目の悪い時にはいくら頑張っても個人の力ではどうにもならなかった。今回のコロナ騒ぎにおいても、業種によって大きな差が出ているようだ。時短や酒の提供禁止を要請された飲食店、人流を抑制されて客の激減した運輸業や旅行業に携わる多くの会社、それらを筆頭に、他にも数多のサービス業が、思いもかけない業績の悪化に直面している。そこの社員たちはどんな気持ちでいるのだろうか? 正社員でも自宅待機となり、月給や賞与が減らされたり、他の会社への出向を余儀なくされていると聞く。非正規社員が更に過酷な状況にあるだろうことは想像に難くない。若い現役世代の人たちが割を食うのは今も昔も変わらない。若者たちから搾取される安価な労働力が、国の傾いた経済を立て直すために必要とされるのだ。政府が様々な支援策を打ち出しているものの、目詰まりを起こしているようで、効果を上げているとは言い難い。バラまきとしか思えない一律の支援金を自分も受け取ったが、それが果たして妥当だったのか? 国の借金ばかり増やして大丈夫なのか? この国はこれからどうなっていくのか? 行く末を案じてはみても、最後の年金逃げ切り世代かもしれない糸田にとっては、些かの罪悪感はありこそすれ、所詮何もかもが

他人事なのだった。
久しぶりの遠出のせいか、肩に余分な重力を感じていた。
「ふう、何だか疲れたな。家に隠っていたから足腰が鈍ったようだ」
横にいるヒエンにこぼしたが、頷いたのは自宅にいる夏子だった。糸田はバイザー越しの視線に触れると、鳩尾の辺りがすうっと冷える気がして、逃げるように腰を上げた。
「ちょっとトイレに行って来るよ」
前立腺肥大症を持つ糸田は小便が近かった。用を足していると、同年代の男が入ってきて隣り合わせになった。男は藍染めの布マスクをしており、長身痩躯を麻のスーツに包んでいた。その着こなしがずいぶんとお洒落に見えた。男とは、目を合わせることすらしなかった。お互いに距離が近いことに遠慮を感じている。男は用を足すと、アルコールのポンプをぷしゅっとやり、蠅のように手を擦り合わせながら出て行った。糸田は黄色い素麺みたいな小便を、よく磨き込まれた便器に放った。尿道が縮かんでいて、いつもより時間が倍以上かかった。そこら中に目に見えないウィルスが付着しているかと思えば気色が悪かった。わざわざこのタイミングでデパートに来たことを、糸田は後悔し始めていた。それでも妻のために指輪を買いたかった。ハンカチで手を拭きながらヒエンの元へ戻った。
「どう？　どれにするか決まった？」
「やっぱりやめておくわ。いい気晴らしが出来ただけで十分」と夏子があっさりと言った。
「そんなこと言わずに、せっかく来たんだし。どれかに決めちまったらどうかな」
糸田が粘ってみても、夏子は頑なに譲らなかった。しかたがないので地下の食品売場へ寄り、土産に『大寅屋の小豆ぜんざい』を買った。これなら夏子も食べられるだろう。夏子は嚥下の力が弱ってきていた。症状が着実に進んでいるのだ。今日出来ていたことが、明日には難しくなっている。まるで赤ん坊になっていくみたいだと夏子は嘆いた。なんで自分だけがこんな病気になったのか？　何か悪いことでもしたか？　たった一度だけ夏子は、糸田に向かって不満をぶちまけたことがある。糸田は何も答えられなかった。夏子の悲憤は糸田を通過して、日焼けした壁紙に吸い込まれた。

駐車場の車に乗り込むと、今度は狭くなったように感じた。ハンドルがやたらと近くてシートの位置を後ろにずらした。ヒエンはVRバイザー越しに周囲を観察していた。その視覚情報が夏子に送られている。間接的に夏子が見ている風景と、糸田が見ている景色は同じなのだろうか？　そんなことを疑いたくなるのは、朝からずっと糸田に付き纏っている違和感のせいだ。現前する世界がどこか作り物

の気がした。
いつの間にか雲がせり出していた。大気はずっしりと重く、皮脂を焦がしたような匂いを含んでいる。天気は猫の眼のように変わっていた。何だかいつまでも覚めない夢の中にいるような気がしてくる。そんな錯覚を嗤いつつ、駐車場から車を出した。徳島方面へ戻るつもりが、右折禁止になっており、後ろの車に急かされて左折してしまった。すぐにUターンするはずが、適当な場所が見つからず、そのまま走り続けて大通りへ出た。そこをまた左折して栗林公園方面へ向かい、大きな交差点で国道11号線に乗るつもりで走った。
「ねえ。この道って、まっすぐ行くと塩江温泉じゃないの？」と夏子が聞いてきた。
「そうだ。まだ高松鳴門道がなかった頃は、いつもそっちから来てたよな」
新たな高速道路が開通する度に、徳島から高松へのルートを変更してきた。何年前だったか、徳島県と愛媛県を結ぶ『徳島自動車道』が出来た時は、高松へ来るのにも途中までそれを使い、脇町ＩＣで下りて県道を走った。少しでも高速を使うと早かったのだ。
「数え切れないくらい、何度もその道を通ったわよね。なんだか懐かしい」
夏子が宿舎の掃除をしに来ることも度々だった。糸田と一緒に車で徳島から高松に来て、用事を済ませたら列車で帰るのである。
「うん。何歳くらいだったっけ？　すっかり忘れたな」
自分も妻もまだ若かった。新しい道が造られて、それまでの道をぱったりと通らなくなり、やがて記憶からも薄れていく。当時その道から眺めた、どこと言って珍しくもない風景が、今はどうなっているのか、ついぞ脳裏に浮かべることもなかった。それは今もそのままそこにあるはずだが、完全に忘れているなら存在しないに等しい。実在したのかどうかも疑わしくなってくる。
「うどん屋さんがあったよね？　なんて店だったかな」と夏子がもどかしげに言った。
「確か……『一本杉』」最近とみに物忘れのひどい頭に、記憶の断片がキラリと光った。
「そう、それ。ちょっと変わった店名の。さぬきうどんのお店」
「よく食べたよな。釜揚げがうまかった」
「おでんや稲荷寿司も美味しかったわ」
「まだやってるかな？　あの店」
「さあ、どうかしら？　えらく昔だから」
「どうせ暇だし、このまま塩江経由で帰ってみようか？」
大きな交差点に差し掛かっていた。
糸田は左に切りかけたハンドルを戻して直進した。隣の

車線を併走していた車のドライバーが咎めるような視線を向けてきた。何だか漠としたものにたぐり寄せられているような気がする。それは期待とどこか不安を伴っていた。

晴天だったのが、急に曇り、どうやら夕立が来そうだった。日暮れにはまだ少し時間があった。車は四車線の県道を、空港のある郊外へ向けて進んで行った。両脇に様々な量販店やファストフード店が立ち並ぶ大通りを過ぎると、道は走りやすい二車線となった。

「変わったような、変わってないような……」

コンビニが出来ていたりするが、車窓からの景色には既視感があった。

「確か、小学校のそばだったよな？　なんて言う小学校だったか？」

注意してうどん屋を探した。

「近くに郵便局もあったんじゃない？　この道沿いの左側だったのは確かだけど」

塩江まで3㎞とあり、芦原郵便局の前を通過した。

「郵便局はあった。でも学校は？」

「ないわね。少子化で学校もなくなったとか？」

塩江温泉を越えたら、すぐに徳島との県境となる。それまでにうどん屋はあったはずだ。

「あ、あった。学校」食い入るように外を見ているヒエンのVRバイザーから声がした。

「塩江小学校・中学校とあるな」

「その隣に空き地があるわ」やや興奮気味の声が車内に響いた。

「これか？　ここだったか？」

砕石で被われた正方形の空き地は、ちょうどかつてのうどん屋の広さに思えた。

「間違いなさそうね。きっとこれだわ」

「やっぱり潰れたんだ。しょうがないな。コロナだし」

「そうよね。四十年近くたってるものね」と夏子が落胆した様子で言った。

「何もかもがどんどん変わっていってるんだ。変わらない方がおかしいよ」

誰に言い訳するでもなく糸田は言った。

「そうだよね」私たちだって、という言葉が続くのかもしれなかったが、夏子は口をつぐみ、二人は気まずい沈黙に落ちた。

やがて塩江温泉郷に差し掛かった。ここだけ少し活気があるが、かつてのように混雑はしていない。古い温泉ホテルの大きな建物が、昔とほぼ同じ姿で川向こうに聳えていた。

「あのホテルは営業しているようだな」

やっと休みにした祝日を利用して、家族で一度だけ泊

まったことがあった。あれは娘がまだ小学生の頃だった。何もなくて子供には退屈だったようで、浮かない顔をしたのを覚えていた。その子供も成長して今は親元を離れ、遠い異国の地で暮らしている。そこで仕事を見つけて生涯の伴侶も得た。たまに帰国していたのが、昨年からの新型コロナウィルスのパンデミックでそれも叶わなくなった。時折、難病を抱える母親のことを心配して、パソコンで様子を伺いに来る。モニター越しの対面も慣れてみれば、電話より遙かに身近に感じられる。便利になったもんだと糸田は思う。高速道路もそうだが、インターネット通信にしても、その恩恵は時間と距離の短縮だろう。それらは時空をうまく折り畳んでくれる。取りも直さずそれは糸田の世界が四次元の拡張をしたのと同義である。便利になったもんだと繰り返し思う一方で、相変わらず自分が立っているのは、今しかないし、ここでしかないのにな、と負け惜しみに似た感慨を抱いた。未来へ行くことも過去へ戻ることも許されず、刻一刻変化する現在にしがみつき、全てが忘却の彼方へ飛び去るのを見守るしかないのだ。

「色んなことをすっかり忘れちゃってるよなあ」

糸田はぼやきながらも、家族で訪れた温泉旅館での一夜を話題に上らせた。

これまで糸田は自分は運がいい方だと思っていた。偶然にもこの日本という穏やかな気候を持つ国の、しかも平和な時代に生まれた。いきなり爆弾が降ってくることも、無理矢理戦争に駆り出されることもない。格差と言ったって、ほとんどの中学生がスマホを所持し、生活に困ったら行政の支援だって受けられる。多くの者が似たり寄ったりの物を食べ、冷暖房の利いた部屋で寝られる。特に自分は、そんな豊かな国の国民として七十年近くも生きてきて、たまたま大きな災害にも遭わず、これといった大病もしてこなかった。そう裕福というわけではないが、小さな家を買うことも出来て、定年退職後は年金で暮らせている。いつどこに生まれるかは、自分では選べない。それは『運』としか言いようがない。

その運に裏切られたと思うのは、妻が病気になったからだ。糸田にしてみたら、我がこと以上に苦しかった。何だか最後に帳尻を合わされた気がする。ひょっとしたら運の総量というのは、人によって大差ないのかもしれない。どうせそうなら、糸田の望みは、少しでも妻の苦痛を軽くしてやることだった。

「左へ行けば香川県の三木町だって。ここから先が徳島県か」

気怠い疲労で目がしょぼしょぼした。夏子との会話は再び途切れ、ヒエンは静かに車窓からの景色を眺めている。じわじわと夕闇が迫ってきていた。糸田は急ぐでもなく車

を走らせた。手が届きそうに低い雲が厚みを増し、ぽつりぽつりと大粒の雨が落ちてきた。斑に濡れた路面はムッとする湿気を立ち上らせている。ゴムの硬化したワイパーがきこきこと音をたてた。道は急なカーヴが続いており、ミュー（摩擦係数）の低くなった路面に前輪の接地感が薄くなった。糸田は前方を見据え、ハンドルを握る手に力を込めた。

と、その時だった。

「あった。一本杉」

突如として目の前に、二階建ての店舗が現れたのである。道の向かいの看板には、確かに「一本杉」と書いてあった。入り口にはくたびれた暖簾（のれん）が掛かっており、どうやら営業中のようだ。糸田は咄嗟にハンドルを切って、店舗脇の駐車場に車を滑り込ませた。

「そうか。徳島県だったんだね。うどんの店だから香川県だとばかり思ってたよ」

小学校もちゃんと隣にあった。校門の木札には『清水小学校』と墨書されていた。

「さぬきうどんじゃなくて、『徳島名物たらいうどん』って書いてあるわ」

夏子の声でヒエンが看板を指差した。発語から一連の動作が淀みなくスムーズになっている。慣れたら自分の身体みたいに動かせますよ、と山崎が言っていたのを思い出した。

「なるほど。思い込みって怖いよな」糸田は感心したように言った。

「まだやってたんだ。前とちっとも変わってないよね」夏子の声が弾んだ。

「ほんとに。まるでタイムスリップしたみたいだ」

店構えも、駐車場にあるトイレも、何一つとして変わっていなかった。

「信じられない。何十年もたってるのに」

「どうする？　寄ってみる？」

「ちょっと早いけど夕食にすればいいじゃない。よかったらヒエンさんも」

夏子の声はヒエンにも届いているはずだ。糸田が誘ってみると、その日初めてヒエンは自分の声で、「はい。ありがとうございます」と返事をした。

藍染めの暖簾をくぐって店に入ると、「いらっしゃい」と元気のいい声がかかった。夫婦でやっている店で、小太りの女将さんには見覚えがある。「アルコール消毒をお願いします」と言われてポンプを押すと、ぬるっとする液体が出た。「どこへでもどうぞ」と招き入れられ、右奥の隅っこの席に、ヒエンと向かい合って座った。他に客は白髪の老爺が一人だけで、こちらに背を向けて座っていた。店のテレビがコロナ関連のニュースが本日の感染者数を報せて

いる。きつねうどんを食べながら、老人はそれを無表情に見ていた。

「変わってないね。驚いたよ」糸田は店内を見回しながら小声で囁いた。

机や椅子の配置だけでなく、店内に置かれている物も全く同じだ。入口すぐの場所で、夏だというのにおでんが煮えている。テレビの下の棚には、スナック菓子が置かれていた。ガラスケースに並ぶ皿は稲荷寿司だ。厨房では、白い上っ張りを着た店主が、湯気の立つ大鍋を掻き回している。こちらも頭が白くなっているが、そう代わり映えしなかった。唯一前と違うのは、狭いテーブルに置かれたアクリル製の衝立だけだった。

「何に致しましょう？」小太りの女将さんが水のグラスを運んで来た。ヒエンのＶＲバイザーを珍しそうに見ていたが、取りたてて何も言わなかった。

「私は釜揚げ、いや、たらいうどんと、おでんを貰います。君は……？」イヤホンで夏子と話しているヒエンに聞こうとして、どちらに話しかけたらいいのか迷った。

「わたしはなんでもいいです」とヒエンが言ったが、夏子に答えたのかもしれなかった。

「じゃあ、こっちは天ぷらうどんを。おでんもね」ＶＲバイザーが夏子の声で注文した。

「たらいうどんは少しお時間をいただきますがよろしいですか？」

メモを片手に女将さんが聞いてくるので頷いた。

「うどんは一玉でいいですか？」

昔は一玉どころか、三玉をぺろりとやっていた。

「うーん。どうしようかな。君はどうする？」

最近胃の調子があまり良くなかったので、迷いながらヒエンに話を振った。

「ひとだま？　さんだま？」

怪訝そうに首を傾げるヒエンに、何のことか夏子がイヤホンで教えている。

「わたしはシングルでいいです」とヒエンが自分の口で言った。

「じゃあ私も一玉で。君は稲荷寿司も取ればいいよ。ここのはすごく美味しいから」

「おでんはご自由にお取りください。あとで個数を教えてくださいね」

女将さんは注文を書いたメモを、店主が見られるようにカウンターに置いた。

「おでんを取りに行こう」とヒエンを誘って椅子を立った。

四角いおでん鍋の中に、よく染みた卵や厚焼きやコンニャクなどが並んでいる。今日も大分売れたのか、どれも半分くらいに減っていた。真っ黒い出汁はとろりとして、串に刺した牛すじ肉から出る脂を浮かせている。ひょっと

してこの出汁は、四十年以上前から注ぎ足しながら使ってきたものか？　毎日少しずつ足しているうちに、僅かに内容は希釈されながら置き換わっていくのだろうが、０点０００００００……数パーセントは、同じ物が残っている道理だ。人間だって死んだら土に還るが、その成分は地球の一部として残存し続ける。人間もおでんと一緒だな、と糸田は苦笑いしながら卵とコンニャクを皿に取り、ヒエンに玉杓子を渡した。そして、自分がすっかり忘れ去っていた場所で、細い糸のように連綿と続いていた『時間』を、何だか愛おしく思った。

「どうぞ。お待たせいたしました」

女将さんがヒエンの前へ、天ぷらうどんと稲荷寿司を置いた。

「へい、お待ちどう」

茹でたてのうどんが入った盥は、出汁猪口と一緒に店主が運んで来た。

「おお、これだ、これ」

テーブルを埋め尽くした豪勢な食事を見ながら箸を割った。

「熱いので気をつけてくださいね」

店主が白いゴム長靴をカポカポいわせながら下がった。

「わたしおいしくたべられます。ぜんぜんだいじょぶです。ほんとにありがとございます」

ヒエンは何度も礼を述べてから、箸を器用に使って海老の天ぷらを裏返したり、稲荷寿司を持ち上げてみたりと、まずは夏子に細部を見せてやってから、遠慮がちに食べ始めた。

「相変わらずいい味してるな」

薬味の生姜と葱を入れた甘辛い出汁にくぐらせて食べる熱々のうどんは旨かった。糸田は朝から何も食べていなかった。一玉をあっさりやっつけ、おでんを食べてしまうと、まだ足りずに稲荷寿司も注文した。しかし、一つ食べた時点で、やっぱちょっと過ぎるなと思い直し、残りを若いヒエンに勧めた。

「ありがとうございます。わたしそれルームメイトにもってかえっていいですか？」

ヒエンはうどんに乗っていた天ぷらも皿に取り除けている。持ち帰り用のセルロイド・パックがカウンターに備えられている親切も、四十年前と同じだった。

「いいけど。なんならもっとどうぞ」

糸田が稲荷寿司をもう一皿取ってやると、ヒエンは嬉しそうにそれらをパックに詰めた。

「さすがに味は分からなかっただろう？」と糸田は冗談交じりに夏子に聞いてみた。

「不思議なことに、食べたのはヒエンさんなのに、私もお腹がいっぱいになっちゃった」

夏子がスピーカーから答えた。ヒエンが顔を上げる動作の自然さに加えて、唇が動いてさえいるのに感銘を覚えた。『仮想現実の暴走』という言葉が脳裏をよぎったが、ともあれ満腹になった糸田はいたく満足して金を払った。暖簾をくぐって外へ出ると、周囲は暮色に包まれていた。雨が本降りになっており、二人は小走りで車へ戻った。

「ちょっと疲れたから休むわ」

スピーカーの声が萎れていた。ヒエンはＶＲバイザーのスイッチを弄り、夏子との交信を中断した。ゴーグルを上げて顔を見せると、深い鳶色の瞳を瞬かせた。

雨の中に車を出すと、狭い車内にふわりと酢飯の香りが漂った。

「これありがとうございます。ともだちよろこびます」

ヒエンが足元に置いたトートバッグを指して言った。

「その子も技能実習生なの？」

「はい、ベトナムのおさななじみです。おなじひににほんへきました」

「君とは違う会社に勤めているの？」

「はい。せんいぎょうかいのかいしゃにつとめてます。こどもやごふじんのようふくをつくるはずでした。でも、いまはふけいきでタオルばっかりぬってます」

「製造業はどこも大変だって聞くよね」

「ともだちのかいしゃコロナでしごとがへってやすみになりました。ともだちきゅうりょうもらえなくなってとてもこまっています。しおくりできずにしゃっきんもかえせません。たべるものもかえなくておなかすかしてます。ひこうきがとばないのでくにへもかえれません。こんなことになるなんておもってもみませんでした」

国策で日本が迎え入れたのに、なぜそんなことになるのか？　糸田は政府の冷淡さに憤りを覚えたが、どんな言葉で慰めたらいいのか分からなかった。

「なるほど。それは一大事だな」

それでつい間抜けなことを言った。赤面しながら降りしきる雨を透かし見た。また少し車が大きくなり、道幅が狭くなったような錯覚が戻ってきている。

「わたしはとてもラッキーでした。まだしごとをつづけられます。ほかのこたちはどうしようもなくなっておおくがしっそうちゅうです。にほんにいるほかのともだちをたよってちらばりました。そうしなければごはんがたべられないからです。せいふもビザのとくれいをだして、たんきのあるばいとができるようになりましたけど、なかなかしごとはみつかりません。たまにしごとがあってもちゃんときゅうりょうをはらってくれなかったり、かいしゃでいじめられたりしてつづかないこともあります」

搾取という言葉が浮かんだが、口にはせずに飲み込んだ。情けないことに、どちらかと言えば、自分はそれをする側

の人間に属していることになる。都合が悪くなれば平気で人を使い捨てにする。そんなのと地続きの恩恵に与っているのだから自分も同類だ。

「おおくのがいこくじんはろとうにまよっています。おかねがないことがこんなにもつらいことだとおもいませんでした。きぼうにもえてにほんへきたのにうらぎられてしまいました。にほんのひとはみんなおかねもちでしょう。どうかだれかにたすけてほしいです」

初対面に近い自分にこんなことを言うのは、おそらく相当に切羽詰まっているのだろう。

「こんな状況でも金持ちはますます金儲けしてるというじゃないか。格差の拡大と貧困の固定化だって？　なぜそんなことが起こるんだろう？　この世の中、何かが狂ってるよな」

糸田はおざなりに当今の時世について非難めいた言葉を口にした。コロナ禍にあっても、何故か株価は上がり、日経平均はバブル後の最高値を更新し続けている。巷では余った金が行き場を探し、高級時計や宝飾品がかつてない勢いで売れているそうだ。何かがおかしいと思っても、糸田は自分のことを、物陰に潜む老いた草食動物みたいに感じている。若いうちは自分だって身を粉にして一生懸命働いた。この先、この国のために出来ることが何かあるだろうか？　強いて挙げるなら、国民の血税を浪費しないうちに、ピンピンコロリで早く死ぬことくらいか。世の風潮に不条理を感じながらも、糸田にあるのは衰退と諦めだけで、義憤を振りかざして何かに物申す気力は残っていなかった。

「わたしにはどうすることもできません。でも、にほんじんはわるいひとばかりではないです。にほんにもたくさんやさしいひといます。いまのかいしゃのしゃちょうさんみたいないいひとをたくさんしっています。わたしとてもかんしゃしてますし、にほんのことがだいすきです。だからにほんにできるだけながくとどまってしごとをしていたいです」

ヒエンは潤んだ瞳で善良そうに頬笑んだ。

糸田は後ろめたさを感じ、ヒエンと話している間中、宙に眼を泳がせていた。

「怖いの。暗闇に一人取り残されるのが」と夏子は言った。

耳は聞こえるし眼も見えるのに口は利けず、身体は指一本も動かせない。意識はしっかりしているのに、一切の意思表示が不可能になる。やがて肺や心臓など、全ての筋肉が麻痺して死に到るのを待つしかない。夏子が患ったのはそんな神経系の難病で、薬も治療法も見つかっていなかった。そのことを知った時、糸田は身を切られるように辛かった。何万人かに一人の割合でなるのだと言うが、よりによって何故妻が？　やり場のない怒りが湧いた。夏子が延命治

療を拒否すると言った時、糸田は叱ってまで翻意させようとしたが、その意志が固いと分かると、終いには縋って懇願した。闇に取り残されるのは自分も同じだ。妻のいない世界など想像してみたこともなかった。

「きちんとさよならを言えるうちに、あなたに看取られて死にたいの。それが最後の望みよ」と夏子は言った。「それまでの時間を出来るだけ有効に使いたい」と言われ、狼狽えた糸田が思いついたのが、今回の外出だったというわけだ。

雨が強くなったり弱くなったりしていた。泥の色をした祖江谷川（そえだにがわ）沿いを進み、脇町ＩＣから徳島自動車道に乗った。徳島ＩＣまで４０㎞とある。道は空いており、前後に車は一台もいなかった。しばらく四車線で走ると、車線が減少して対面通行となる。中央分離帯が青と白の縞模様のパイロンに変わり、大型のトラックとすれ違うと、水飛沫で前が全く見えなくなった。トンネルが連続する区間に差し掛かった。数えてみるとトンネルは全部で五本もあった。トンネルを出るとすぐにまた対面通行となり、遠近感が失われてとても走りにくい。通過する度に、どこか異次元の空間へワープしているような気分になる。ヘッドライトをハイビームにしてみたが、頼りない光は雨のカーテンに遮られ、ガードレールに乱反射するだけだった。高速道路の脇は奥深い山林となっていた。鬱蒼と茂る灌木の根元から、底知れぬ暗がりが押し寄せてきている。『動物注意』の看板が出ているのは、野生のタヌキやシカが出るのだ。つい最近も、シカに衝突した車のドライバーが命を落とす痛ましい事故が起こっていた。

死の訪れは誰にとっても多かれ少なかれ唐突だ。どんな状況に置かれていようと、人はその瞬間まで自分の死を信じていないのではないか？　一人の人間が持つ時間など、宇宙の永遠からすれば瞬きにも当たらない。が、死の瞬間まで続く生は永遠であり、生が終わるまで、たとえ苦痛であってもそこからは抜け出せない。だとすれば尚更、自然な形で最期の時を選べるとするなら、臆せずにそうすべきなのかもしれない。そんなことを考えた糸田は、妻の延命拒否を思いとどまらせる気がすっかり失せてしまった。

急に雨足が強くなってきた。フロントガラスに飛沫が跳ね返り、視界は極端に悪くなった。ハンドルにしがみつき、這うようにのろのろと進んだ。長い下り坂となったゆるいカーヴに差し掛かった。大量の雨水を浴びせられて目の前が真っ白になった。眼を細めて身を乗り出したところで五メートル先も見通せない。地面に何か黒い物が見えたが避ける暇もなかった。鈍い衝撃に車体が突き上げられた。ぶるんとハンドルが右に切れ、深い轍（わだち）にはまったように操作が利かなくなった。悪意を持った何者かが押しているような異様な重さがある。慌ててアクセルを戻したが、さして

速度は落ちなかった。乱暴にブレーキを踏むと、車は鼻先を右に左に大きく振った。まるで油をまいた鏡みたいな路面を蛇行しながら滑走する。折悪く、そこは対面通行区間で、中央分離帯にはコーンではなくワイヤーの隔壁が設置されていた。車はそれにバンパーを引っかけ、右前部を大きく損傷して止まったが、まだエンジンは唸り声を上げており、タイヤが激しく空転していた。一瞬の冷静な判断でシフトレバーをニュートラルにした。キーを戻してやっとこさ荒れ狂う車を鎮めた。脱出しようとしたが、破裂したエアバッグと白い罅（ひび）が入って内側に落ち窪んだフロントガラスに挟まれて、身動き一つも出来なかった。それでも、パッセンジャーのことが気にかかった。ヒエンは気を失っていた。ゴーグルが下りていて表情は窺えないが、蟀谷（こめかみ）から一筋の血を流している。

「起きろ。起きてくれ」

手を伸ばそうとしたが、まるで棒切れのようだった。さっきまで動いていたのに、指先が思うに任せず、痺れは二の腕から肩へと這い上がった。意識はハッキリしているが、どういう加減か全身が麻痺しつつあった。糸田は死の恐怖に絡め取られた。

と、不意に声が響いた。

「あなた。あなた。聞こえる？」

VRバイザーのスピーカーががなり立てている。

「ああ、聞こえるよ」

バイザーのスイッチは切られていたはずだ。

「大丈夫？　何があったの？」

「俺のミスで事故っちまった。そっちからは見えているのか？」

「見えない。でも、どうにか音だけは……。どう？　動ける？」

「ダメだ。神経をやられたかもしれない」

「ヒエンさんは？」

「分からない。呼んでも返事をしないんだ」

ヒエンが喉からしゃっくりみたいな音を出した。自分の運転ミスで若い命が失われたらと思うと、矢も盾も堪らなくなった。

「気を失っているだけよ。怪我はたいしたことないから心配いらない」と夏子は断言した。

「ん？　変な臭いがする」糸田は顔をしかめた。

「何の臭いなの？」

夏子が焦った様子で聞いてくる。

「どうやらガソリンらしいな。どっかから漏れてるようだ」

「早く。早く車から出て」

「さっきからやってるんだけど、身体が言うことを聞かないんだよ」

「そんな……」バイザーの向こうで夏子が絶句した。

じりじりと時間が過ぎていった。と、ヒエンの手が伸びてきた。エアバッグの残骸をどけて、シートベルトを外してくれる。ヒエンの半開きになった口からは、涎が垂れていた。

「君は一体？」

ヒエンが力強く腕を伸ばしてきた。運転席のドアはグシャグシャに潰れていた。

「脇の下に手を入れて引っ張るから、身体を出来るだけ真っ直ぐにしてちょうだい」

夏子の指示に従うと、助手席のドアから車外へ引っ張り出された。

「助かった。危ないところだった」

圧迫を解かれた糸田は、まだ立てなかったが、手足の感覚が徐々に戻ってきていた。

すぐそばでヒエンがふらふらしている。やがてどすんと尻餅をつき、うざったそうにバイザーを外すと、事態を飲み込めていない顔で辺りを見回した。

「夏子か？　どこにいる？」

故障したのかスイッチが切れていて返事は聞けなかった。

驟雨が糸田を洗った。彼はずぶ濡れになって灰色の空を仰いだ。岩のように重層した雲が、分厚い闇となって空を領していた。不意に目の前を、鬼火のような陰鬱な光が横切った。それは滝のように雨が流れる路面すれすれを飛んでガードレールの向こうへ消えてしまった。果てしなく濾過されてくる大粒の雨滴は、ありとあらゆるものを浄化しようとしているようでもあり、その輪郭をすっかり曖昧にしていた。

事故から一週間が経過した。幸いにも、糸田もヒエンもかすり傷で済んでいた。糸田はヒエンに誠心誠意謝罪し、治療費の他に慰謝料を渡そうとしたが、ヒエンは頑として受け取らなかった。

「他人の身体を乗っ取るってどんな感じなんだ？」

糸田はからかい半分で夏子に聞いてみた。あの時、ヒエンは夏子の指示で動いたわけではなかった。理屈では説明不能なことが起こったのだ。おかげで糸田は危うく難を逃れた。

「さあ、よく覚えてないのよ。無我夢中だったから」と言いながら、でもと夏子は続けた。

「眠っていたら突然の衝撃があって、あなたの身に何かよからぬことが起こったのが分かった。すぐにバイザーを着けたけど、スイッチが切れていて真っ暗だった。どうにかしようと足掻いていたら、耳の奥がキーンとして、まず音が聞こえるようになったの」

「それで声をかけてくれたんだな？」

「あなたが動けないとなって、これはもう祈るしかないなって。必死に念じたわよ。そしたら信じられないことが起こった。闇の中にふわふわとシャボン玉みたいな光の球

が飛び始めたの」待ちかねていたように夏子は一気呵成に喋った。「で、一番近くにあったものに手を伸ばすと、その中へするりと吸い込まれた。そしたら急に視界が明るく開けたのよ。何とそこはヒエンさんの両眼を通して見る世界だった」

「ヒエンさんの世界と繋がったってこと？」

「うまく説明できないし、間違ってるかもしれないけど、自分という殻の中に、星の数ほどの他人の世界が存在していて、それらはずっと以前から、すぐ近くに浮かんでいたのよ。目に見えないから気付かなかっただけで。それらは時と場合によっては、何らかの因果関係を結ぶこともあるらしい。ちょっとしたきっかけでね。あの時は幸いにもヒエンさんとのチャンネルが開いた。それで我に返って、あとは無我夢中だった。慣れない自分の身体を必死に動かして、あなたを車から引っぱり出したの。やたらと重かったわ。あなた、ちょっと太ったんじゃないの？」夏子がおかしそうに笑った。

「他人の世界と自由な往き来が出来たら面白いのにな」糸田は冗談めかして言った。

「しかも時空を越えてね。過去と現在を往還する」夏子は真顔だった。

「その手助けをするのがＩＴの技術かもな。いずれ人間の脳をデジタル化して、パソコンに移植するなんてことが可能になるそうだ。更にそれを他人の脳へ移したら、その肉体を自在に動かせるようになるかもしれないよ」

「他者へのインストール？」

「あるいは人間丸ごとの臓器移植？　不老不死が可能になる？　まるでＳＦだ」

今はまだ映画や小説の中の話かもしれないが、いずれ現実のものとなっていくのかもしれない。糸田には、それがいいことなのか悪いことなのか判断がつかなかった。人間の欲望には限りがない。自分が創造した世界を、何がなんでも維持しようとするだろう。まるで自分が世界の宗主だとでも言わんばかりに。

「そうなりたいかい？」

「遠慮しておくわ」迷うことなく夏子は答えた。

「有限だからこそ、どんな人生にも耐えられる？」

「だからこそ、その意味を大切にする」

夏子は霧が晴れたように微笑んだ。あとどのくらいの時間、妻と一緒にいられるだろうか？　妻の死と同時に妻の世界は消滅するが、糸田の世界が、それを記憶という形で包摂するだろう。しかし、いずれたいした間を置かず、糸田の世界も雲散霧消し、全き静謐と深遠なる闇に飲み込まれる。そこで肉体は細かな分子や原子へと分解され、不可視の微粒子となって宇宙を漂い、やがて絶対的な何者かによって、再び凝集させられるのを待つ。偶然に偶然を重ね

て、新たな命が生み出され、それは千変万化の世界を構築する。何もかもが奇跡的な巡り合わせだと思えた。自分はその奇跡を生きているのだ。そして、奇跡を奇跡たらしめる者は、人間であってはいけないような気がした。

サイドテーブルの上には、主治医に提出する覚え書きが、未記入のまま置かれていた。

「延命治療の件だけど、もう少し考えてみることにするわ」と夏子が言った。

「うん、まだ時間はあるさ」

「今度のことでちょっと考えたことがあるの」

「ふうん。それは？」

「さっき色んな世界が自分の中にあるんだって言ったでしょ。つまり、外部との意思疎通が不可能になっても、一人で取り残されるんじゃない。外の世界は自分の中にあって、私が生きている限り、様々な営みが続いている。それと繋がれたら孤独じゃないかも」

「うん、うん。そうだね」糸田は頬笑ましい気持ちで相槌を打った。

「どう言えばいいんだろう？　想像から生まれる物語の世界というか……」

夏子はしばし思案投げ首してから口を開いた。

「何となく分かるよ。君の謂わんとするところが」

糸田は何度も肯った。何かに操られている気がしたが、さほど悪い感じはしなかった。

「俺もその物語に登場させて貰うことにするよ。そしたらいつでも会えるもんな」

指先すら動かせず意志表示も出来なくなった妻に始終話しかけながら、その手をそっと撫でてやれたらいいと思う。

「いずれにせよ残された時間はそう長くはないわ。本当に終わりの時が来るまで、空想の世界に遊ぶのも悪くないかもしれない。病人の見る夢うつつかもしれないけどね」

夏子が鷹揚に微笑んだ。その表情からは怖れが薄らいでいた。

「それでいいじゃないか。こないだのことだってあるしさ。常識では計り知れない何かが起こるかもしれないよ」

妻の心境に変化が出たのが素直に嬉しかった。

「久しぶりに外の世界を見られて、ほんとに楽しかったわ」夏子が満足げに言った。

「また頼もうよ。これからも時々外出するようにしないか？」

ヒエンの助けを借りれば、夏子は閉じかけた自分の世界を、しばしの間ほんの少しだけでも取り戻せる。そこでまた自分の中に埋蔵されている、数多の世界を発掘するのかもしれない。人間の命は有限だが、その思索に限界はないのだ。

「いいわね。ヒエンさんにもまた会いたいし」

ヒエンには申し訳ないが、どうか大目に見て貰いたい。それに、この間のようなことは、もう二度と起こらないだろう。糸田にはその確信があった。

「そうだな。もっとちゃんとお詫びもしないとな。コロナで困ってるみたいだし、何か援助が出来たらいいのにな」

「ささやかでも何か考えましょうよ」

彼女が帰国する時に、少しでも日本という国のいい印象を残したい。

「どこか行きたい場所はないか？」

思い出の地を巡るのもいい。

「また考えておくわ。車じゃなくても行けるところをね」

夏子は悪戯っぽく答えた。

「分かった。いっぱいあるぞ」

糸田は押し入れからアルバムを取り出し、近場でもう一度行ってみたい場所を探し始めた。

銀華文学賞 優秀賞　受賞の言葉　菊野　啓

近ごろとみに残り時間が気になるので、やり残したことに注力するために、仕事に区切りをつけ生活を一変した。まずしたいのは『旅』。足腰が立つうちに、もう一度海外をのぞき、萎えかけた好奇心を鼓舞したい。そして、最後はやっぱり『小説』。たったひとつでいいから自他ともに認めるスゴイ作品を書きたい。そのためには臆せず駄作の連打を続けていこう。何か書けたらまた応募します。ありがとうございました。

菊野　啓　　きくの　けい

1960　徳島県生まれ
広島大学歯学部卒業
徳島大学大学院歯学研究科修了
現在、歯科開業医
徳島県徳島市在住
徳島文学協会理事
第13回銀華文学賞佳作
第14回銀華文学賞優秀賞
小説「邪眼」（幻冬舎・電子書籍）
小説「金の顔」（幻冬舎）

原石文学畢生の小説集　芸の魂がここにある
アジア文化社　1600円

銀華文学賞 優秀賞

雪かき男

青木ガリアン

この街には「雪かき男」と呼ばれる男がいる。雪が降ると駅前に現れ、ロータリーから真っ直ぐに延びる歩道の雪かきをすることから、そう呼ばれている。

雪かき男は、作業用防寒着を上下に着込み、雪が積もり始めると、アルミ製の角スコップと使いこまれた竹箒を肩に担いで駅前に歩いてやってくる。雪かき男は、誰と話すこともなく、ただ黙々とスコップで雪かきをする。仕上げには雪かきした路面を竹箒できれいに掃いていく。それが終われば、また、雪かき男はスコップと竹箒を担ぎ、駅前から歩いてどこかに帰って行く。

雪かき男の素性はよく知られていない。フードをかぶりマスクをした雪かき男の素顔を見た人もいなければ、声すら聞いた人もいないと言われている。それでも、雪かき男のことは街の誰もが知っているのだ。

吉竹和泉(いずみ)も雪かき男のことは知っていた。新聞社に女性記者として新卒で就職し、雪国の地方都市に赴任して五年、その駅を最寄りに支局まで電車通勤する和泉は、毎年雪かき男を見かけていた。

夜半からの冷え込みで、十二月としては二十年ぶりのまとまった雪となったその日も、和泉は雪かき男の脇を通って出勤してきた。

雪国とはいえ、その年初めての雪で交通機関にも遅れが出て、新聞社としては朝から対応に追われた。しかし、降り続いた雪もやむと、やがていつもの支局に戻り始めていた。

「すみません。雪かきをしている人を記事に取り上げてほしいのですが……」

突然、支局の入口の受付に白髪の男が現れた。

和泉は立ち上がり、受付のカウンターに向かった。半年前に総務の契約社員の子が退職してから、来客対応は知らない間に女性である和泉がすることになっていた。

「失礼ですが、お約束はありますか?」

男は和泉の顔を真っ直ぐに見つめたまま、黙って首を横に振った。

礼服のような黒い背広を着たその男は、受付に入って来る前に脱いだコートを腕に抱えていた。時々いる記事のクレームをつけにやってくる人とは明らかに違っていた。

「どこで雪かきをしている人のことですか?」

「皆さんから雪かき男と呼ばれている人のことです」

男は仕事をしている局員全体に向かって聞こえるように言った。

「あの人は二十年もの間、たった一人で雪をよけてきたのです」

男の通る声がフロアーに響いた。

「失礼しました。どなたか担当とお話をされている件でしょうか?」

男の声に驚いた和泉が改めて内容を確認しようとすると、その様子を見て、村上デスクが席を立ち受付に向かってきた。

「吉竹、小会議室にコーヒーを三つ頼む」

デスクはそう言うと、男を小会議室に案内していった。

和泉はサーバーからコーヒーをカップに注ぎ、二人の後を急いで追った。隣の席の後輩の山村和樹がマスクの裏で、「いよいよ御茶くみですか」と笑っているように見えた。山村は新卒二年目だが、警察回りや高校野球、選挙の取材もそつなくこなし、コロナ対応などですでに支局の戦力になっていた。

会議室のドアを開けると、デスクと男の人はお互いに名刺交換をしていた。

「吉竹、おまえも名刺を」

デスクから言われ、和泉もコーヒーをテーブルに置いて名刺交換をした。男の人は伊部昭雄という名で、全国に支社をもつ運送会社の安全課課長の肩書だった。

和泉は、伊部という男と村上デスクの前にコーヒーを出したが、コーヒーはもう一つあった。誰のものかわからないでいると、デスクが横に座れと手で合図した。和泉は意味がわからないまま、伊部の名刺をテーブルの前に置き椅子に座った。

「お忙しいところ、申し訳ありません。どうしてもあの人のことを新聞で取り上げてほしかったので、突然、押しか

けてしまいました」
　伊部は、そのみごとな白髪の頭を深く下げた。
「いえ、雪かき男のことは、以前から感謝の声や記事にしてほしいという投書が寄せられていたのですが、雪の季節は年末年始と年度末もあり、長い間対応ができずにいました。こちらこそ申し訳ありません」
　村上デスクも頭を下げていた。和泉はそんな投書が来ていることを全く知らなかった。
「そうでしたか」
　伊部は、説明が省けたと安心した表情でコーヒーに口をつけてから話を続けた。
「私は以前こちらの営業所にいたのですが、この二十年は、年に一回来させていただいているだけで、彼が雪かきをしていることを知りませんでした。さきほど、偶然、あの人を見かけ、商店街や交番の人から、彼が二十年もの間ずっと、たった一人で雪かきをしてきたことを聞かされました」
「こちらにお越しの用件はもうお済みなのですか？」
　村上デスクは、伊部がコート以外、鞄すら持っていないのを見ながら聞いた。
「はい、これからすぐ関東に戻ります。運送会社は年末年始が繁忙期ですので」
「安全課の課長さんでいらっしゃるのですね」
「ええ、私ができる役職ではないですし、そんな資格もありませんが、被害者、そのご家族、そして加害者のその後の長い人生を変えてしまう交通事故を防ぐことだけが私の使命と考え仕事をしてきました」
　伊部は仕事のことを聞かれると、背筋を伸ばし、テーブルに身を乗り出すように話した。
「それで、雪かき男と呼ばれる人のことを記事に取り上げていただけるのでしょうか？」
「ご要望は承りました」
　村上デスクは和泉の顔を横に見て答えた。
「取材は、この吉竹が担当します。雪かき男の駅から電車通勤しています。もう五年も彼が雪かきをするのを見てきています。時間はかかるかもしれませんが、きっと期待に沿う記事を書くと思います。では、進捗がありましたら、こちらから連絡させていただきます」
「よろしくお願いいたします。本日はお忙しい中ありがとうございました」
　二人はすでに立ち上がっていた。デスクの話を驚きのあまり呆然と聞いていた和泉も慌てて席を立ち、帰ろうとする伊部の前に出て、会議室のドアを開けた。
「吉竹さん、私は彼が二十年してきたことをここの新聞記事で皆さんに知ってほしいのです。どうかよろしくお願いします」

　伊部はドアの前でそう言うと、受付のカウンター越しにフロアーで働いている人全体に頭を下げ去って行った。
　会議室を片づけて席に戻ると、村上デスクが資料の入ったクリアファイルを和泉の目の前に置いた。
「雪かき男の名前は高田大樹さん。一人もので、雪の期間以外は期間工として工場で働いている。情報はその程度。あとは、寄せられた投書だ。皆、感謝の言葉が綴られている。彼はもう二十年もボランティアで雪かきをしている。どんな思いで何を考え続けているのかを紹介してほしい。締め切りは雪どけまででかまわない」
　取材記者で入社したのに、満足に記事も書けず、総務のような仕事ばかりしている和泉がデスクには暇そうに見えたのかもしれない。
「あれって、ボランティアだったんですか？　しかも二十年もやっているんですか？」
　和泉は、行政か鉄道会社に雇われているか、請負で契約している人だと思っていた。それも二十年も続けているとは知らなかった。
「そうだよ、地味かもしれないが、スーパーボランティアだ。アプローチによっては反響があるかもしれないぞ」
「でも、ただ雪かきをしている人ですよ」
「そこにどんな物語があるかわからないから取材するのだろう。多くの人が、記事にしてほしいというのには必ず理由がある。それを探って、自分の言葉で記事を書いてみろ」
　デスクはそう言うと、朝刊の締め切りに向けて忙しそうに机のパソコンの画面に戻って行った。デスクから渡されたファイルには、何通かの手紙とネットの書き込みのコピーが入っていた。
　手紙は、老人や子をもつ親、障がいのある人から寄せられたものが多かった。皆一様に雪かき男に感謝していた。車道は機械で除雪されるが、歩道は対応が遅くなる。除雪車が歩道に雪を寄せていくこともある。それでも、駅前は雪かき男がいつもきれいにしてくれ、歩きやすくしてくれる。一日や一回のことではなく、もう二十年近く、朝でも夜でも休みなく雪かきをしてくれる。市民のために黙々と汗を流している人がいることを是非記事として伝えてほしいというのが共通している内容だった。
　ネットの書き込みのコピーも添付されていた。男が雪かきしている写真と短い感謝のコメントのようなものが多く、中には通行の邪魔だとか不気味だと揶揄するものやあそこまできれいに掃く必要があるのかと批判めいた声もあったが、おおむね手紙と同様、雪かき男への感謝と気遣いの言葉が多かった。雪かき男が人と話をしているところを全く見たことがないので、実は現代の雪男か幽霊なのではないかという都市伝説的な書きこみも中にはあった。
「たいへんそうですが、楽しそうじゃないですか？」

後輩の山村が資料を覗き込みながら言った。
「それって皮肉？」
「皮肉じゃないですよ。話をしてもらえない人の取材はたいへんだと思って……。じゃあ、これから飲食店の感染症対策の取材をして、そのまま帰ります」
山村は机の上にあったノートパソコンや書類を鞄に入れると、ホワイトボードに直帰のマグネットを貼り、夜の街の取材に出かけて行った。和泉は雪かき男がスコップを雪に差し込んでいる写真を見ながら、皮肉っぽくなっている女性の先輩として、またどこかで酒の肴になるのだろうと思っていた。
フロアーにある大きなモニターには、低気圧の通過で大雪の可能性はなくなったが、場所によっては夜半から早朝にかけて雪が積もるところもあると予報が流れていた。
雪の予報は、この街では「雪かき男」に遭遇できる予報でもあった。

＊

厚手のカーテンを開けると、明け方から降り積もった雪で、あたりは一面真っ白な世界となっていた。
和泉は就職するまで雪国に住んだことがなかった。冬になると、目の前の景色は一変し、すべてが白い色で塗りつくされる。降り積もった雪が汚いものや見たくないものまで覆い隠してくれるようで、最初は珍しくもありうれしくもあった。しかし、いつしかそれは春が来るまでまったく変化のない白一色の鬱屈した日常へと変わっていった。
和泉は急いで身支度をして、マンションを出た。出社前に駅前で「雪かき男」への取材依頼と簡単なコメント取りだけはしたかった。
「また雪の季節がやってきたねえ」
マンションの管理人が白い息を吐きながら道に通じる階段の雪かきをしていた。軽く会釈して道に出ると、車道は機械で除雪されていたが、歩道はまだ雪に埋まっていた。通勤には早い時間だった。和泉は滑らないように足の裏に力を入れて車道の脇を歩いた。
駅前通りに出ると、歩道はすでにきれいに除雪され、雪は車道との間にうず高く積まれていた。雪国では歩道も車道も雪のことを考え、幅が広めにとられていた。
駅に真っ直ぐに続く道を見渡すと、県道と交わる交差点のあたりで、雪のよけられた道を竹箒で掃く雪かき男がいた。
和泉は男のそばまで行くと、背負っていたリュックから新聞社のＩＤカードを取り出して単刀直入に言った。
「あなたを取材させてもらえませんか？」
雪かき男は、和泉に気づくと、和泉の顔を黙ってじっと

見つめていた。
「なぜ、雪かきをしているのかを聞かせていただきたいのですが」
和泉が聞いても、男は和泉を見つめるだけで答えることはなかった。
「歩行者が安全に歩けるようにですか？」
和泉は食い下がるように聞いたが、雪かき男は返事をすることなく、また竹箒で路面を掃き始めた。そこには取りつく島もなかった。
交差点の雪だまりに、前日の朝にはなかった花の包みが置かれているのが見えた。頭上の信号からは「通りゃんせ」の音楽が流れ、和泉自身が通勤通学の歩行者の邪魔になろうとしていた。
「話してもらえない取材はたいへんですよ」と言った山村の言葉通りだった。和泉は、聞き取りは一旦諦めて、駅に隣接したファーストフードで、駅前が見通せるカウンターに座り、コーヒーを飲みながら雪かき男を観察した。
駅前にはタクシーが数台停められる小さなロータリーがあり、最初の細い横道と重なるところに交番がある。そこを越えると商店街となり、左右がアーケード街となっている。さらに真っ直ぐ行くと、信号があり、県道との交差点になっている。その先は住宅街につながっている。交差点からでも駅まではかなりの距離があるのに、雪かき男は交差点の先の住宅街のあたりからいつも雪かきをしている。ただ、よく見ると、雪かきをしているのは駅から見て右側だけだった。同じ歩道でも逆の左側を雪かきしている姿は見たことがなかった。片側だけでも相当な距離であり仕事量だった。
雪かき男は雪かきの仕上げとして、交差点から駅に向かって竹箒で道を掃き進めていた。車道側に立ち、横向きとなりながら、歩行者が来るたびに邪魔にならないように手を止め、通り過ぎると、また雪を掃きながら車道側に寄せていた。頭を下げ、声をかける歩行者もいたが、雪かき男が通行する人と話をしている様子はまったくなかった。
「やっぱり、歩行者の歩く道を確保したいだけみたいですよ」
和泉が出社し報告すると、タイミングが悪かったのか、村上デスクの雷が落ちた。
「本当に彼がそう言ったのか？」
彼は何も言ってはいない。現実には一言もコメントは取れていなかった。
「表面だけでものごとを捉える記者がどこにいる。もう少し心と身体を動かして取材しろ」
村上デスクは、こと仕事に対しては古いタイプの管理者だった。言い方には問題はあったが、話す内容はいつも正しかった。和泉はその通りだと思って黙って聞いていた。

その様子を見て、隣の後輩の山村がまたマスクの下で笑っているように見えた。確かに、この程度の取材ができないのなら、記者には向いていないのかもしれない。

「早くいい人見つけて、そんな寒いところから戻ってきなさい」

母親は電話すると、必ずその話をした。仕事のできない人間が戦場のような職場に長くいてはいけないかもしれない。和泉自身が最近そう感じていた。

すでに入社して五年、本社の政治部に異動になった同期もいた。戦争が起きた国に偶然海外特派員として派遣されていた同期は、毎日のように名前が新聞に載っていた。通常、新卒は五年ぐらいで地方の支局を複数経験し、その後は適性や希望に応じて配置がされる。一つの同じ支局に五年もいるのは同期では和泉ぐらいだった。

和泉は同じ新卒でも内定者の辞退が多数出たことで繰り上がって採用された組だった。外国語もできず何の特技もない和泉のことを人事部長は、「吉竹は大学のサークルで手話をやっていたから採用した」といつも言うが、そのことが入社して役に立ったことは一度もなかった。

和泉が手話を勉強しようとしたのは、予備校時代に図書館で受付のアルバイトをしていたことがきっかけだった。週二回、夕方からのシフトだったが、毎回必ず一冊の本を返し、また一冊の本を借りていく凛香ちゃんという中学生の女の子がいた。

『不思議の国のアリス』、『絵のない絵本』、『青い鳥』、『スノーグース』、『ガリバー旅行記』、『銀河鉄道の夜』……、凛香ちゃんが借りる本は子ども向けに見えて、内容は大人が読む本が多かった。凛香ちゃんはいつも一人で悲しそうな顔をしていた。和泉は受付として何度か話しかけてみたが、凛香ちゃんは和泉の顔をじっと見るだけで、言葉を返してくれることはなかった。

ある日、凛香ちゃんは本を返すためだけに図書館にやって来た。本を受け取ろうとした時、差し出された右手の袖の奥に火傷と痣のようなものが見えた。凛香ちゃんは本をカウンターに置くと、すぐに手を引っ込め、隠すように左手で袖を握った。返却された本は『星の王子さま』だった。和泉も何度か読んだことのある本だった。

「この本、おもしろかった？」

和泉がいつものように聞くと、凛香ちゃんは黙ってうなずいた。話しかけて反応してくれたのは初めてのことだった。

「新しい本は借りなくてもいいの？」

和泉の言葉に凛香ちゃんは、また黙ってうなずくと、右手の手のひらを前に向けて左右に軽く振った。そんなことは和泉がアルバイトをして一度もなかったことだった。

「さようなら」

和泉も受付に座りながら手を振った。

その姿を見て、図書館司書の女性が後ろから和泉にささやいた。

「あの子、耳が不自由なのよ」

和泉は何も知らずに声をかけてきた恥ずかしさと気づかずに悪いことをしたという思いから、図書館で手話の本を探し、凛香ちゃんがおもしろかったと言った『星の王子さま』と一緒に借りることにした。和泉が本を借りている間、近くの踏切で人身事故があり電車が遅れているとロビーで利用者が話しているのが聞こえた。

翌日の新聞には、踏切での人身事故で帰宅中の多くの人の足に影響、と記事が出ていた。亡くなった人の名前は凛香ちゃんだった。原因は警察で調査中とのことだった。

凛香ちゃんは死ぬ前に『星の王子さま』を返し、おもしろかったとうなずいた。そして、さようならの手を振った。凛香ちゃんはなぜ死んだのか、事故なのか自殺なのか、自殺であれば何が原因だったのか、和泉は知りたかった。

それから和泉は毎日のように新聞に凛香ちゃんの名前を探した。結局、その後詳しいことは何もわからなかった。和泉はバイト代で手話の本と『星の王子さま』を買った。手話は独学で勉強した。『星の王子さま』はいつも鞄に入れて、凛香ちゃんはどこがおもしろかったのかを考え続けた。子どもの社会問題にも興味をもつようになり、大学は社会学部に入り、手話サークルにも入った。新聞社を受けたのもそのことが関係していたのかもしれない。

新聞社に入って、警察や裁判所回りもしたが、公式の発表を完結にまとめるだけで、事件の裏側にあるものは取材できなかった。いくつか自殺の案件も関わったが、たとえ本人が遺書に残していたとしても、それが真の原因とは限らないと感じることもあった。

凛香ちゃんの踏切事故が発生したら、和泉でも同じように記事を書くだろうし、その後も追うことはなかったと思った。そう考えると、取材するのも記事を書くのも何だかむなしくて気持ちが入らなかった。それは回りにも伝わり、同じ所での経験だけは一番長い支局の何でも屋みたいな役回りになっていた。

結果、与えられたのは雪かき男の取材だった。新聞社に入社して五年、転職するにしても、社内で校正や総務のような仕事を希望するにしても取材記者としては考える時を迎えていた。

これが記者としての最後の取材になるかもしれない。そうならばデスクの言うように、心と身体を動かして、やれることはやってみよう。そう思うと、逆に気持ちが晴れていくのがわかった。

それから和泉は、毎日会社の行きと帰りに駅前のファーストフードでコーヒーを飲みながら雪かき男を待った。冬

の初めは雪の降る日も少なかった。雪かき男が現れると、和泉は必ず話しかけたが、一言もコメントは得られなかった。

雪かき男が現れない日は、雪を待ちながら『星の王子さま』を鞄から取り出して読んだ。

キツネが王子さまに「さようなら」と言った時に教えてくれる秘密――とても簡単なこと。ものごとは心で見なくてはよく見えないの――

凛香ちゃんの最後の顔を思い出しながら、和泉は繰り返し呪文のように唱えていた。

寒さが増し、積もった雪もとけることなく降り重なるようになると、雪かき男は毎日のように駅前通りに現れた。真っ白な雪の世界で、強い風の日も、寒さで凍てつく日も、和泉は雪かき男に話しかけ続けた。しかし、男はそれに答えることもなく、黙々と歩道の雪かきを繰り返した。

雪が降ると駅前に現れ雪かきをする男と、その男にしつこく話かける女。いつしか、この二人を街の人は、「雪かき男と話しかけ女」と呼ぶようになった。

＊

そして、その冬一番の寒気団がやってきた。低気圧の発達とともに、降りしきる雪は夕方には横なぐりの吹雪となっていた。

支局に残り待機しますと申し出た和泉に、

「雪かき男の取材日和だろう」

村上デスクは、待機の必要はないと手を横に振り、ロッカーから取材用の新聞名の入った防寒着の上下と長靴を渡してくれた。

駅前のロータリーは、通勤通学の家族を迎えに来る車とタクシーを待つ人で慌ただしかった。

雪かき男は、吹きつけてくる雪をまともに受けながら歩道の雪をかき続けていた。雪をかいているそばから雪は降り積もり、交差点から駅まで来る間に、交差点のあたりはもう雪で埋もれていた。やった仕事が減るどころか、振り返ると増えている。地獄で与えられる拷問とはこのような作業を言うのかもしれない。それでも雪かき男は黙々と雪かきをしていた。

夜に向かい、風も強さを増し、視界も悪くなってきた。街灯の放つ光に降りしきる雪が映し出されるだけで、あたりは白い砂嵐のように少し先も見えなくなっていた。駅前は人通りも少なくなり、商店街も早めにシャッターを下ろし始めた。

「申し訳ありません。本日は従業員を早めに帰したいので、あと三十分ほどで閉店させていただきます」

ファーストフードの店員が和泉に謝りにきた。店内を見

渡すと、和泉しか客はいなかった。

「すみませんでした。すぐに出ます」

和泉はわずかに残ったコーヒーを飲み干すと、店を出て駅前のコインロッカーと自動販売機のある場所に移動した。そこは屋外の喫煙スペースで屋根は設置されていたが、斜めに吹きつける雪は容赦なく和泉を襲ってきた。会社で貸与された防寒着を着てきたとはいえ、寒さが身体を締めつけていた。和泉はフードをかぶり、ファスナーを顎のあたりまで引き上げ、リュックからスキー用の手袋を取り出し手にはめた。

駅のアナウンスは、後続の上下線はすべて欠行となったことを伝えていた。街灯と信号がぼんやりと光る中、雪かき男が交差点のあたりで雪かきをしている姿がかすかに見えた。雪かき男は何時間続ける気なのだろうか。家に帰らないで夜通し雪かきをするのだろうか。少し休んで、あとでまとめてやったほうがよいのではないか。そんな疑問が和泉の頭をよぎったが、雪かき男はもう二十年も雪をかいている。その間に、こんな日はあったはずだ。和泉がこの街に赴任してからも吹雪の夜はあった。そんな日の翌朝もこの駅前の歩道だけは何の支障もなく歩くことができた。やり続けるしかないのかもしれない。

交差点から聞こえていた信号機の「通りゃんせ」の音楽もいつのまにか消えていた。白い闇の中で、車道の除雪のために現れた大型除雪車の警告音だけが聞こえていた。除雪車は車道の雪をよけると、その雪を雪かき男がはねた場所に押し返し、歩道にはまた雪が崩れ広がっていた。それでも男は雪をかいていた。

「一人では無理よ」

視界もなくなるような吹雪の中、膝を越え腰の高さまでになっている雪と一人で格闘する男を和泉は見ていられなくなった。

和泉は交番に向かった。走ろうとしたが、目も向けられないような雪で思うように進めなかった。雪に逆らって何とか交番に着くと、ドアを叩き、外に立てかけてある除雪道具を指差した。

警官は吹雪の中突然現れた和泉に驚きながらも、意味はわかったようで、外に出てきて軽そうな赤いプラスチックのショベルを貸してくれた。

「交番の回りは私たちで雪をかきます」

「ありがとうございます」

「雪かき男に話しかけていたのは新聞社の人だったのですね」

警官は和泉の防寒着の胸にある新聞名の刺繍を見ていた。

「ええ、取材です」

「たいへんですね。ただ、交差点のあたり、車にだけはく

れぐれも気をつけてください」
「わかりました」
　和泉はショベルを両手で持つと、積もった雪から足を抜いては、また一歩前へと雪かき男へと向かって行った。吹きつける雪は目に入り、マスクにつく雪が吐く息でとけひどく濡れていた。雪をかき分け進む姿は、まるで冬山の遭難救助隊のようだった。
「手伝います」
　和泉が雪かき男の前に立って言うと、男はいつものように黙っていたが、ショベルを持つ和泉を見て、意味は伝わったようだった。そこから二人の雪との闘いは続いた。ショベルを雪に押し込み、小さな塊をつくり、すくい上げて車道との間に積み上げる。その繰り返しだったが、すぐに腕がきかなくなった。
　雪かき男はそんな和泉を見て、膝を曲げて腰を落とし下半身を使え、と身体の動かし方を身振り手振りで示した。和泉は雪をよけるように手をかざしながら、頭を何度も縦に振り、わかったと伝えた。和泉は雪かき男とコミュニケーションが取れたことがうれしかった。吹きつける雪で、気を抜けば死ぬのかもしれないと和泉は思ったが、不思議に力はわいてきて、男と一緒に雪をかき続けた。
　雪の白さがぼんやりと闇を照らしていた。風の音に混じって、雪かき男の息遣いが聞こえていた。男は時々腰を伸ばすしぐさをするぐらいで休むことなく雪をかいていた。和泉も必死に雪かき男について雪をよけ続けた。寒いはずなのに身体中から汗が吹き出していた。
　何時間が過ぎたのだろう。いつのまにか雪はやみ、朝陽が昇ろうとしていた。男は雪をかき続けていた。はねた雪のかけらが空中で光に乱反射し、真っ白な世界の中で男が金色の光に包まれているように見えた。和泉は背負っていたリュックを下ろし、カメラを取り出すと連続でシャッターを切った。
　雲の間には、青い空も見え始めていた。始発の時間も近づき、男の雪かきのペースも上がっていた。男の身体から汗が湯気のように立ち上がっていた。和泉も歩道が歩いて通れるようにと速度を上げて雪をはねた。
　朝になり、交差点の信号から「通りゃんせ」の音楽が聞こえ始めていた。
　しばらくすると、雪をかく男の前に、お婆さんが白い杖をついて立ち止まった。
　男はお婆さんに気づくと、ひじのあたりをお婆さんに握らせて、白杖を見ながら歩き出した。地面をなぞるように動く白い杖の先には雪の下にうっすらと見える黄色い点字ブロックがあった。
　雪だらけの真っ白な世界に、和泉の瞳にこれまで見えていなかったものが見えたような気がした。和泉はリュックからもう一度カメラを取り出し、お婆さんと雪かき男の並んで歩く姿を白い杖に焦点を当てシャッターを切った。
「ごめんなさい。もう会社に行きます」
　和泉はカメラをしまうと、お婆さんを連れて歩く男の前に行き声をかけた。男は右手を顔の前で垂直に立て頭を下げて、和泉の前をお婆さんと一緒に通り過ぎて行った。それは、「ありがとう」という意味だったのだろうが、頭と一緒に垂直に立てた右手を下げたときに、少しだけ左手の甲を叩いたように見えた。
　――とても簡単なこと。ものごとは心で見なくてはよく見えないの――
　和泉は心の中でつぶやいた。凛香ちゃんと同じことをまたしていたのかもしれない。和泉は持っていたショベルの柄で近くにあった標識のポールを叩いてみた。金属音があたりに響いた。白杖を持ったお婆さんは、背後からの音に驚き後ろを振り返った。しかし、雪かき男は前を見たまま駅に向かって歩き続けていた。
　とても簡単なことだった。雪かき男は寡黙な男などではなく、聴覚に障がいがあり、声が出せなかったのだ。
　和泉は、ショベルを持ち直すと、ロータリーの前にある交番に向かった。警官は交番の回りを雪かきしていた。
「朝までやっていたんですか?」
「ええ」
「でも、あの高田さんは、いつもですからね。本当に頭が下がります」
　警官は雪かきの手を止め、駅の入口の階段でお婆さんを見送っている雪かき男を見ていた。
「彼は徹夜でやることもあるのですか?」
「一年に何回かはこういう日もあります」
「また、今度お話を聞かせてください」
　和泉は名刺を取り出し、警官に差し出した。
「そういえば、運送会社の伊部さん、新聞社に行きませんでしたか?」
　確かに伊部は交番で話を聞いたと言っていた。
「伊部さん、毎年、事故のあった日に交差点に花を手向けていくのですが、高田さんが雪かきをしていたことは知らなかったようで、なぜ、長い間気づかなかったのかと自分をひどく責めていました。そのあと、新聞社に行くと言っていたので、気になっていたのです」
「伊部さんをご存じなのですか?」
「かなり前の話ですが、そこの交差点の信号を音響式にして押しボタンをつけるために、毎週、一人で交差点に立って署名活動した人です。最初は騒音だと言われ、商店街の人にも反対されたらしいです」
　雪かき男とそれを記事にしてほしいと言った伊部は、交差点で結びついていた。

交差点から「通りゃんせ」の音楽が流れていた。今どきのピヨピヨ、カッコーの擬音式ではなかったのも、かなり古くに設置されたことが理由にあったのかもしれない。和泉は支局に帰って、急いで調べなければならないと思った。

「ありがとうございました」

和泉は頭を下げると、借りていたショベルを警官に手渡した。

「話しかけ女から雪かき女に変わりましたね。いい記事書いてください」

警官は笑ってそう言うと、ショベルを交番脇の元の場所に置きに戻った。

和泉は駅に向かった。雪かき男はお婆さんを駅まで送り、また歩道に戻ろうとして、向かってくる和泉に気づいた。

和泉は雪かき男に向かって、右手でこぶしを作って、人差し指と中指を伸ばしながら左に倒した。そして、両手の人差し指を立てて、左右から寄せた。それは、「また、会いましょう！」という意味の手話だった。凛香ちゃんに見せたかった手話だった。

雪かき男は、驚いたように微笑むと、手袋をはずし親指と人差し指でマルをつくり「OK」と合図し作業に戻っていった。

和泉は強ばった足腰で駅の階段を駆け上がり電車に乗った。濡れたマスクを新しいものに取り換えようとリュックに手を入れた時、電車の窓に映った顔は、化粧も落ち、髪の毛もはね上がっていた。胸元からは汗の匂いもしていた。何より昨日と同じ服だった。何を言われてもいいと和泉は思っていた。

窓の向こうに広がる景色は、もう真っ白ではなかった。和泉にもようやくそこに生きる人のいろいろな生きざまの色が見え始めていた。

＊

出勤にはまだ早い時間だった。

和泉は支局に着くと、電話をして話を聞く候補をネットで洗い出した。県庁の福祉課、道路課、そして警察や鉄道会社、和泉には調べたいことがあった。

「おい、徹夜明け、何を真剣にやっている？」

和泉の後ろに、村上デスクがカップを二つ手に立っていた。一つを和泉の前に置くと、モニターを覗き込んだ。コーヒーのおいしそうな香りがした。

「私は何も見えていませんでした」

和泉はカメラのデータを呼び出し、雪かき男と白杖のお婆さんが雪に覆われた点字ブロックの上を歩く写真をデスクに見せた。

「でも、今は少し見えたんだろう」

デスクはマスクをあごにずらし、コーヒーをすするように飲んでいた。

「雪かき男は聴覚障がい者でした。そのことに気づけないなんて、私は馬鹿です」

「吉竹、おまえだから気づけたんだよ。それに、これからはおまえの得意な手話で雪かき男の話も聞けるじゃないか」

デスクは和泉の肩をたたいた。

「なぜ、それを知っているのですか？」

和泉はデスクの顔を見上げた。

「人事部長と同期だからな」

デスクの口元は笑っていた。

「駅前の点字ブロックと音響式信号がいつできたかを電話で聞こうと思って」

「吉竹、それは馬鹿だ。うちは新聞社だ。過去を調べるなら、聞く前に記事のデータベースで検索しろ。書庫に行けば縮刷版だってある」

その通りだった。

「そんなことより、まずはコーヒーでも飲んで落ち着け。大事な仕事のときこそ、最初はじっくり、最後は一気に書き抜け」

調べるときは時間をかけて、書くときは思いを込めて一気にが、デスクの口癖だった。

「ありがとうございます。でも、まだ見えていないことばかりです」

和泉はマスクをずらし、カップに口をつけた。デスクが淹れてくれたのか、和泉が落としたコーヒーよりおいしかった。

「それから、徹夜だったのなら、残業つけておけよ」

「すみません。仕事ではなくボランティアです」

「そうか。仕事は費用対効果だから、いいものが書けるならコストはかけてもいいからな。まあ、書けなくても若い人間は仕事そのものが投資だから」

村上デスクはそう言うと、自分の机に戻っていった。デスクは、ほとんど家に帰らない。そのことで離婚したと噂に聞いたことはあるが、興味をもったこともなかった。今度、時間があったら聞いてみたいと思った。

和泉はコーヒーを飲みながら、社内データベースにアクセスして、点字ブロックと駅名を入れて検索してみた。

二十年前の夏、県内で初めて駅前に点字ブロックが敷設された時の記事がヒットした。「これで駅まで一人で歩いて行けるようになりました！」という見出しだった。記事を読もうとすると、PCの画面に新着メールの表示がされた。村上デスクからだった。振り返ると、デスクは机に積まれた決裁書類に目を通しながら押印をしていた。

メールを開くと、
「おつかれさま。雪かき男の取材を依頼しに来た伊部さんと駅前交差点を検索しておくこと。以上、頑張れ！」と書かれていた。
和泉は引き出しから、名刺フォルダを取り出し、伊部昭雄の名で検索してみた。点字ブロックが設置された同じ年の冬にあった駅前交差点での交通事故の記事に当たった。付随して音響装置信号機となったのは一年後、どれも二十年前を中心にしたできごとだった。
和泉はそれぞれの日付をメモし書庫に向かった。可動式のラックを動かし、新聞記事の縮刷版を探した。和泉はメモした日付のものを全部両手に抱えて机に戻った。
「おはよう」
後輩の山村が出社していた。
「おはようございます。先輩、朝帰りですか？」
和泉は山村の言葉には答えず、記事を探し、該当のページに付箋を貼り、複合機でコピーをとった。
「あっ！」
和泉はコピーされた記事を斜め見て思わず大きな声を上げた。出社し始めていた他の記者は朝の準備で忙しいのか、和泉の声など気にしていないようだった。
「ごめん、山村君、朝礼の司会お願い。ちょっと出かけてくる」
「いいですけど、先輩、仕事ですか？」
山村は、和泉に急ぎの仕事があるとは思えないという疑いの目で見ていた。
「すみません、取材に行ってきます」
和泉は村上デスクに声をかけた。
「気をつけて行ってこい」
デスクは、他の記者が出かけるときと同じように声をかけてくれた。その言葉を和泉がかけられたのは久しぶりのような気がした。
ビルの外に出て、和泉は空を見上げた。やわらかな雪がまた落ちてきていた。雪かき男はいる。今もまだ雪かきをしているに違いない。
和泉は急いで電車に乗り、コピーしてきた記事を読み込んだ。
県内で初めての点字ブロック完成の記事。その駅が最初に選ばれたのは、当時、近くに盲学校があったからだった。片側の歩道のみの設置となっていたが、点字ブロックもJIS規格を取り、今後、全国の自治体や公共機関に広がっていくと記事には書かれていた。盲学校の校長の写真と談話、そして、利用者の声として、白杖をついて歩く女性と横で支える男性の写真「これで駅まで一人で歩いて行けます」の女性のコメント、それが記事の見出しにもなっていた。二人の写真の括弧書きの説明には、（お互いに力を合

わせ視聴覚障がいを乗り越えようと秋には結婚予定のお二人）と書かれていた。男性は若く痩せてはいたが、その面影は雪かき男だった。
そして、もう一つの記事。同じ年の冬、駅前の交差点で女性が交通事故死。原因は歩行者側赤信号での女性の雪かげからの飛び出しと交差点内でのトラックの前方不注意。死因は衝突後の転倒による頭部打撲。当日は十二月の初雪としては記録的な大雪。女性は妊娠二か月。産婦人科受診後に夫を駅に迎えに行く途中の事故。運転手は業務上過失致死の疑いにて拘留、運行記録をもとに過労の実態がなかったかも運送会社を調査中となっていた。
交通事故の被害者は、半年前の点字ブロックで「これで駅まで一人で歩いて行けます」とコメントしていた女性と同じ名前。姓は雪かき男と同じ高田となっていた。しかし、事故の記事には、どこにも視覚障がいがあることには触れられていなかった。おそらく警察発表通りの記事なのだろう。
事故の加害者は会社員伊部昭雄。雪かき男を記事にしてほしいと支局に頼みにきたのは被害者の命日だったのだ。二十年間、毎年事故のあった日に花を手向けるために事故現場に来ていたのだろう。
事故から二十年、雪かきを続けた男と命日に花をもって事故現場を訪れ続けた男、二人の人生が十二月としては二十年ぶりの記録的な大雪で再び交錯したのだ。
和泉は目を閉じて、駅前の交差点を思い浮かべた。点字ブロックができ、駅まで歩けるようになったと思っていた妻が、子どもができたことを知らせたくて、駅まで夫を迎えに行った。当時は携帯電話も普及していなかった。その時、その年最初の本格的な雪。黄色い点字ブロックが初めての雪に埋もれていく。妻の白杖はブロックに触れることなく、雪かげから赤信号の交差点に一歩踏み出す。そこに目の前の信号が黄色となったのを見て、急いで通過しようとするトラックがアクセルを踏み込む。年末の繁忙期で疲れていた運転手の判断は遅れ、アクセルを踏み込んだ足をブレーキに踏み変えるが、路面の雪が凍結しタイヤは制御をなくす。
電車内に到着を知らせる音楽と駅名のアナウンスが流れていた。
その一年後、同じ交差点の信号が音響式、押しボタン式に変わったことは、事故との関連なしに事実だけ簡単に記事になっていた。
点字ブロックが敷かれただけでは、記事の見出しにある「駅まで一人で歩いて行ける」ようにはなっていなかった。交差点に音響式の信号が取り付けられて初めて成り立つことだった。機器の開発、行政の対応の順番にも問題はあったのかもしれない。しかし、少なくともきちんと取材

していれば、その見出しはつけなかったかもしれない。

加害者である伊部は、それがわかっていて、音響式交差点設置の署名活動をしたのだろう。

和泉は電車のドアが開くと、走って改札を抜け、駅前のロータリーに出た。交差点の向こうに雪を竹箒で掃く雪かき男の姿があった。真っ白な雪が積もった駅前には、男に向かって一本の黄色い道がのびていた。

「あの人は二十年もの間、たった一人で雪をよけてきたのです」

支局の受付で声を大きくした伊部の言葉が脳裏によみがえった。伊部もまた二十年間苦しみ続けてきたのだ。

雪かき男は歩道の雪かきをしていたのではない。点字ブロックの雪をよけていたのだ。駅前には線状の誘導ブロックと丸い突起の警告ブロックが続いている。点字ブロックは凹凸に意味がある。音響式の信号に気づいた伊部も、歩道に雪が積もれば、設置された点字ブロックの凹凸が埋まることに思い至らなかったのだ。

行政は視覚障がい者対策として全国に点字ブロックを普及させた。しかし、雪国ではひとたび雪が降ると、それは意味を失う。特に雪の降り始めは、それまで点字ブロックを使っていた人が急に目印を失うことで、命の綱が断ち切られてしまうことにもなるのだ。

「すべらないようにね」

「だいじょうぶ。おじさんが雪かきしてくれているから」

「いつもありがとうございます」

やわらかな雪が降る中、雪かき男は小さな子の手を引く女性の足元を竹箒で払ってあげていた。和泉には、それが雪の歩道を幸せそうに歩く三人の親子連れの姿に見えた。

和泉はリュックからカメラを取り出し、雪かき男にファインダーを向けた。

――とても簡単なこと。ものごとは心で見なくてはよく見えないの――

もう二度と会うことのできない、そして、発することのない凛香ちゃんの声が和泉には聞こえたような気がした。まだ見えていないことはあるに違いない。それでも、「雪かき男」の取材をしてみたいと和泉は心の底から思った。雪の降る季節になると現れ、駅前の歩道を雪かきする「雪かき男」の物語、心で見たことを自分の言葉で記事として伝えたい。

雪どけまでには時間がある。デスクにも紙面を大きくとってもらおう。

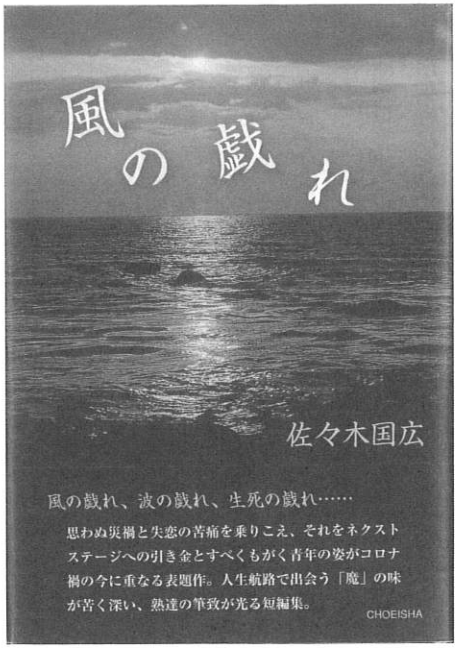
和泉の瞳には、白い雪に真っすぐのびる黄色い道が遠くまではっきりと見えていた。

銀華文学賞 優秀賞 受賞の言葉　青木ガリアン

拙い作品を何度も読んでいただいた選考委員の方々には心より感謝申し上げます。

心で見なければ大切なことは見えない。雪に埋もれ隠れてしまったこと、私自身が気づかずにいた足元の現実、それを心で見なければという思いでこの小説を書きました。賞をいただけたことはとてもうれしく思います。生きていく営みの中で見えにくくなっている大切なものを今後も丁寧に書いていきたいと思います。今回は本当にありがとうございました。

青木ガリアン
あおき　がりあん
1961 北海道北見市生まれ
熊本大学文学部修士課程修了
物流会社退職　札幌市在住



佐々木国広短編集「風の戯れ」
鳥影社　本体価格 1,500 円

森口透（「あべの文学」）
「北オハイオの冷たい風」
編集工房ノア　本体価格 1,900 円

銀華文学賞 時代小説優秀賞

上山宿始末

小笠原 新

酒井家は酒井忠次を中興の祖とする。彼は徳川家康の麾下、三方ケ原の戦い、小牧長久手の戦い、大阪冬夏の陣などで数々の功績を上げた勇将であった。忠次はその武功によって徳川家四天王の筆頭とされた。格は家老であり、徳川家家臣の内、三河吉田三万石を預けられ、唯一の城持ちとなった。二代嫡男家次は弱冠十二歳で長篠の戦いに臨み、敵の武将首を上げた。家次の家の一字は家康より賜ったものである。三代目の嫡男忠勝は出羽の国、荘内（十三万八千石）に移封され、荘内酒井藩の初代藩主となった。

「荘内鶴岡は陸奥越後両国の間にあれば、今般の移封の儀、貴殿の家柄格別なるを以て仰せ下さる。永く城を守護し、天下の藩屏たるべし」（中略）と徳川実記にある。

酒井家の藩主は歴代大柄で、武勇に優れていた。質実剛健にして尚武の気風が強く、荘内入部後も武断政治を行ったのであった。

徳川幕府は各種の名目で大名家を減封し、改易を行った。しかし、酒井家は転封の度に加増され、封土を増していった稀な藩であった。故に酒井藩に浪人問題は発生しなかった。それどころか増えた封禄に応じて、その都度、新規召し抱えを行った。幾度の転封を経て最後は荘内藩の領主として鶴が丘に入部し、北方諸大名の鎮撫となった。

酒井藩の尚武の気風は強く、しばしば剣術試合が行われた。新規召し抱えの際は、彼らを面接し、腕を試してから家士とした。

一

「えーい」

荘内酒井藩、鶴が丘城三の丸にある馬場から、烈帛の気合いが響き渡る。

空は青く澄み、周囲の松林が風を受けて颯々と松籟を運んでくる。馬場の一画の土はならされ、更に砂が敷かれていた。時に白い砂ぼこりが舞い上がった。

今、二名の剣士が手に木刀を持ち、対峙していた。これから新規召し抱え志願者の腕を試すのだ。幔幕を張りめぐらし、中央に藩主と重臣が座した。左右には家中の侍が控え、試合の成り行きを見守る。

係役人が東西の幔幕を絞り、二人の剣士を招じ入れる。藩内剣術の達人と志願者が粛々と登場し、藩指南役の真田軍兵衛が中央に出て裁く。立ち会いの結果は逐一書き役が記してゆく。勿論、木刀を使うので、打ち込みは一寸で止める約定になっている。しかし、受け損なって怪我をする者が例年少なからずいた。そこで怪我をしても異存はない、という一札を志願者から取った。

立ち会いは一瞬の内に、あるいは数合打ち合った後に決した。見事な剣技を示す者がいる。その時は、藩主初め一同から惜しみない拍手が送られた。

「おりゃーっ」

烈帛の気合いが響いた。もう一方の剣士は無言で受ける。

この試合、藩選出の剣士は丸山左門といい、新進気鋭の若者だった。片や志願者は中年で笹原隼人といい、身の丈は普通ながらも肩幅があり、胸も厚く、堂々たる体格の剣士で、薄く髭を蓄え、黒々とした顎髯はやや長かった。

この二人の立ち会いは極めて特異なもので、一同の注視の的となった。

五間の間隔をとり、藩主に一礼して向かい合う。丸山は青眼に構え、笹原は左手に剣を持ち、両手をだらりと下げていた。両者はそのまま距離を詰めてゆく。間合い一間、丸山の足はぴたりと止まった。あたかも威圧されたかのように立ちすくんだのだ。知らぬ間に間合いは更に詰まり、撃尺の間に入っていた。丸山は青眼に構えていた剣を上段に振りかぶると見せ、そのまま踏み込んで笹原の面に打ち込んだ。

その瞬間、笹原はわずかに右に体を捌き、横一文字に丸山の左の胴を抜いていた。右片手、抜き打ち切りだった。左手は腰に当て、更に左足を廻し、のめる丸山の斜め後ろから彼の首筋にぴたりと剣先を付けた。見事な残心だった。

笹原の動きは小さくかつ速く、笹原がいつ木刀を右手に取ったのか誰にも分からなかった。静寂の中、丸山の踏み込んだ足が馬場に白い砂ぼこりを立てた。丸山は吸い込まれるように剣を振るい、笹原はわずかに動いてそれを捌いたのだ。

間合いに入るや否や一瞬早く敵を制する——それは居合いだった。

師範役の真田はそれを見て取り、即座に笹原の勝ちとし

たのである。

◇

この日の会議は、新規召し抱えについてであった。話は淡々と進んだ。だが笹原隼人のところで暫く論議が交わされた。笹原の提出した功名の覚え書き、旧主からの知行状、感状は実に立派なものだった。旧最上藩で六百石を得ていた上士であり、若くして戦いに臨み、敵の武将首を挙げていた。更に先日行われた御前試合の有様も賞賛と共に語られた。

「この人物は文武両道衆に優れ、稀に見る逸材である。今、召し抱えれば将来藩の為になること必定。旧禄の半知三百石を与えるが良かろうと存ずる」

高二千石、筆頭家老の池田民部は淡々と高三百石を主張した。だが、高千五百石、次席家老の宮田大膳は激しい口調で反対した。

「それは最上家にいた時の話である。我が藩に仕える以上は家法に従ってもらう。それに新規お抱えの者に高禄を給するのはいかがなものか。この者の旧主は最上であり、今、三百石の高禄を与えれば、酒井藩譜代の家士のねたみを買うであろう。近年、最上藩のお家改易に伴い、扶持を離れた最上浪人を多く召し抱えている。ここで高禄を与えれば、将来我が酒井藩と、最上藩を旧主とする者の対立の元となりかねない」

宮田の朗々たる声は聞く者を圧倒した。大膳は百石を主張し、最後にこう付け加えた「それほどの士であれば、その内、功を立てるであろう。その時に加増するのが至当」

その後も意見は交わされたが、結局、家老酒井玄蕃の発言で笹原隼人は百五十石を以て新規召し抱えとなった。役職は遊佐郷の代官補佐とされた。

本丸の御殿で藩主に目通りし、重臣の居並ぶ前で申し渡しを受けた。

長廊下に出てから笹原は下士に呼び止められ、十二畳ほどの控えの部屋に入った。

宮田大膳が呼んだのだ。他に人はいなかった。姿を見せた大膳は四十代初め、大兵肥満で高価な衣服に身を包んでいた。立派な容貌で、眉太く、鼻高く、唇は薄かった。笹原を値踏みするように目をやりながら野太い声で告げた。

「家法に依って新規召し抱えの際は、高百石を限度とする。それがしの口添えとお上格別の思し召しに依って高百五十石と相なった。励むよう」

宮田大膳の朗々たる声は、たとえ小声でも聞く者を威圧した。

「ははっ、有り難き幸せに存じまする」

笹原は平伏して礼を述べたのである。

下城する時、偶然、大手門前で筆頭家老の池田民部と出

会った。民部は小柄で、その質素な身なりは、もし家老であることを知らなければ見落としてしまうであろう。会釈すると近づいて来て穏やかに語りかける。訥々と話すものの、眼が時に鋭い光を帯びた。

「そこもとは将来、お家の柱石となられる方とお見受けする。今後も励まれるよう」

威あって猛からず――笹原は深く感じ、頭（こうべ）をたれたのであった。

最上町への道を辿る。町の間に田が広がり、青々とした稲の苗が寸々と伸びていた。歩を進めながら、今、言葉を交わした二人の家老が脳裏に浮かんできた。押し出しは次席家老の宮田大膳の方が立派だが、筆頭家老の池田民部の方が実がある、と笹原は思った。

鶴が丘は三方を山に囲まれ、西の山辺を越えると海に出る。北は湊町酒田に通じ、この間、美田が続き、合わせて荘内と呼ばれる米どころとなっている。鶴が丘の城は堀を掘って城郭を広げ、また、至る所で町造りが行われていた。各街道に通じる要所には武家屋敷が配され、城下の守りとした。東へ通じる清川道は、参勤交代の時に辿る重要街道であり、最上町は北東、酒田街道に通じる要所に置かれていた。

酒井藩の前の領主は最上藩だった。この時、領主は山形から鶴が丘に多くの家士を率いて入部し、町割の時に最上町を作り、そこに住まわせた。この一画に、藩主の勘気に触れて改易された家があり、その家が最上に縁のある笹原に給された。彼は妻子を呼び寄せ、その家に入った。家はご家中と比べると粗末なものの、笹原は最上時代の貯えを以て家の手入れをした。この家はしっかりした造作で、わずかの手入れで見違えるように変わった。

笹原隼人は二十歳の時に十五歳の妻志津を娶った。志津は容姿端麗の佳人で、翌年に男子虎の助を出生し、翌々年には男子松次郎を授かった。二人は今、十五歳と十三歳になっていたが、骨格は父親に似て逞しかった。虎の助は凛々しい面立ちを持ち、気性は激しかった。松次郎は端整な容貌で、控え目な性格ながら思慮に富み、良く兄に従った。

志津は嫁する時に父から教えられていた。男は戦いで命を落とすこともある、女は家を守り、子を育てる、嫁しては夫に従うように、と。志津は心ばえも良く、その教えを守り、主人隼人に従ってこれまでを過ごしてきた。夫から愛され、その夫は誰からも信頼され、自分まで人々から尊敬のまなざしを受け、十分に幸せだった。最上時代に比べれば、石高は減ったものの、贅沢を慎めばかなりの蓄えも出来た。この家は奥に広い空き地があり、農家出の娘を雇い、共に畑を作った。志津は畑仕事で汗を流すのを苦にしなかった。

隼人は最上時代、子が十歳を越すと庭に出て居合いを教

えた。二年後、二人は剣技の基本を習得するに至った。それは戦国時代を経た、実戦に強い剣法だった。今、鶴が丘に移るや、早速五日町の真田道場に我が子を通わせた。道場主真田軍兵衛は藩の師範役であり、ここが藩で最も隆盛し、門弟の数は三百人を越していた。

四天王と呼ばれる高弟がいて、年の順に、田中主水、進藤弥五郎、守屋守身、丸山左門であった。筆頭は田中主水で、面擦れの額が物語るように腕は随一と見なされていた。だが門弟は彼との立ち合いを恐れた。偏執の性があり、相手をなぶる風があったからである。道場主の真田軍兵衛はこれを嫌った。ために師範代は他の者に任された。進藤弥五郎は田中の後輩で、常に田中と行動を共にした。守屋守身は進藤弥五郎と親しく、互いに技をみがき合った仲だった。守屋はここまで剣技に達すれば十分と考えたのであろうか、稽古を怠りがちになった。四天王の末席は近習役の丸山左門十七歳で、若手の俊秀だった。日々の稽古を怠らず、腕を上げていた。

丸山左門は先の御前試合で、笹原隼人の相手をした人物である。虎の助は入門するや否や左門とほぼ互角に打ち合った。左門は精悍な相貌を持ち、性公正、屈託のない人柄で、次第に虎の助、松次郎兄弟と親しく言葉を交わすようになっていった。

左門は稽古を終え、汗を拭いながら兄弟に話した。

「君らの父上は大変な腕前だ。試合の後、相手は一枚上だった、と仲間が私を慰めたが、それが師範の耳に入り、きつく叱られた。数段上だと」

更に言い継いだ。

「三日後に左のわき腹に痣を生じ、それがいまだに消えない」彼は稽古着を捲った。色白の皮膚には消えかかってはいるものの、一寸ほどの青い痣がうっすらと浮かんでいた。

「打たれた覚えはない。剣気で生じた痣とすれば……」

丸山は言葉を切り、何度も顔を振りながら告げた。

「恐ろしいことだ」

家に帰り、兄弟は夜、これを父に話した。隼人は無言で聞き、ややあって、「良き友が」と呟いた。間を置いて、「出来たようだの」と。

二

ある日、道場で、進藤弥五郎が松次郎に稽古をつけた。木刀を手にし、型を教えるという。松次郎は相対した。だがそれは型稽古どころではなかった。粗暴な剣で、容赦なく打ち込んで来る。当たれば骨を折るであろう。松次郎は止むを得ず受けに回った。受けては流し、流しながら後ずさった。両者は大人と青年の如く体格の上で大きな差があった。松次郎は次第に押され、羽目板を背負うまでになった。虎の助は怒りを発した。これは稽古ではない。痛ぶり

ではないか！　木刀をつかんで立ち上がろうとした時、丸山左門がこれを抑えた。木刀を手に取って両者の間に飛び込んだのだ。その時、師範の真田軍兵衛が現れ、一見して場を見て取った。「それまでっ」と鋭く重々しい声を上げて止め、不愉快そうに進藤弥五郎を呼ぶと、奥に入っていったのである。

◇

酒井藩は郷士を三郷五通に区分した。最上河の北を河北といい、遊佐郷、荒瀬郷、平田郷に分けて治め、最上河の南を河南といって、狩川、中川、櫛引、京田、山浜の五つの通（郷に同じ）に区分したのである。その頭を代官、代官補佐と言い、全部で十六人から成る支配体制を敷いた。更に下に農民代表の肝煎を置いたのである。

遊佐郷の代官は守屋守身で、高三百石を受ける上士だった。長身、色白の美男子で、鼻高く、唇は薄くて赤かった。頭が切れるという評判で、その通り弁舌さわやか、剣の腕も確かで、真田道場では四天王の一人、つまり、丸山左門の上に位置していた。

笹原隼人は守屋の補佐として酒田の北、遊佐郷に赴いた。だが、すぐに気付いたことがある。守屋は代官屋敷にほとんどいないのだ。遊佐郷を検分したが、その状況は惨憺たるものだった。百姓は守屋の苛斂紂求により疲弊し、つぶれ百姓が続出していた。

これまでも農民は、子が生まれると間引いた。飢饉のたびに人買いが村に来た。農民は餓死を免れるために娘を売り、困窮甚だしい時は他国に逃散したのである。

笹原は代官屋敷で下役を問いただした。下役はあたりを窺いながら震えつつ話した。笹原は驚愕した。上司守屋が恐るべき性癖を持つことが分かったからだ。

女色に耽り、しかも荒淫で相手を選ばない風があった。代官屋敷には十数人の農家の婦女が働いていた。守屋はその半ばを犯したという。鶴が丘に妾を抱え、酒田の町にも妾を置いていた。更に昼、百姓家に押し入り、妻と娘を犯す。婦女を押し倒した時、刀を抜いて顔のそばに突き刺すのだという。言うことを聞かなければ無礼討ちにする、と。ことが終わると抜き身の刀で女の頬をひたひたと打つ、と。

どこまでも逆らって従わない農婦がいた。嫁に来たばかりの若妻だった。何と守屋は女を手討ちにしたのである。家の中から何度も悲鳴があがり、裸にされた女が外に走り出る。

炎天下、白い肌をさらし、乳房と黒い恥毛は既に血にまみれていた。袴を脱ぎ捨てた守屋がそれを追う。守屋は股間を露わにしたまま女の背後から一刀、また一刀と太刀を浴びせ、女は即座に絶命したのである。

勿論、夫は肝煎に訴えた。だが肝煎は、到底代官にはか

なわない、長いものには巻かれろ、と彼を説得した。結局、この件は無礼討ちということで夫の泣き寝入りとなった。

下役はおびえつつ話を続けた。下役はその後始末を命じられ、女の死体を処理したという。笹原は腕を組んで唸った。いずれもないがしろに出来ない事がらだった。これは今後、折を見て意見することになろう。

「しかも」と下役は言葉を続けようとした。その時、外で音がし、下役は慌てて口をつぐんだ。代官守屋が帰ってきたのだ。笹原の前に姿を現した守屋からは酒の臭いがした。

「いやあ、肝煎の所ですっかり馳走になっての」

そう言いつつも、素早く下役に鋭い流し目を送った。

笹原は着任時、遊佐郷を巡見した時、多くの放棄された田畑を見た。農民が年貢の取り立てに窮し、田畑を手放したのだ。このつぶれ百姓を回復することが焦眉の急だった。

代官屋敷に肝煎を呼んだ。肝煎はこの土地の土豪であり、侍に準ずる格を持っていた。人徳のあるこの肝煎は笹原の人柄を見抜いた。守屋の苛斂紂求ぶりを話し、逃散の相談をしている村もある、と切々と笹原に訴えた。

「放棄された田畑を回復する。年貢は免除するので村人で助け合って手を入れてほしい」

肝煎はかしこまって聞き、実行した。耕作された田畑は元の持ち主に返した。農民が喜んだのは言うまでもない。つぶれ百姓が本百姓に復活したのだ。

だがまだ農家の次三男対策が残っていた。新田開発の必要があった。これまでも新田開発は絶えず行われてきた。だがそれらは山辺のものだった。山のふもとを耕し、奥へ奥へと入っていったのだ。途方もない奥の山間地に開かれた田は、役人も知らず、そのまま農民の隠し田となった。しかし、農民はわずかの収穫しか手にしなかった。

笹原は遊佐郷を巡見した時に感ずることがあった。広大な谷地（やち）が手付かずにあり、それらは中小の河川の左右にどこまでも広がっていた。笹原はその谷地に目をつけたのだ。

笹原は酒田の町に出て竹籠屋を訪れた。簡単な図を示しながら説明した。

「このように隙間のある大きな竹籠を作ってもらえまいか」

「何になさいます?」

いぶかしむ主人にその用を話した。竹を割り、その竹紐で大きな籠を編む。それに大小の石を入れ、川の縁に置き、岸辺を守る。つまり蛇籠（じゃかご）である。主人は納得した。それは普段の籠作りよりも容易な仕事だったのだ。

またしても代官屋敷に肝煎を呼び、谷地に手を入れ、新田とする案を説明した。

「百姓は今でも疲れ切っています。果たしてその課役に耐えられるか否か疑わしゅうございます。それに開発された田畑は誰のものになるのでしょう?」

肝煎は額に皺を寄せ、言いにくそうに問うた。笹原の答

えは明快だった。

「開いた田畑は百姓のものとなる。つぶれ百姓を本百姓とする。農家の跡取りを除いて次男以下の男子にそれを与え、土地持ちとする。新たな田畑には三年、年貢を課さず、耕した者の取り分とする。この間のお上の労役は免除するように取り計らう」

さすがの肝煎も笹原の熱意に打たれ、次第に説得されていった。既に笹原は放棄された田畑を復旧し、つぶれ百姓を救済しつつあったのだ。

田植えは全て終わっていた。直後の農閑期に村人を集めて笹原は作業を説明した。こうして村をあげての作業が始まった。村人が一斉に谷地に入り、川床を掘り下げた。大小無数の石と大量の土が出た。石は例の竹籠に詰めた。土は谷地に盛り、川に臨む所に高い畝を作った。無数の竹籠が運ばれ、石が詰められては畝の外側に置かれた。川岸は蛇籠で護られたのである。

更に土手の下に節を抜いた竹筒を差し込んだ。谷地の水を抜くためである。竹筒の先からは水がほとばしり出て来たのであった。

谷地が乾いてくるに従い、生えている雑木を切り、萱（かや）を刈った。川のそばなので柳が多い。川から絶えず水と肥やしが運ばれるので、かなり根を張っている。それらを牛に引かせて抜いた。乾くに従い、次々と火をつけて燃やす。無数の火柱と黒煙が狼火（のろし）のように川の両岸に立ち昇った。その灰はそのまま肥料となるであろう。更に牛馬の糞で作った堆肥を運び入れた。

これはそのまま治水工事となった。従来、長雨が続くと、かさを増した水は谷地を浸しただけでなく、家と田畑を襲い作物を流していた。笹原の指図で幅と深さを増した中小の河川は、その後の大水をも穏やかに流し去ったのである。

これらの作業はとうてい一農家で出来る仕事ではなかった。村をあげての作業であり、村人は老いも若きも助け合い、楽しみつつ作業をこなしていった。食事時には随所に笑い声が起こった。まるで祭りのようだった。

その結果、広大な田畑が新たに出現した。土地持ちの本百姓が数多く生まれ、そこに家を建てて住んだ。しかもその土地は肥えていた。良く作物がとれ、それらはそのまま農民のものとなった。他藩から逃散した農民がやって来て遊佐郷に住み着いた。村は豊かになり、人が増え、子が多く生まれた。農民はこれを笹原の徳とし、彼を笹原様と呼んだ。

三年経つと、それら新田からの年貢が着々と納められるようになった。このやり方は隣の荒瀬郷、平田郷にも伝わっていった。「全村、遊佐郷に学ばざるはなし」と言われたのである。この間、代官守屋の口出しはなかった。こうして他の郷村からも新たな年貢が納められるようになり、それらは著しく藩庫を潤していった。

これは勿論、藩主の上聞に達した。だがその手柄は、上司、守屋守身のものとなった。守屋は鶴が丘に呼ばれた時に、さすがに気が咎めたのであろう、笹原を伴った。

重臣の居並ぶ前で、守屋は遊佐郷の新田開発について臆することなく述べた。

「それがし一人の働きではございませぬ。新規お抱えの笹原殿の着想には瞠目すべきものがあり、その働きがあずかって大なるものがあると存ずる次第」

守屋は笹原に目をやり、弁舌さわやかに付け加えた。

家老の面々は、この守屋の言を謙虚であると受け止め、藩主に上奏した。

この時、とりわけ喜んだのは次席家老の宮田大膳だった。さすが、さすが、と呟いて手を拍ったが、それは守屋、笹原のいずれに向けて言われたのかは分明しなかった。

守屋は大いに面目を施し、百石を加増された。高は四百石となり、番頭（ばんがしら）となった。笹原は五十石を加増され、高二百石となった。役職も上り、物頭（ものがしら）となった。物頭は歴代、ご家中と言われる譜代の家士から選ばれており、これは異例の昇進と言えた。

三

笹原はこれまでの間に、藩内が二派に別れていることを知った。池田派と宮田派である。新規お抱えの時、宮田大膳、続いて池田民部から話を賜った。宮田のそれは意図的なものだった。家老の宮田には、自分を配下に組するための下心があったのではないか？　だが池田民部は違うように思った。

藩主はぼそぼそと話す筆頭家老の池田民部よりも、理路整然、朗々たる美声で話す次席家老の宮田大膳の方を好み、寵愛した。何よりも宮田は機を見るに敏、人の機微を察すること神の如き心性を持っていた。それによって藩主の機微を即座に察し、当意即妙に応じたのである。

宮田の縁戚は、そういった家系なのであろう、美男美女が多かった。宮田は近年、姪に当たる婦女を藩主の側室に推薦した。美寿（みす）というその女性は、まさにこの上ない美女だった。その美しさは鶴が丘でも五指に入るであろう。胸と臀部は豊かに張り、腰が細いために、それは一層強調された。背が高く、五尺七寸（一七〇センチ）を越えた。その体は鞭のようにしない、藩主は一夜でそのとりことなったのである。

大膳はさしたる功がないにもかかわらず、三百石を加増され、千五百石から千八百石となった。家中は、美寿の方のお蔭ではないかと噂した。宮田は隠然たる勢力を持つに至り、それは筆頭家老の池田民部を圧倒した。

藩主の遠戚に当たる家老がいた。年若で硬骨漢の酒井玄蕃である。自分の下廻りとしては使えないと見た宮田は、

彼を亀が崎城の城代として推薦し、鶴が丘より酒田に移した。玄蕃は禄高を増したものの、亀が崎城の城代は藩の執政に参画しない。つまり、彼は執政の外に置かれたのである。宮田は二名新たに家老を取り立て、自らの派に入れた。

宮田は家禄を増した時に、隣家の土地を手に入れて広大な屋敷を普請した。彼は素姓の知れぬ浪人、博徒を屋敷内に多数養い、彼らを使って己の意に従わぬ者を闇討ちにした。藩内で時に不慮の死を遂げる者が出たのはこれに依る。宮田大膳の勢いは飛ぶ鳥を落とすが如く、彼の門前は機嫌を伺う家臣で雑踏し、まさに門前市をなしたのである。

◇

笹原は二年後、参勤交代の従者に列することとなった。宮田大膳が行列を宰領した。

守屋守身も従者に選ばれたと聞き、笹原は不吉な予感を覚えた。守屋の更なる欠点を知ったからだ。酒を好み、しかも飲むと乱暴狼藉を働いた。酒乱である。鶴が丘を離れて遊佐郷の代官となったのも、城下に置くわけにはいかない、という家老酒井玄蕃の意見に依ったことを後に知った。また、遊佐郷勤務の時、下役が「しかも」と言い、守屋の帰邸で口をつぐんだが、彼はそれを言おうとしたのかも知れなかった。

守屋が刀を抜いて女を犯す場面が脳裏に浮かんできた。それはまがまがしい光景だった。下役は必死に訴えたものの、自分はその時、聞くべきではなかったという後悔の念が心奥をよぎったのだ。ひょっとして彼に意見する日があるかもしれない。いや彼と対決する日が来るかもしれない。彼は剣の達人だという。その時は……と思った。

藩主発駕の日は、御供の藩士以下、数百人が大手門前に整列する。旗指し物が風に翻り、甲冑に身を包んだ家来が周囲を固めた。家老宮田大膳が宰領し、号令をかけた。威風堂々、御行列は粛々として出発し、それを見送る家臣、町人、農民が沿道を埋めた。

参勤交代で鶴が丘から江戸へ出府するには、通常二週日を要した。清川街道、羽州街道、奥州街道と行くのだが、春から夏にかけてこの道を辿った。清川からは舟で最上川を上り、清水、あるいは大石田に上陸した。

藩主は駕籠にも飽きると、馬に乗った。また供廻りの家来と共に歩いた。藩主は頭一つ抜きんでており、よく目立った。強健で、決して家来に遅れをとることはなかった。

笹原はかつて本丸御殿で部屋を隔てて藩主を拝した。その時は平伏し、藩主を仰ぎ見ることも出来なかった。今は日々、藩主を間近に目にした。

藩主は大柄で肩幅が広く、胸も厚く、堂々たる体格で、体力膂力（りょりょく）において衆に勝った。もろもろの武芸を幼時から嗜み、身に付けた。特に剣に優れ、一見識を持っていた。

容貌は額広く、眉と眉の間が広かった。頬骨が張り、鼻は太くかつ高く、引き締められた唇と頑丈な顎がそれを受けていた。それらが相まって威厳ある風貌となった。

特筆すべきはその性格にあった。癇癖の性極めて強く、不快に感じた時は額に青筋を生じた。決して暗愚な君主ではなかった。家臣の話を半ばにして察し、瞬時に判断する明敏な頭脳を持っていた。だが時に、それは早飲み込みとなり、それによって全てを切って捨てる悪癖があった。その時は唇をしめて唸るように短い声を発し、家臣は一瞬の内に黙した。この藩主は己の不快を力で示した。自ら手討ちにしたのである。

◇

鶴が丘から清川街道に入り、雪をいただいた山々を遠く近く目にしつつ最上川の川沿いの道を辿った。川は雪解けによって水かさを増しつつあったものの、青く清冽に流れていた。増水による舟止めもなく、清川から舟に乗り、無事、清水に着いた。ここからは陸路で羽州街道、奥州街道へと向かう。清水に着いた時はまたひとしおの喜びがあった。

舟形、天童、山形を越え、上山宿（かみのやまじゅく）に入った。出発してから五日後、旅にも慣れ、しかし、ほっとして疲れも出てくる所だ。ここで例年、大休止をとった。上山宿は城下町、宿場町、温泉町の三つを合わせ持った稀な宿場だった。家士が喜びとしたのは、ただ泊まるだけでなく、温泉につかり、旅の疲れを癒すことが出来たからである。

町はずれの旅籠は飯盛り女を多く抱えた娼家で、女は遊女として旅人の相手をした。

夕刻、最も大きな娼家に守屋は登った。相方も決まり、一室に通された。天井は低く、脂粉の匂いが漂う中、酒が運ばれた。守屋は痛飲し、相方を押し倒すようにして抱いた。だがそれで終わった訳ではなかった。女を裸にし、二度、三度と慰（なぐさ）んだのだ。女はただならぬ悲鳴をあげ、部屋の外に逃れようとする。

番頭が駆けつけた時、守屋は刀を振るって女に斬り付けていた。

これを配下足軽の見回りに出た笹原が聞きつけた。娼家に入り、二階に上ると、長い廊下が続いている。娼家特有の明るさが家と外との明暗を分けていた。灯火が血まみれで横たわる全裸の女を浮かび上がらせる。逃げる男の背が見えた。その先で、遊女が懸命に指で横をさす。

この時、笹原の眼前一寸、刀が障子を貫いた。笹原は腰を捻って障子越しに刀を振るった。十分な手ごたえがあった。切り裂かれた障子と屏風の陰から、長身の体がゆらりと揺れ、やがてどうと音を立てて倒れた。それは守屋だった。深々と胴を斬り裂かれた守屋は下帯すら付けていなかった。顔はひきつり、目は吊り上がり、口のまわりは血

とよだれにまみれていた。美男子の面影は失（う）せ、狂気の相貌を呈していた。

これは大事件だった。ただちに徒目付（かちめつけ）が駆けつけ、笹原から調書をとった。直後、宮田大膳が駆け付けた二名の徒目付の足軽を呼び、事情を質した。初めに駆け付けたのは弱輩の足軽だった。その後にやや年配の足軽が駆け付けていた。弱輩の足軽は動転し、ために年配の足軽が状況をまとめて報告した。彼は笹原から粛々と刀を受け取ったこと、笹原は悪びれることなく潔い態度であった、と述べた。

宮田は先ず「藩の恥を外に出すな」と釘を刺すように言い、次のように言い換えた。

「笹原は抜刀して娼家に入り、相手を確かめずに守屋を斬って捨てたというが誠じゃの」

そう足軽に迫ったのだ。目前の人物は今、鶴が岡の城下で権勢並ぶ者のない家老である。二名の足軽が平伏して従ったのは言うまでもない。

宮田大膳の動きは早かった。藩の恥を外に出すな、という名目で家士の口を封じ、守屋の亡骸（なきがら）を直ちに引き取り、焼却した。

宮田大膳は自らが調べたことを藩主に述べた。笹原は抜刀して娼家に入り、相手を確かめることなく守屋を斬って捨てた、足軽に請われて刀を渡した、と。それは守屋の非を伏せつつ片や笹原の非をあげつらうものとなった。

藩主は顔色を変えた。事情はどうあれ、下士が上士を斬り捨てたのだ。これを見て取った宮田大膳は、笹原を国元に返し、当分、謹慎処分にするよう進言した。藩主はこれを了とし、更に詳しく調べ、飛脚を以て報告するよう命じた。

笹原は目付の下役人と共に鶴が丘に帰藩し、謹慎に入った。

笹原は鶴が丘で再度、取り調べを受けた。年配の大目付の態度は丁重で、笹原に敬意を表しつつ問い、笹原は忌憚なく話すことが出来た。

上山の娼家で騒動があり、行くと遊女が斬られて廊下に倒れていたこと、廊下で障子越しに襲われ、抜き討ちに守屋を斬ったこと、その後、血のりを拭って鞘に納め、刀を足軽に渡したこと等を笹原は淡々と述べた。

大目付から、守屋は昔の上司ではなかったかと聞かれ、然りと答えた。その後、他に言うことはないか、存分に申してみよと言われ、江戸出府の御行列は、人選を過（あやま）たぬよう願い上げ奉る、と付け加えた。これは遊佐郷代官時代の守屋の振る舞いに憤激したからである。大目付はこれを正直に始末書に記した。

◇

江戸に着府するや藩主は笹原隼人の処置について家老に下問した。

「あれほどの……」間を置いて「峰打ちで」と藩主は唸る

ように告げた。

藩主は短い言葉で己の意思を忖度させるのが常だった。この言葉は、あれほどの腕なれば、峰打ちで然るべきではなかったか、という意味だった。その言は、藩主が笹原の御前試合での際立った剣技を想起したことを物語っていた。なかったか、と言う意味だった。その言は、藩主が笹原の御前試合での際立った剣技を想起したことを物語っていた。

藩主の思いは、あくまでも下士が上士を斬り捨てたという非違にあったと思われる。これでは藩の秩序を保つことは出来ない、と。

そこに飛脚が到着し、近習がそれを読み上げた。状況はやや相違していたが、これはよくあることだった。藩主の顔色が変わったのは、次の言葉を聞いた時である。

「江戸出府の御行列は、人選を過たぬよう」

これを、藩主には人を見る目がない、と受け取ったのだ。新規お抱えの家臣が譜代の上士を斬って捨てた上に、己に直接諷諫している、己の執政を非難している、と。事実、美寿の方を側室に容れた後、藩主は朝の政務に遅れるようになった。

藩主の顔が赤くなり、額に青筋を生じた。

「なっ、何だとうっ」引き締めた唇が唸り声を発した。これは、「なっ、……とうっ」と聞こえた。これがどれほど恐ろしいことを意味するか、皆、知っていた。近習は報告を止め、一座は静まり返ったのである。

「おのれ」藩主は唸るように言葉を漏らした。「そこまで……」

これは、おのれ、臣下がそこまで己を非難するか、と言う意味だった。

宮田は早くも藩主の意を忖度し、暫くの沈黙の後、言上した。

「明らかに」咳払いを一つして重々しく続けた。「過ぎておりますまするな」

藩主は江戸詰めの家老と宮田大膳を後に残した。

宮田は他を憚るように小声で進言した。低いながらその声は良く通った。

「かの士は長くは生きておりますまい」

藩主は宮田に目をやった。大膳に何か策が有るに違いなかった。

「そちに任せる」藩主は唸るように告げた。

これは家老と、ひと間を隔てて控える側近、近習しか知らないことだった。

◇

藩主は秋に帰国し、笹原隼人の謹慎を解いた。

蟄居謹慎していた笹原は、これより重い処分、つまり、切腹、上意討ち、改易、追放も有り得ると覚悟していた。

だが下されたのは実に意外な、つまり寛大極まる処置だった。それは宮田大膳の進言に依っていた。大膳は帰藩後、城下に流布する守屋の噂を聞いた。実に悪評嘖々たるものだった。そこで守屋の代官時代について下士に調べさせたのだ。

代官守屋の時代に逃散の談合をしていた遊佐郷の農民は、守屋の死を知って手を拍った。遊佐郷の窮乏は笹原様が救った、しかもその笹原様は悪党守屋を討ち果たした。農民は、もし笹原様に何かあれば一揆をも辞さない、と気勢を上げたのだ。

大膳は逸早く村人の意を捉えた。ここで笹原に過酷な処罰が下されれば、遊佐郷に騒乱が起こる恐れがあった。騒乱は他の郷村にも及ぶであろう。荘内に入部後、現在に至るも、まだ領民の人心を得ているとは言い難かった。

そこで、迎合した案を藩主に上奏したのである。

守屋の家は改易となった。御行列の最中、娼家に上がり、飲酒酩酊して乱心、遊女を斬り捨てていた。その行状は武士として言い訳が許されるものではなかった。

宮田大膳は謹慎を解かれた笹原隼人を城中の一室に呼び、ほぼ次のように話した。

「汝の始末書を読んだ。上士を討ち取ったのも万止むを得ざる仕儀ありと認む。その罪は汝の謹慎を以て償われたと解する。直言の士は得がたい、と我はお上に申し上げた。お上は賢明にもそれを了とした。故に汝の謹慎を解いた。これからも一段と励むよう」

笹原は平伏して宮田の言を聞いた。だが同時に釈然としないものも感じた。前にも同様の言葉を聞いていた。家老は千石以上の家格と衆に抜きん出た人柄によって選ばれたはずだった。そういった人物が、自らの口添えによって、藩主の意が変わり……などと言うだろうか？　大膳という人物の、底が見えたように思った。

この後、藩主の手討ち、武士の私闘等、藩内に引き続いて騒動や変動があった。笹原隼人の件は領地の外で起こったことでもあり、人々の記憶から薄れていった。一番大きな変動は、親戚に当たる武士の失策を理由に、筆頭家老の池田民部が隠居に追い込まれたことだった。池田家は長男に家督を継がせたものの、高は千石、中老に落とされた。宮田は筆頭家老となり、藩は宮田の牛耳るところとなったのである。

守屋の死以後、田中主水、進藤弥五郎は道場を変えた。道場主の真田軍兵衛は、若手に直接稽古をつけるようになった。田中、進藤、二人の高弟を見限ったからだ。

翌年、笹原は参勤交代のお供を命じられた。またしても宮田が御行列を宰領することになった。この時も、宮田から特別に控えの部屋に呼ばれ、懇々と注意を受けた。

「そちに特別見廻りの役を与える。田中主水を頭に、そち

と進藤弥五郎と三人の剣の達者を配した。主水の指示に従って行動されたい。道中、くれぐれも事なきよう」と。

平伏して聞いたものの、頭を上げた時に、宮田の薄い唇のはじがわずかに歪んでいるのを認めた。笹原は胸におりのようなものを残したまま下城したのであった。

元家老の池田民部は、五里離れた山里の出で湯、湯田川の隠居所に移ると決めた。民部は身辺整理を終えると、御行列出立の前々日、笹原を馬場町の屋敷に呼んだ。

「お上は遺憾ながら短慮の性がある。そなたが守屋を斬ったことを忘れてはいまい」

話は唐突にそう始まった。宮田大膳は口舌の徒、お上の意を迎え、近来、藩政を壟断している、かの宮田は策を弄するを好む、策を弄して人をなぶり、それを喜びとする風がある、と。守屋は宮田大膳の縁戚に当たる、と付け加えた。大膳が守屋を御行列に加えたのも、江戸で二、三年、学ばせ、帰国し次第、郡代に推挙し、続いて家老の列に加える思惑があったと。笹原の初めて知ったことだった。幾つもの謎が解けていった。守屋の顔の肉付きを良くすれば、宮田大膳のそれに重なるように思った。薄い唇が酷似していた。

民部はじっと笹原を見、光る目で告げた。

「気を付けられよ」と。

四

御行列は初夏五月に鶴が丘を美々しく出立した。

笹原は前に辿った道ではあったが、ひときわ別の感慨を以て左右に開ける風景を眺めた。

最上川は新緑に包まれ、梅雨で増水した流れは早く、大河の趣を存分に見せていた。乗船が危ぶまれたものの、無事に清水に上ることが出来た。後は陸路で、無事上山宿に着いた。

そこに飛脚が届いた。手紙には藩祖の誕生日が記され、また、美寿の方が懐妊した事、稲の第一期の見立てでは今年も豊作が見込まれる等、良い知らせで満ちていた。

宮田大膳が進言し、藩主は皆に祝い酒を下賜するよう命じた。

例年、上山宿では大休止を取る。藩士は湯につかり、疲れを癒す。しかも御酒が下賜されていた。だが藩士の気持ちも緩むので、油断は出来ない。何かあれば特別見廻り役の責任となる。田中主水は笹原隼人、進藤弥五郎に、この宿は特に配慮されたい、と命じた。

その通り、夜遅く各所で騒ぎが起こった。足軽が喧嘩を始めたのだ。それを鎮める内に今度は娼家で騒動が起こった。武士が刀を抜いて暴れているという。田中と進藤は別の騒動に向かった。上山宿にはこの時、秋田藩も逗留していた。

笹原が行くと、六人の武士が娼家の前で二手に分かれて

剣を交えようとしていた。酒井藩と秋田藩の家来で、遊女に冷遇されて怒った酒井藩の家来を、秋田藩の家来が揶揄したのである。外で決着をつけようと、刀を抜いたのだ。上山宿の遊女は前年の仲間の惨殺に怒り、酒井藩の家来は相手にしない、と暗黙の内に決めていたのだ。

笹原は説得した。酒井藩の家来はしたたか酒を飲んでいた。何としても説得に応じない。

夜が明け始めた。山々の稜線が赤みを帯び、次第に明確な朝空を形作ってゆく。ほの明るさは宿場町の薄靄を溶かすように消してゆき、家々の軒端を浮かび上がらせた。夜が明ければ衆目にさらされる。これ以上の騒ぎは藩の恥となる。笹原の脳裏に、かつてこの宿で守屋を斬ったことが浮かんだ。笹原は威嚇のために刀を抜いた。何と、六人が一斉に斬りかかって来たのだ。宮田大膳の、道中事無きよう、という言葉が脳中に閃いた。

笹原は刀の刃を返した。身近な者から次々と峰打ちで倒してゆく。彼らは逃げ去り、笹原は夜明けにやっと宿に引き揚げたのであった。田中と進藤は既に宿にいた。

朝、供揃えを整えた御行列は、何事もなかったかの如く粛々として出発した。

三人の見廻り役は全てを見届け、上山宿を出た。約五町行くと、そこに庚申堂がある。

田中主水が休み石に腰かけ、瓢を取り出して笹原に勧めた。

「前夜はいかい夜だったの。一睡もせなんだ。一休みしようではないか」

もっともな言葉だった。田中は自ら一口飲んだ。だがそこで瓢は空になった。進藤が別の瓢を渡す。農家が作った薬酒だという。笹原は一口、口に含んだ。とても苦くて飲めない。大きくむせて吐き出した。それが田中の袴にかかった。

「ややっ、無礼なっ」田中が叫んだ。

「ご無礼を」笹原は膝を屈し、低頭した。

この時、背後から剣気が襲った。進藤が無言で背に斬り付けたのだ。

体を捻って応じたものの、進藤の刀は笹原の背を斬り裂いた。笹原の刀は進藤の股間から腹へと斬り上げ、進藤は横ざまに倒れた。だが次の瞬間、いやほぼ同時に、背後から田中主水の刀が笹原の背を袈裟がけに斬り下ろした。よけるも躱すもなかった。笹原は背に二太刀を受け、絶命したのであった。

田中主水が御行列を追い、役人に知らせた。

「我らは前夜、一睡もしていない。御行列を見送った後、庚申堂で一休みした。その内に笹原と進藤が酒を酌み交わし、やがて口論となった。抜刀して斬り合い、相討ちとなった」

二人の亡骸からは酒気が立ち上っていた。田中は二人の口辺に瓢の酒を注いだのだ。

これは見廻り役の大失態である。宮田大膳はただちに配下の徒目付の役人を遣わした。

宮田大膳は別室で田中主水から縷々報告を受け、その後、徒目付の役人から報告を受けた。徒目付の役人の頭は剣技に秀でていた。

「二人が倒れていたが、どうも解せぬ死体だった」と。

「進藤は股間から腹にかけて斬り上げられて絶命、もう一人、笹原は背にふた太刀を受けてうずくまるように絶命していた」彼は感じたことを率直に付け加えた。

「尋常の斬り合いとは思えない死に方で、手練の傷口だった」

宮田は聞くや否やただちに二人の亡骸を焼却させた。藩の名誉を大義名分としてかざし、徒目付役人を威力を以て封殺、藩主にはかくの如く報告した。

「二人は薬酒を飲んでにわかに口論を始めた。刀を抜いて闘い、相討ちとなった」と。

藩主はうなずき、田中主水を閉門、笹原と進藤の争いは私闘とし、家を改易した。

飛脚がこれを伝え、藩からの使者が笹原の家に来て「改易」の申し渡しをした。

隼人の妻、志津は倒れ伏し、長男虎の助は「有り得ない！」と叫んだのだ。

使者が帰ると志津は、我が子虎の助、松次郎を手元に呼び、告げた。

「父上は出立前に言葉を残されました。もし我に何かあればかく計らうように、と」

二人に有るだけの金を渡すと、実家に帰っていった。

家の門口は太々しい青竹が打ち付けられ、兄弟は鶴が丘を後にしたのである。

この件については城下に種々の噂が乱れ飛んだが、あれほどの人物が……と、笹原を擁護するものが大半を占めた。

田中主水は閉門が解けたものの、知行は五分の一に減らされた。彼は藩の役職を辞し、宮田大膳の家士となった。主水は宮田の用心棒となり、かつ、ここで養う浪人、博徒に剣術の稽古をつけた。

五

虎の助、松次郎兄弟には何としても解せなかった。あの厳格な父が、御行列中、酒を飲み、剣を抜いて斬り合い、相討ちになったという。信じられないことだった。

兄虎の助は血相を変え、田中の家に切り込み、真相を問い質す、と息巻いた。

弟松次郎がこれを止めた。話すはずはない。兄者、それよりも上山宿に行き、事実を確かめるにしかず、と。

そこで上山宿に向かったのだ。兄弟は娼家の主人に聞いた。主人は二年続けて起こった騒動を良く覚えていた。兄

弟の相次ぐ問いに窮し、番頭に聞くよう勧めた。

実は前年の騒動の時、番頭も守屋から左手を深く斬られていた。武士が訪れ、五両の金子を渡したという。番頭はその金を叩き付けていた。主人が拾い、その金で番頭の手当てをした。番頭は今、湯治で傷を癒しており、兄弟はその湯宿を訪れて番頭に問うたのだ。

番頭の話は、宮田大膳のそれと著しく相違していた。

二人の侍が訪れたこと、大身のお武家と見て二人の見目良い相方を配したこと、騒動が起こった時、もう一人の侍はいなかったこと、その相方はまだ勤めている、と告げた。

娼家に行き、その女を呼んで問うた。一分銀を握らせると、やっと口を開いた。

「私は額のはげたお侍を引き受けた。若くていい男はそめちゃんに譲った。そのお侍はとんでもない悪者だった。そめちゃんは運が悪かった。強いお侍が現れて悪者を斬った」

「その強い侍というのは我らの父である。今年、宿場を出た所で非業の死を遂げた」

虎の助が告げると、遊女は驚き、堰を切った水のように話し始めたのである。

「隣りの部屋の声は、初め痴話喧嘩のようだった。用が済んだ私のお客は階段から下りて行った。私は遅れて帳場に行こうとした。その時、何度もそめちゃんの悲鳴を聞いた。それはすぐに叫び声に変わった。私は恐ろしくて立ちすくんだ。そめちゃんは裸で、しかも血だらけで廊下に転がり出た。番頭が駆け付けたが、腕を切られたようだった。そこに強いお侍が現れて私たちを助けてくれた。私は運が良かった。私は命が助かった」

遊女は怒りに燃えた眼差しで、涙ながらにそう話した。

「そめちゃんの体は血だらけだった。あまりのむごさに、みんなで泣きながらそめちゃんの血を拭いて帷子を着せた。大きな刀傷の他に、全身に噛んだ痕があった。乳房も股ぐらも血だらけで、乳首は半ば咬み切られていた。足首には痣があった。多分お侍は、そめちゃんの両足首をつかんで吊るし、振り回したのではないか」

まさに鬼畜の所業だった。遊女は涙を拭きながら話を続けた。

「そめちゃんには二十両が支払われた。主人がそれをそめちゃんの里に持っていった」

遊女仲間で僧を呼び、亡骸を焼いて寺に葬ったという。それ以上は聞けなかった。

上山の関を抜け、やや坂を下ると庚申堂に出る。兄弟は庚申堂を訪れた。庚申堂の裏と街道の左右には青田が広がっていた。

かつて飢饉の時に、多くの農民が上山藩に逃げ込んで来たことがある。藩は関所を固く閉じて、彼らを入れなかった。そのためこのあたりで餓死者が多数出た。後に藩はこ

れを哀れんで塚を立て、その後、堂宇が建てられたのであった。花は近隣の村人が供えていた。

兄弟は手前の休み石に腰かけ、暫く茫然として時を過ごした。ここで父が非業の最期を遂げたのだ。地面の名も知れぬ赤い下草は、血を吸ったように見えた。

目の前を一人の老爺が過ぎる。花を供えている。弟の松次郎が控え目に声をかけた。

「ご老人、前の月にここで侍の斬り合いがあったが、覚えていまいか」

老人は庚申堂に花を供えるのを日課としていた。老人は、二人の若者が、死んだ侍の息子だと告げられて仰天し、その後、たまたま目にしたことを訥々と語ったのである。

うずくまったお侍を二人がかりで挟み撃ちにし、しかも背中から斬り付けた、と。余りの恐ろしさに草むらに隠れ、お侍が去った後、逃げるのが精一杯だった、と話した。

六

これには後日談がある。

母の志津が夫の後を追うように死んだ後、虎の助と松次郎は江戸に向かった。

兄弟は江戸上野、忍ばずの池のほとりにある町道場に赴いた。看板に諸流指南とあるこの道場の道場主戸田五郎左衛門は多くの流派に学び、自らも一流派を興したのである。戸田は門弟を二人と立ち合わせた。虎の助の剣は攻撃的で打ち込みに稀に見る強さがあり、門弟も窮するほどだった。一方、松次郎のそれは穏やかで徹底した受けの剣だった。だが自らを守りつつも危うしと見るや一撃で相手を倒す鋭さがあった。つまり二人はかなり異質の剣だったのだ。道場主戸田五郎左衛門は二人の剣技を高く評価した。そこで二人をこの道場の内弟子としたのである。

それから三年が経過したものの、酒井藩の家士とはあまりかかわることはなかった。だが道場に入門した酒井藩の家士から、側用人に出世した丸山左門が江戸詰めになったことを知った。それに依り彼、丸山との交際が復活したのである。御徒町にある料理屋で兄弟は丸山との旧交を温めた。左門は盃を干しながら告げた。

「宮田は失脚したよ」

続く話は兄弟を仰天させた。

「宮田大膳を寵愛した藩主が死に、次の藩主は大膳の旧悪の調査を目付に命じた」

丸山は言葉を続けた。

「硬骨漢で鳴る亀が崎城の城代酒井玄蕃殿を鶴が丘に呼び戻した。玄蕃殿の進言で、隠居していた池田民部殿を筆頭家老に復活させた。今、二人は宮田派を粛清している最中だ」

宮田の悪業は想像を絶していた。直ちに宮田を追放し、家と財産を没収した、という。宮田が死罪を免れたのは、

江戸にいる幕府要人の取り成しに依っていた。だが宮田派の侍はその罪の軽重に従い、切腹、郷入り、改易、追放に処された。

「宮田は江戸に出府中、例の弁舌で幕府の要人との間に人脈を築いた。鶴が丘を離れた後、幕府の役職を得た。最近、息子に家督を継がせ、自らは松戸に隠居したと聞いている」

上山で笹原の死体を改めた元徒目付の役人は、真田道場で左門の指導を受けていた。左門はそれを伝えたが、それは藩の申し渡しとは大きく違っていた。

左門は最後に声をひそめて告げた。

「お父上はふた太刀を浴びたが、いずれも背後から斬られたものだよ」

やはりそうだった。父隼人はだまし討ちにあったのだ。斬ったのは田中と進藤で、二人で盟友守屋の仇を討ったのだ。進藤の死は誤算だったにしても、仕組んだのは宮田大膳だった。だとすると、旅中、酒を振る舞ったのも、夜の騒動にしても、宮田が謀ったものかも知れなかった。その後、各人を威圧し、あるいは金子を与えて口を封じたのだ。

藩主はどこまで知っていたのだろう？　どこまでかかわっていたのだろう？　聞けば、藩主は最近も庭番の小者を手討ちにしていた。それには然るべき理由があるはずだった。しかし、それを問う者はいなかった。問うても無益なことだったのだ。

丸山は宮田大膳の言は知る限り伝えたが、藩主のそれは決して話さなかった。公正、かつ義心に富む丸山左門も、藩主にかかわると見るや口を閉ざしたのである。

◇

兄弟は江戸を離れ、松戸に向かった。宮田大膳の隠居所を襲うためである。

松戸は江戸からも近く、街道を離れると穏やかな田園風景が広がる。田の稲は青々と伸び、吹く風は稲田特有の草いきれとさわさわという音を運んで来た。

こ高い丘の麓に大膳の隠居所はあった。背後に雑木林を持つ立派な屋敷で、生け垣越しに、庭で稽古している侍が見える。遠目にも十人はいた。

兄弟は夜明けに斬り込んだ。しかしそれは極めて特異なものだった。

剣戟（けんげき）の音が随所で起こった。歴然たる腕の違いがあり、用心棒は逃げ惑う。兄弟は、片端から峰打ちで倒しながら、声高に叫んだのだ。

「命は助ける。逃げよ」と。

下僕、女中は勿論、用心棒の侍も皆、逃げ散った。

二人を残した。宮田大膳と田中主水である。宮田と田中は座敷から庭に出た。というよりも兄弟の鋭い突きで追われ、庭に出されたのだ。

大膳は松次郎の剣を受け、右手首と左足を深く斬られ、そのまま縁石に崩れ落ちた。

田中は虎の助と闘った。初め虎の助を脅かしたものの、突いては払い、払っては突く虎の助の剣に次第に斬り立てられていった。虎の助の剣には寸秒の休みもなかった。体を打ち付けるようにして田中に迫ったのだ。虎の助も幾創かを負った。だがいずれも浅手だった。田中は十数合を経て数多（あまた）の傷を負った。特に両の手首の傷は骨にまで達し、刀を持てる状態ではなかった。激闘の果て、大膳の隣に尻餅をつくように腰を落とした。

弟の松次郎は刀を八双に構え、兄が討たれた時は直ちに斬り込むよう闘いを見守った。だが兄が田中の右手首を切り離した時、松次郎は刀を引いた。

宮田大膳と田中はその後、幾度も叫び声をあげた。やがてそれも弱まり、消えていった。大膳の屋敷はさながら突風が吹き抜けたようだった。

駆け付けた村役人は、二人の亡骸を見た。宮田は胸を貫かれ、田中は広い額を真っ向から割られ、縁石にもたれかかるようにしてこと切れていた。尻の下には血だまりが出来、昇り来る陽光が鮮血を色濃く染めていたのである。

腰を抜かした大膳の妾が一部始終を見ており、役人にそれを話した。女は、覚えたかとか、父のとか、いう声を聞いていた。

兄弟は江戸に戻ると丸山左門に事の次第を話した。更に虎の助は続けた。「最上の母の墓に報告した後、自分は上方に武者修行に出るつもりだ。弟は戸田道場の娘の婿となり、道場を継ぐことになった」笑いながら言った。「何、娘が弟に一目惚れしたのだよ。娘は色白でなかなかの美人だ」

松次郎は頬を赤く染めてうつむいた。それを横目で見ながら虎の助は付け足した。

「それに、道場主はかねてから居合いを諸流指南に加えたかったのだ」

大いに語り、飲み、二人は旧交を謝したのであった。

◇

宮田大膳の妾が話したことは近在の噂話となり、やがて大手門前の酒井藩屋敷の知るところとなった。次いで荘内にもたらされ、城下に流布されていった。宮田大膳の悪業を知る者は、これを聞き、深くうなずいたのである。

駆け付けた大膳の息子は、かねてから父の悪業を知っていた。各所に手を廻し、役人に金子を送り、父は野盗に襲われたと報告して、この件は落着した。

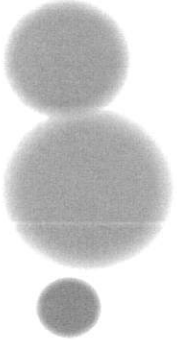
前の藩主は、信じ難いことだが、自ら手討ちにした者は実に百四十名に上る。斬首、切腹、上意討ちを含めると、この藩主の代に何と三百名余の死者が出た。藩主の聡明さは時に果断となり、癇癖の強さは時に理不尽な過酷さとなって現れた。前者は美談として酒井家世紀に記された。だが後者は、後難を恐れて記す者はいなかった。わずかに、「……家日記（けにっき）、……家文書（けもんじょ）、……聞き書き」等の形で断片的に記されているのみである。

次の藩主は余りの事に、これらの死者を悼み、千日堂を建立し、千日供養を行った。鶴が岡に蟠居する怨霊を鎮め、その累が将来、酒井家に及ばぬよう慮（おもんぱか）ったのである。

この話は主として池田家文書に拠っている。そこには上山宿始末についての記述がある。

「近来　いぶかしきこと　多し」と。笹原隼人の死については、「悪しき者　はびこりて良き士失へり　いたましきことなり」（中略）と慨嘆し、「これもまた　大膳の謀りしものか」と記している。

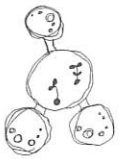
翌年、酒井藩は参勤交代の道筋を変えた。上山宿を避けたのだ。道筋の変更は事前に幕府に届けなければならない。届けが遅れた廉（かど）により、家老は幕府から罰せられたのであった。



銀華文学賞　優秀賞　受賞の言葉　小笠原　新

この度は優秀賞に選ばれ、誠に光栄で感謝しております。酒田、鶴が丘を合わせて荘内と呼び、酒井藩の藩主が入部して四〇〇年となったので、現在、四百年記念式典が盛大に催されております。偶然にも私は初代藩主の時代に材をとってこの小説を書いた訳ですが、尊敬する藤沢周平先生の作品の麒尾に付することが出来れば幸甚この上ないと思っております。

宜しく皆様のご一読を願っております。



小笠原　新
おがさわら　しん
1940 神奈川県横須賀市生まれ
早稲田大学教育学部卒業後、山形県酒田市に高校国語教師として赴任　定年退職
短編小説集「エアーズロック」刊行　日本図書館協会の推薦図書に選ばれる
長編歴史小説「シーギリヤの雨」（文芸社）刊行　日本図書流通センターより優秀図書に選定される
「高山樗牛賞」受賞
近年、短編小説集「ハーネス物語」（文芸社）を文庫本で発刊

銀華文学賞 優秀賞

震災を越えて

高橋惟文

一

二〇〇五年四月、深瀬康平は山形市内の工業高校を卒業後、仙台市内のT自動車販売・仙北営業所の整備士として就職した。当時の仙北営業所は、市内の四店舗の中でトップの売り上げを誇っていた。研究熱心で常に最新の技術に積極的に取り組む康平は、実力を高く評価されて入社四年目には整備副主任の辞令が出た。若い整備士たちは康平を慕い、工場内はいつも熱気に溢れていた。しかし、それは車の販売を担当する営業課員の嫉みを買うことになる。

営業マンも一応整備の現場を踏んでいるものの、背広姿で顧客まわりに没頭するうち、最新の自動車技術に乗り遅れがちである。すると、一部の顧客は営業マンを通さずに整備工場へ直接足を運ぶようになる。それは、彼らにとって屈辱以外のなにものでもない。これまでせっせと築きあげてきた顧客との信頼関係が崩壊したような寂寥感に襲われるのだ。

そこで会社は整備と営業の調和を図るため、営業所長には営業出身と整備出身を交互に充てている。しかし、そう単純に事は運ばない。というのは、営業出身者が所長になると営業マンたちの威勢が増してとかく整備士との関係はぎくしゃくしがちであるし、逆に整備畑の所長の場合、整備技術は充実するため顧客は車検の更新を重ねる。したがって新車の売り上げはあまり期待できなくなるのだ。

康平が入社して五年目の初冬のある日、康平は営業出身の所長、酒井修二と口論になった。まだ入社して間もない整備士が顧客の車を点検中、誤ってエンジンオイルを抜いた状態でエンジンを始動させた。そのためシリンダーの内部は焼きついてしまった。康平はそのミスを酒井所長に報告した後、新品のエンジン一式と交換させてほしいと願い出た。しかし、返ってきた言葉は康平にとって信じ難いものだった。

「整備の連中、気の緩みすぎじゃないか。きみは現場のリーダーなんだから部下を厳しく指導してくれないと。今どきの若い者は緊張感が持続しないんだよ」

「申しわけありません。すべて、私の責任です」

「いや、きみの上に整備課長もいるわけだから……。まあ、やってしまったことは仕方がない。だけど、エンジンオイルを抜いたままエンジンを始動させたなんて、営業マンは恥ずかしくて客に言えないよ。そこでだ、車体の劣化ということで新車の購入を勧めては」

「でも、エンジンを交換すればまだ十分乗れます。この際、ミスはミスとして正直に」

「きみ、顧客の窓口は営業マンだよ。整備の不始末を彼らに尻拭いさせたいのか？　頭を下げる営業マンの身にもなってもらわないとね。その車検、今回で三回目というじゃないか。『ぜひ新車を』って客に勧めるのは車屋の常道だ」

「でも、ほかに悪い箇所はありませんし……」

「だから、エンジンだけでなくその他の箇所も劣化しつつあるってことにするんだよ。たとえば排気マフラーの腐蝕が進んでいて、いずれ穴があいてしまうとか……」

康平は怒りに声を震わせ、顔を引きつらせて言葉を返した。

「所長、悪い冗談はやめてください」

「いや、私は本気だよ」

「ミスを隠蔽するつもりですか。納得できません」

「偉そうなことを言うんじゃない。愚かなミスをしでかしたのはおまえの部下だろうが」

「それはおっしゃる通りです。でも、私が申しあげたいのは、お客様に嘘をついていいのかということです。本当のことを話せばお客様は許してくれると思います」

「おまえ、なにか勘違いしてないか？　客がウチに好意的なのは、日頃から客の家を訪ねて『お車の調子はいかがですか？』とか、年末には『来年のカレンダーをお持ちしました』と、毎日靴の底をすり減らして頑張っている営業マンのお陰じゃないか。整備の連中は休憩時間に呑気にコーヒーなんか飲んでるが、営業マンはそうはいかない。すべて、客の都合に合せなくちゃいけないんだ。朝の出勤前に家に来いって言われりゃ早朝に行かなくちゃいけないし、客が遅くまで残業があれば何時間でもじっと待たなくちゃ

いけない」
「それは承知しています。でも、整備士だって深夜に起こされて事故車を搬送することは日常茶飯事です。そんなことより、車体の劣化が進んでいると、客にそんな嘘をついていれば、ウチはユーザーから信頼を失いますよ」
「おまえ、自分たちのミスを棚に上げてオレに説教する気か」
「説教だなんて……、所長にはT自動車マンとしての良心はないんですか?」
「良心? おまえにそんなことを言われる覚えはない。オレは昼も夜も、汗拭く暇がないほど毎日走ってきたんだ。おまえたち整備士が安穏に暮らせるのは、営業の連中が必死に車を売ってるからじゃないか」
「話を摩り替えないでください。私が申しあげているのは、大切なお客様に嘘を……」
「バカヤロー」
二人の口論は所長の罵倒で終わった。康平が怒りに肩を震わせながら所長室を出ると、恋人の日暮妙子が心配そうな顔で廊下に立っていた。二人の激論はすべて廊下に筒抜けだったのである。
翌朝、酒井所長は工場にやってきて、康平に「きのうは興奮して悪かった。でも、あの件は私の思う通りにさせてもらうよ。営業と整備の調和ということでの結論だ。営業課には客に新車購入の提案をさせる。深瀬くん、そのうち一緒に酒でも飲まないか。ギスギスした関係を長引かせるのは決していいことじゃないからね」と作り笑顔で言った。しかし康平の心は前夜から冷めていた。確かに売り上げを伸ばすことはディーラーに与えられた至上命令であり、そのために営業マンは日々精を出しているのは事実である。しかし、所長の顧客に対する姿勢はどうしても許せないのだ。
所長と口論になった「整備ミス」は、営業課のS係長が車体の劣化を顧客に大仰に説明し、新車購入の成約をみた。それ以来、康平の心は晴れず悶々と悩む日が続いた。康平の恋人、妙子はT自動車の福利厚生事業本部が運営する仙台診療所の看護師である。二人は二年前に会社の定期健康診断で知り合った。その後、妙子が診療所の情報紙を整備工場に配りに来るようになり、康平と親密な仲になったのである。二人が会社の中庭で談笑する光景を見て、周囲はいずれ結婚するのではと噂していた。
妙子が勤務する診療所と康平の営業所は駐車場が一緒である。その駐車場の隅に二人はいつも並んで車を止め、互いに相手の車の合鍵を持っていた。先に帰ることが多い妙子は、毎日のように康平の車の運転席にメモを置いた。それを読んだ康平は、翌日の昼に妙子の車内に返事を置くのである。ある日、妙子は康平の車のドアをうっかり半開きにし、ドアの施錠も忘れてしまった。その夜、康平の車のルームライトが点灯しているのに気づいた同僚は、ドアを開けてライトを消してくれたが、その時、妙子が座席に置いたメモを読まれてしまった。そこで二人はいろいろ考えた末にある方法を思いついた。それは、芯を抜いたボールペンの筒にメモ用紙を丸めて挿入し、互いの車のフロントガラス前にあるペン立てに差し込んで置くことである。そうすれば、たとえ誰かにドアを開けられても、メモに気づかれる心配はない。
妙子のメッセージは、「康平さん、お疲れ様でした。私は先に帰ります。今夜はあまり飲みすぎないようにね」とか、「今度の日曜日は康平さんのアパートで夕食を一緒にどうかしら。私、腕によりをかけて作りますよ」などと他愛無いものであったが、若い二人にとって、それはいつも心がときめく瞬間であった。

二

康平が酒井所長と口論した日から二ヵ月ほど経った二〇一一年二月、康平は三月末で退職することを会社に申し出た。酒井所長との軋轢を修復できなかったからである。康平が三月末で退社することを妙子に打ち明けると、彼女もまた診療所内での医師と看護師との人間関係にひどく悩んでおり、実は一日も早く辞めたいと話していた。
そして三月十一日の午後、東北地方を震度七の大地震が襲った。康平の住むアパートや営業所は海岸から遠いため、大津波の被害は免れた。建物も崩壊することなく壁に亀裂が入った程度で済んだが、妙子が勤務する古い木造の診療所と隣接する看護師寮は全壊した。康平が診療所に駆けつけた時、そこに妙子の姿はなかった。仙台市内は街中がパニック状態である。康平は妙子の無事を一晩中祈るしかなかった。
康平が駐車場に出向くと、妙子の車はなかった。康平の車は会社の車載用大型トラックに押されて前部が大きく潰れていた。巨大地震は駐車場内の整然とした車列を容赦なく蹂躙したのである。康平は無残な姿になった愛車を何度も点検した。しかし、妙子の行方を示唆するような物は何一つ見つけることはできなかった。
診療所にも足を運んだ。全壊した建物の周りで年配の女性職員が瓦礫の隙間から物品を拾い集めている。康平が恐る恐る妙子の消息をたずねると、意外な答えが返ってきた。
「日暮さんは診療所を辞めましたよ。実家のお父さんが倒れたと連絡が入って急いで荷物をまとめて……、たしか山形県の新庄市って聞きました」
「それ、いつですか?」
「昨日の午前中です。地震が起こる数時間前に……」
妙子の父親が病に倒れたことは確かに大ごとではある

が、康平に何も告げずに仙台を去ることは到底考えられない。

女性職員は、呆然と立ち尽くす康平に無神経な言葉を投げつける。

「日暮さんは患者さんや先生との間で何かトラブルを抱えていたみたいですよ」

「トラブルですか……、ところで日暮さんの実家の連絡先は分かりますか？」

「今は分かりません。色んな書類は全てこの建物の下に埋まっちゃって」

医師や看護師、薬剤師は全員が無事で、いま近郊のS温泉に所在するT自動車の社員保養所に避難しているという。仙台市内は各地に点在する携帯電話中継塔の破損がひどく、通話不能の状態である。また主要な道路は電柱や店の看板などが倒壊し通行止めになっていた。

康平から妙子へ連絡がとれなくても、仙台市内の電話が復旧すれば、妙子から連絡がある……と康平は確信していた。しかし震災から二週間が過ぎ、電話がほぼ復旧しても妙子からは何の連絡もない。

再開した市役所の戸籍係や社会保険事務所などを訪ねては、妙子の本籍地を聞いてまわったが、個人情報の問い合わせに応じるには面倒な手続きを要するとのことである。特に災害時は生命保険や損害保険が絡むため、行政機関は慎重なのだ。

震災から一ヶ月経っても妙子からは何の連絡もない。この狭い日本で戦時中の生き別れのようなことが起こっていること自体、康平は不思議だった。

三

妙子との連絡を絶たれた康平は、その年の五月にT自動車販売を退職して東京・文京区小石川に社屋を構える㈱新星工業に転職した。そこは自動車の解体を業としているが、再利用が可能な部品は取りはずして部品業者や整備工場等に卸している。

康平が新星工業に転職したきっかけは、業界誌の「二級以上の自動車整備士資格を持つ幹部候補募集」という求人広告を見ての応募だった。康平は面接試験を受ける直前、保険会社の山田陽介に新星工業の実態を調べてもらった。山田は、康平が勤務する仙北営業所に出入りしていた損害保険会社の主任で、年も同じであることから入社以来ずっと懇意にしていた。その山田が「新星工業は順調に業績をあげているが、社長の新井星一（あらいせいいち）には黒い噂がある」と伝えてきた。黒い噂とは、ヤクザ関係とのつながりらしい。康平は迷ったが、「整備士資格を持つ幹部社員候補」が魅力で、結局応募したのである。もし、山田の言うことが事実なら、たとえ合格しても入社を断るつもりだった。

面接は東京・小石川のBホテルで行われた。社長の新井星一は言動が紳士的で、山田がいう「黒い噂」には程遠い物腰である。

「ウチの会社は自動車の解体業ですよ。いわば車の墓場みたいな所です。よろしければ転職したいと思う理由を具体的に話していただけませんか」

「実は社内の人間関係や仕事のことで納得できないことがありまして……」

康平はディーラーに勤務する中で、整備部門と営業部門との一連の軋轢について詳しく話した。整備士一筋の道を歩んできたことは誇りでもあるが、営業部門への理解は薄かったことに悔いは残ることも述べた。

「分かりました。あなたはT自動車さんに何か忘れ物をしていると思っているんですね。その忘れ物とは、営業に関わる機会がなかったことだと。でも、企業ではそれぞれが役割分担をしっかりこなせばいいわけですから、あなたに忘れ物はないと思いますけど」

「おっしゃる通りかもしれません。でも、ディーラーの場合は整備と営業は両輪といえるでしょう。互いに理解し合うことで得るものは大きいと……。欲張りのようですが私は御社で二つの部門の接着剤の役割を果たせればと思っています」

「接着剤ですか、深瀬さんの考えはよく分かりました。でもウチの会社はさっきも言いましたけど、車の墓場みたいな所で毎日のように原型を失った事故車が運ばれて来ます」

「私は墓場だとは思いません。私は車の臨終に立ち会って死に水を取ってあげたいし、まだ使える部品の形見分けに関わりたいと願っています」

「車の臨終、死に水、そして形見分け……ですか。あなたの発想は実にユニークですね。そういうあなたの尊い思いを明日の社員朝会でウチの社員たちに紹介したいと思います」

新井社長はいかにも感心したような顔で話す。康平は穴があったら入りたい心境だった。仙北営業所の酒井所長とは、興奮せずに穏やかな口調で話していれば、相手も冷静になっていたかもしれない。

「深瀬さん、うちの会社について何か聞きたいことはありませんか？」

「はい、では失礼を承知で申し上げますが、社長さんは任侠の世界の方ですか？」

康平は咄嗟にヤクザという語を任侠と言い換えた。新井は苦笑しながら答えた。

「あなたは実に面白い方ですね。これまで私のことを暴力団関係者とかヤクザと中傷した人はおりますが、任侠っていわれたのは初めてです」

「違うんですか？」
「違います。でも一度刑務所に入ったことはあります」
「どんな罪で服役されたのですか？」
「あなたは刑務所に入った人間は嫌いですか？」
「そういうことではなくて、私はどんな罪で服役されたのか、お聞きしたいんです」
「あなたは厳しい人だ。どうしても服役した理由を知りたいなら答えます。私は大学時代に小さな印刷所でアルバイトをしたんですが、ある日、職工の一人が裁断機で右手の中指の先を削いでしまったんです。今は指先がちょっとでも出るとセンサーがそれを感知して機械は止まりますが、当時の零細工場はおカネがなくて先進的な機械を導入できなかったんです。指先を削いだだけでも床は血の海でした。近くにいた私は救急車を呼ぼうと一一九番にダイヤルしたのですが、社長が横から手を出して電話を切ったんです」
「どうしてですか？」
「この業界では指先を削ぐことは珍しいことではない。それに救急車を呼ぶと労働災害ということで外聞が悪いと……。私は『従業員の命と世間体のどっちが大事か』と怒鳴りつけて社長の顔を思い切り殴りました。結局、救急車は来てケガ人を病院に搬送……。当然のごとく私はクビになりました。そして、半年が過ぎてから、社長に対する傷害罪で起訴されたんです。社長は頬骨にヒビが入ったとして全治三ヶ月の診断書を添えて被害届を出したんです。新聞にも出なかった単純なケンカですが、裁判所は私に懲役一年の実刑判決を下しました。弁護人は、義憤に駆られた偶発的な行為に実刑は酷であるとして、私に控訴することを勧めましたが、私は弁護料の支払いが大変なこともあり、判決を受けいれて服役したんです。私は模範囚でしたから一〇ヶ月で仮出所できたんですが、事情があって満期の一年間、服役しました」

その事情とはこうである。ある日、刑務所で同房の囚人が作業中、突然腹痛のため床にうずくまった。それを仮病と見た刑務官は、彼の首筋を掴んで無理に起こそうとしたのである。その場に居合わせた新井はその刑務官に猛然と抗議した。普段は冷静で温厚な新井が血相を変えて対峙したため、驚愕した刑務官は最寄りの非常ボタンを押した。その直後、数人の刑務官が駆けつけて新井を革のベルトで縛り上げた。刑務所長は、刑務官にも非があったことを認めたうえで、新井に「激昂して悪かったと一筆書けば、この行為は不問にする」と持ちかけた。しかし新井は一貫して己の非を認めなかったため、判決通り一年間まるまる服役することになったという。

康平の入社面接は延々三時間に及んだ。新井の話は今まで見たことも聞いたこともない世界であり、康平は新井の

不思議な魅力に惹かれた。それから三日後に新星工業から採用通知が届いた。後日、例の腹痛の囚人は、東京の下町で大正時代から続く北関東義侠会の五代目会長、北丸剛毅であることを康平は知った。北丸は「仮釈放をふいにしてまで自分をかばってくれた新井星一氏のためなら命を捨ててもいい」と公言して憚（はばか）らないという。

四

東北大震災からすでに十年が経っていた。

康平は職場で実績を積み上げ、部下にも信頼を得て、社内で人望を築いていた。女性社員の目も、すでに三十代半ばで実力もありながらなぜか女性の影もなく独身を保っている康平に、魅力とともに不思議さを交えていた。

一年前から新星工業に勤めている事務部下の倉田澄江（すみえ）も、康平に時折不思議さの混じった視線を投げてきていた。澄江はT大学文学部の夜間部に通う女子学生で、年齢は康平より十歳以上離れているが、苦学しながらも明るく活発に若い翼をひろげている。仕事の合間に屈託なく康平に話しかけてきた。サークルも会社の仕事と絡めて、自分の実用的な力を蓄える方向が感じられた。

「私、大学で自動車研究会というサークルに入っているんですが、毎週宿題が出るんです」
「へえー、大学のサークルって宿題があるの？」

康平もそんなサークルに興味を持って、彼女に尋ねた。

「そうなんです。今週の宿題は『エンジンを始動させるとキーキーと音がするのは、エンジンルーム内で回っているベルトが緩んでいるからである。しかし、ベルトは油圧関連や発電、エアコンなど数本が同時に回転している。緩んでいるベルトを特定する方法は？』という、超難問でした」
「それ、澄江ちゃん、分かった？」と康平が聞くと、彼女は首を横に振った。滑りながら回転しているベルトを特定するのは、たとえプロの整備士であっても容易ではない。しかし、康平は仙台のディーラー勤務でその「裏技」を体得していた。それは、回転中のベルトにヤカンの口からそっと水を垂らす方法である。そうすれば、滑っているベルトの音は微妙に変化するのだ。

康平がそのことを話すと、澄江は目を丸くした。
「でも、手元にヤカンがない場合は？」
「ストローに水を含ませ、滑車の上のベルトに少しずつ垂らす」

澄江は手をたたいて喜んだ。

それから三日経った日の午後、康平が外回りのため駐車場に向かうと、社長の新井が腕を組んで立っていた。康平が「どうかなさいましたか？」と聞くと、新井は「ほら！」と駐車場の奥を指さした。

「外から戻ったら、たまたま澄江くんがいてね、『社長、ボンネットを開けてください。ベルトが滑ってキーキー音がしているから、どのベルトが滑っているか確かめてあげます』って言うんだよ。大したもんだね、ウチの箱入り娘がそんなことまで知ってるんだから」

車のボンネットを上げて中を覗いている澄江は、右手にフラワーポット用の水差しを持っている。康平は大きくうなずいた。何事にも積極的な澄江である。康平から教わった裏技をさっそく社長の車で検証しているようだ。新井は康平の顔を見ながら言った。

「彼女に何か手ほどきしたんだね。すぐ身につける彼女も立派なもんだ」と、感心しながら、駐車場を出て行った。

その時から、澄江は康平に踏み込んだことを聞くようになった。部品伝票を整理しながらあるとき澄江は康平にいきなり尋ねてきた。

「課長、ウチの社長って凄い人ですね。刑務所に入ったことがあるって」

「そんな話、誰から聞いたの」

「山田さんが言ってました」

「山田がね……」

山田は、T自動車時代から付き合っている損保会社の山田陽介のことで、今も上京すると康平に会いにやって来る。康平が留守の時は澄江と話し込んで帰るようだ。ある時、山田に用事があって連絡を取りたいと思った時、澄江はすかさず山田の携帯番号を教えてくれた。山田は時々澄江を食事に誘っているらしく、親密な関係のようだ。

「課長。ウチの社長が刑務所に入ったのはどんな罪だったか、課長はご存じですか？」

「詳しくは知らないけどね……」

「私、知りたいです」

仕方なく康平が知っている新井社長の服役の経緯を話すと、澄江は目を潤ませて言った。

「やっぱり凄いですね。ヤクザの親分に惚れられたわけでしょう？」

「まあね。でも、社長は迷惑かもしれないよ」

「それは違うと思うわ。誰だって自分に向けられた好意的な眼差しは嬉しいものよ」

康平は澄江の言葉に女心の機微を実感していた。

あるときまた、昼食を終えた康平が弁当箱を洗い終わるのを待って、澄江は口を開いた。澄江はストレートに突っ込んでくる。

「課長は実家に帰った恋人を十年間、待ち続けているんですよね」

「え？　いきなり何？」

「彼女のこと、まだ諦めていないんでしょう？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「もし諦めたのなら、私、課長のお嫁さんに立候補するわ」

大胆な発言に康平は一瞬ドキッとしたが、澄江は普段から戯言が多いので聞き流した。

「課長、ちゃんと聞いてください。私、本気ですから」

「えっ、本当？」

「うそ！」

澄江はいつもこういう調子で康平を煙に巻く。仕事は正確にこなすから部下としては申し分ないが、こうしてたびたび康平をおちょくるのが玉に瑕である。どこまでが本音なのかわからない。

「彼女のことは諦めてる。しかし、そんなこと、澄江ちゃんに言うんじゃなかったな」

「ごめんなさい。でも、本当に諦めたんですか？　それだと、山田さんの話とちょっと違うわ。深瀬課長は辛抱強い人だから、彼女のこと諦めてはいないだろうって……」

「山田くんがそんなことを？」

長い付き合いのせいか、保険の営業マンが意外に自分の本音を察していることを再認識せずにはいられなかった。

五

それからまもなくまた駐車場でいっしょになった新井社長から声をかけられた。

「深瀬くん、今夜一緒に飯でも食わないか？」

「ありがとうございます。出先から戻るのは五時を過ぎますけど」

「分かった。では六時に『安心亭』で」

「安心亭」とは、会社の近くにある居酒屋である。

生ビールで乾杯した後、新井は旨そうにため息をついた。

「深瀬くん、去年のウチの利益の四割はきみの部品関連だよ。資本金一〇〇万で立ち上げた新星工業がここまで来れたのはきみのおかげだよ。客は人に付くって言うけど、まさにきみの人徳だ。来年は役員として私を助けてほしいんだが……」

「役員？　私がですか？」

「そうだ。ただし役員になれば心労は増えるし、銀行には頭を下げなくちゃいけない。決していいことばかりじゃないけど、引き受けてもらえないか」

「もったいないお話です」

「引き受けてくれるんだね。よかった。きみのことだから、私には現場が一番似合ってますなんて言い出すんじゃないかと心配だったんだ。役員会にかけて来年の春から……」

新井はうまそうに二杯目のビールを飲みながら言葉を続けた。

「憶えてるかい？　私と初めて会った日のこと。『車の臨終に立ち会って死に水を取りたい。形見分けに関わりた

い』と……。その発想に私は感動した。そして確信したんだ。この男は必ずウチの救世主になってくれると」

康平は顔を赤らめた。仙台のディーラー勤務時代に業界の整備コンテストで何度か受賞したことはあったが、新星工業に転職後は特に褒められることなく過ごしてきた。

「ところで、深瀬くん、嫁さんをもらう気はないか？」

突然、新井は思いがけないことを口にした。

「結婚ですか？　まあ、いい人がいれば……」

「澄江くんはどうだい。きみにお似合いだと思うけどね」

「いえ、それは……、まだ学生ですし、それに年の差があり過ぎます」

「そんなのはたった一回りだろう？　実は、澄江くんが車のベルトの音に気づいてうまく異常を教えてくれたんで、あのあとお礼にアイスクリームをご馳走したんだ。そこでまあ、半分は冗談のつもりで『深瀬課長の嫁さんになったら？』って、言ったんだが、驚いたね。『よろしくお願いします』って真顔になって。それで『なんだ、もう二人で話がついてるんじゃないか』と言うと、『深瀬課長は私のこと、まるで子ども扱いなんです』って涙ぐむんだよ。話はそこで終わったんだけどね」

康平は澄江の自分に寄せる好意に気づいてはいるが、日暮妙子のことは大震災の日以来、ずっと頭から離れないでいる。もしかしたら妙子は結婚し、夫や子どもと幸せに暮らしているかもしれない。しかし、なぜ妙子は康平の前から一言も発せず姿を消したのだろうか。あの当時、康平と妙子は互いの車にメモを残していた。それはほぼ毎日だった。しかし、実家の父親が病に倒れたことや診療所を辞めて帰郷するという大事な事を康平に告げずに去ったことが不思議でならないのだ。康平にはいくら考えても思い当たることはなく、混迷を深めるばかりだった。

翌朝、康平は出社するとすぐに社長室へ向かった。昨夜の礼を言うためである。しかし、すでに先客がいた。それは澄江である。

康平は澄江の退室を見届けてから、社長室に入った。「昨夜はすっかりご馳走になりまして……」と礼を述べると、新井はコップの水を飲みながら康平にソファに座るよう促した。

「夕べはちょっと飲み過ぎたようだ。そんなことより、あれから家に帰って澄江くんに電話したんだ。深瀬課長はいま結婚のことは考えていないようだと。すると彼女が、そのことで話したいことがあるから、朝一で伺うと……」

「何だったんですか？　彼女の話って」

「驚いたよ。きみは十年前の大震災以来、恋人と連絡がとれないでいるって、本当？」

「はい」

「そんなバカな話はないだろう。今は戦後の混乱期じゃないんだ。何か打つ手はあるはずだ。信用ある興信所に調べてもらうとか……、本当に手は尽くしたのかい？」

「はい、私なりに、でも、彼女に私に対する愛情が残っていれば、仙台の元の勤務先に連絡が入ると思います。その時は元の同僚が新星工業に連絡を入れてくれることに……。でも、あれから十年経ちました。彼女は結婚して幸せに暮らしているかも知れません」

「それはきみの憶測だろう」

「はい」

「わかった。彼女の名前は日暮妙子さん、新庄の出身でT自動車系の仙台診療所で看護師をやってたんだね。それは、澄江くんから聴いた。これだけ分かれば十分だ。あとは私に任せてくれないか。澄江くんの心は複雑なんだよ。深瀬課長の恋を実らせてあげたいっていう気持と、自分に振り向いてほしいという願いが入り混じって」

新井が「任せてくれ」と言ってから一週間ほどたった日の夜、康平は偶然にもテレビのニュース画面に映った妙子を見た。それは「新庄まつり」の風景である。大掛かりな山車が次々に通過する沿道で、女性キャスターが幼児を連れた若い女性にインタビューを始めた。五歳ぐらいの法被姿の女の子の顔がアップで映る。

「お母さんはこの新庄まつりについて、どんな感想をお持ちですか？」

「伝統ある立派な文化遺産と言えるもので、私は郷土の誇りと思っています」

はきはきと答える妙子は、以前と同じ聡明な顔立ちである。あの大地震から十年が経ち、今は女の子の母親になっていた。「新庄まつり」を見ているということは、実家の近くで暮らしていると思われる。テレビの画面を食い入るように見つめる康平の目から涙が溢れ落ちた。

翌日、康平は社長室に呼ばれた。新井は康平にコーヒーを勧めながら「日暮妙子さんの居場所が分かったよ」と言った。康平の胸の鼓動が急に早くなった。妙子が山形県の新庄市に住んでいることは、昨夜のテレビのニュースを見て知っている。

「新庄だよ、山形県の新庄市内にあるT病院で看護師として勤めている」

「どうして分かったんですか？」

「その経緯は、今はちょっと言いたくない。きみの好きな方法じゃないと思うんでね」

康平はぴんと来た。北関東義侠会の会長、北丸剛毅の手を借りて妙子の居所を突きとめたのではないかと。

「もしかして、北丸さん……」

「きみは相変わらず勘がいいね。心配しなくていい。穏当な方法で捜し当てたそうだから」

康平は北丸に一度も会ったことはないが、新星工業に転職する前、新井から直接聞いた繋がりだった。

「北丸さんの力も凄いですね」

「ヤクザという理由でみんなが離れたんでは彼らはいつまでも更生できないよ」

彼らの力を認めると同時に、彼らを庇うような言葉に、康平はあらためて新井の懐の深さを感じた。ヤクザや暴力団の世界はそのような綺麗ごとでは済まないように思う一方で、確かにそれだけではすまされない何かが確かにある気がした。

「みんなが嫌がって近づかないんじゃ更生しようとする意欲が萎えてしまうんじゃないかな。私は北丸さんの息子の結婚式に出たけど、マスコミが会場に大勢来ていて、出席していた代議士とか都議会議員の写真を撮りまくっていた。政治家とヤクザの関係を暴いたつもりだろうが、結婚したのは北丸さんじゃない。息子さんなんだ。叩くだけでは、人を生かせない」

康平は新井の言うことが今は理解できた。その考えが会社を貫いていることを感じた。新井はしばらく持論を展開した後、妙子の所在と境遇について次のように語った。

妙子はいま新庄市S地区内の市営アパートで暮らしている。五年前に結婚して女の子が生まれたが、三年前に離婚して旧姓に戻った。実家の父親は、大震災の十日後に亡くなり、母親も後を追うように他界した。現在、妙子は一人娘を保育園にあずけ、新庄市内のT病院に看護師として勤務しているという。

「両親と死別、結婚して娘を生んだものの離婚……、まさに波瀾万丈の人生だね。妙子さんはいま独り身だ。深瀬くん、ほかの男との間に生まれた子どもはイヤか？」

康平は新井の言いたいことをすぐに理解した。しかし、妙子が康平の前から忽然と姿を消した理由は未だ不明である。自分に対する愛情が失せたから離れたのか、もしそうであれば今更訪ねて行くまでもないように思うのだ。康平は新井に深々と頭を下げて言った。

「社長、いろいろありがとうございました。少し考える時間をいただけませんか」

「わかった。でも、これだけは言っておくが、勝手な思い込みで妙子さんを諦めたりすると生涯悔いを残すことになりかねない」

新井の語気は強い。他人の恋愛になぜこんなにムキになるのか、康平は不思議だった。

妙子が女手一人で子育てをしていることに康平は胸が痛んだ。澄江はそんな康平を気づかってか、意外なことを口

にした。

「課長、ウチの社長がなぜ結婚しないか、知ってます？」

「いや、知らない」

「三日前ですが、社長にお伴して陸運局に行った時、結婚しない理由を聞きました」

「そんなこと聞いたの？　驚いたね。それで？」

「社長は若い時に刑務所に入ったけど、これは窃盗や猥褻のような破廉恥罪とはわけが違うと。社長の恋人も同じようなことを言って励ましてくれたんですって。そして刑期を終えたら結婚する約束をしていたそうです。でも刑務所から出てきたら、彼女は別の男性と結婚して外国へ……。それにはわけがあったんです。彼女が刑務所に出した手紙を社長はほとんど見せてもらえなかったんですって。同房の受刑者を守ってあげようとして刑務官とケンカになって、それで懲罰っていうのかしら、『おまえは反抗的だったので手紙の閲覧を制限した』と。服役後半は彼女の手紙を一切見せてもらえず、出所する時にドサッと手紙の束を……。これでは彼女に返事は来ないですよね。悲観した彼女は別の男性と結婚して外国へ……」

康平は新井が他人の恋愛にムキになる理由が分かった。彼は弁明の機会すら与えられないまま恋は終わったのである。

「新井社長って、本当に素敵ですよね。私、そういう人と結婚したいわ。でも、そういう男性はなかなか……」

澄江は康平に脈がないと覚ったようである。

「澄江ちゃんが前に損保の山田君と食事をしてるって聞いたけど、彼とはどうなの？」

「そのことですけど、山田さん、近く独立して事務所を開くので私に手伝ってほしいと言うんです。食事でもしながらゆっくり話したいって……」

「そうか、山田くんは自分で保険会社を作りたいって前に話していたけど、彼は社会保険労務士や行政書士の資格もとったそうだ。独立すれば様々な手続きの代行で事務所は忙しくなるだろうね。澄江ちゃん、いっそのこと山田くんのお嫁さんになれば？」

「実は山田さんからそれらしいことを言われているんです」

「えっ、そうなの？　二人がそういう仲だったなんて、隣にいながらさっぱり気付かなかった。私のアンテナはかなり錆びついてるってことだね」

「そうなんですか。課長はとうに気付いているとばかり

自費出版承ります 自分の作品を本にしたい方は文芸思潮企画まで御連絡ください。
☎〇三・五七〇六・七八四七

……」

澄江の紅潮する頬を見ながら、康平は大きな肩の荷がおりたような気がしていた。

六

年も押し詰まった十二月三十日は新星工業の仕事納めである。康平は澄江と午前中いっぱいかけて営業課内の大掃除をした。昼は社員食堂に全員が集まって年越しそばを食べることになっている。

康平が食堂へ向かって歩いていると、澄江が追いかけてきた。

「課長にお客様ですよ。サカイさんっていう方です」

サカイといえば康平はT自動車販売の仙北営業所長、酒井修二しか思いつかない。転職のきっかけとなった因縁の相手である。

酒井は応接室で立ったまま康平が来るのを待っていた。彼の頭髪は大きく後退し、顔全体に皺が目立つ。自信に満ちた当時の表情はすっかり消え失せ、体も一回り小さく見える。

「所長、ご無沙汰しております」

「いや、ご無沙汰はお互い様だ。あの頃はきみに不愉快な思いをさせてすまなかった」

「いえ、当時の私はとにかく生意気盛りでしたから……」

「そんなことはないよ。きみが会社を辞めたら、ほかの整備士たちも次々に辞めちゃってね、顧客にとっては確かな整備技術が一番ってことに気づいた時は後の祭りでね」

「所長、だいぶスマートになられましたね。何かご病気でも?」

「そうなんだ。胃は全摘で直腸は三分の一を切除。いや、そんなことはどうでもいいんだ。きょう、お邪魔したのは、久しぶりにきみに会いたいと思ったからなんだ」

十年の歳月は人間をこうも変えるものかと康平は不思議だった。そして酒井の訪問の真の目的は、十年前の気まずい別れ方の修復だけとは思えない。もしかすると妙子の動向に関することか……と康平は思った。

「実はね、年が明けると私は転勤なんだ。T自動車共済組合の秋田病院に出向して、そこの事務長をやれと言われてる」

「素晴らしいじゃないですか。ご栄転、おめでとうございます」

「栄転? みんなそう言って慰めてくれるけど、車を売ることしか能のない私が病院勤務だなんて、本当に腹が立って一度は辞表を叩きつけようと思ったよ」

康平は言葉の返しようがなく黙っていると、酒井は思いがけない言葉を発した。

「実は、きみに詫びなければならないことがあるんだ。きみが当時つき合っていた日暮さんという女性のことだけど……」

康平の勘は当たった。

「彼女はよく夕方に来てたよね。だから『日暮さん』ってダジャレを言ってた社員がいたな。最近聞いたんだが、大震災以来、きみたちは連絡が取れないでいるって、それ本当?」

「はい」

「やっぱりそうなんだね。実はきみが退職して間もなく……」

酒井はようやく本題に入った。

康平が退職しておよそ十日後、妙子から仙北営業所に電話が入った。その時、女性社員は接客中のため、酒井所長が電話をとった。妙子は康平の転職先を教えてほしいと頼んだが、酒井はそれに答えず、その電話を整備課に転送した。しかし、整備士は全員が近くで起こった大きな自動車事故の処理に駆り出されていて留守だった。そのため、妙子の電話は二時間ほど転送状態のままになってしまった。その日から何度も妙子から電話が入ったが、酒井はそのたびに電話を整備課に転送しただけだった。整備課では作業中に電話を取ることはしない。その後も何度か妙子から問い合わせがあったが、酒井は「退職した社員のことに一々対応していたら営業所の仕事が停滞する」と妙子に強く苦言を呈したという。

「本当に申し訳ないと思ってる。きみたちが結婚できないでいるとしたら、私に責任があるのかもしれない。ところで、大地震で駐車場の車が壊れた時、きみは車の所有権を放棄したよね。それから一年ほどたった頃、被災した車の解体を請け負った工場から一枚の紙が届いたんだ。きみの車のエアコン吹き出し口の中に残っていたボールペンの筒の中に在ったと」

酒井が手渡した紙は、長い年月を経て変色しているが、妙子が康平に宛てたメモであることは容易に識別できた。

【康平さん、実家の父が脳梗塞で倒れました。母の電話によるとかなり深刻です。私、診療所に退職願を出します。きょうの午後に車で新庄に帰ります。実は、ウチの診療所の若い医師が大きな医療ミスをしでかしました。所長は、前途有望な医師なので私たち看護師同士の連係ミスということにしてくれと言うのです。そんなことは納得できません。その医師の明らかなミスなのですから。私はこのようにでたらめな診療所を辞めます。私と康平さんはお互いに結婚のことを口にしたことはなかったけど、私は康平さんを信じています。私を迎えに来てください。住所は山形県新庄市○○町……、自宅の電話は××番です。落ち着いたらまた連絡します。　妙子】

懐かしい妙子の筆跡である。康平の眼がしらが熱くなっ

た。

「私はその手紙を最近まで自分の机の引き出しにしまってそれっきりになってしまったんだ。毎日色んな事が次々に起こって、二人の大事な手紙のことを十年近く失念していたんだよ。私の対応のまずさが二人の仲を引き裂いてしまったとしたら、何とお詫びしていいか……、本当に申しわけない」

酒井は康平に向かって深々と頭を下げた。

康平は酒井を玄関まで送った。酒井は康平の手を強く握り、「じゃあ…」と言って背中を見せた後、再び康平に向きなおった。

「思い出したくもない話だけどね、整備工場でエンジンが焼きついた時、きみはミスを認めて新品のエンジンと交換してくれと言ったよね。その時、私は『客には車の劣化を伝えて新車を買わせろ』と……。S係長が客にそう伝えて結果的には新車を売ることに成功したんだが、それから半年ほどして本社から私に呼び出しがあったんだ。人事異動のことかと思ったら、何と私を中傷する怪文書のことだったんだ」

「怪文書……」

「そう。仙北営業所では整備ミスを客に隠して高額な新車を買わせたと……」

「なるほど、まるで私が書くような内容ですね」

「私も一度はきみを疑ったよ。実はね、怪文書を書いたのはS係長だったんだ。あいつは営業所の金を使い込んでいて、その追及の目をそらそうとしたんだ。やっぱり仕事は隠し事なく誠実にやらないとボロが出るってこと、思い知らされたよ」

康平は酒井の後ろ姿が見えなくなるまで玄関に立ち続けた。そして、長い歳月は恨みや憎しみを水に流してくれることを実感していた。

康平が社長室へ向かうと、そこには北丸もいた。

「北丸会長さん、このたびは私ごとで本当にお世話になりましてありがとうございました」

「深瀬さんですね。いつも新井社長さんからお話はお聞きしています」

北丸は体が大きく、声もずっしりと重いが目は優しそうである。

新井は北丸と康平にコーヒーをすすめてから言った。

「北丸さんはね、きみのことが心配でわざわざ来てくれたんだ。どうだ、新庄に行く気になったか?」

「はい、明日は休みをいただいて……」

「それは良かった。いいか、男が試される時だぞ」

新井は涙声になっている。康平は思った。これまで自分のことで泣いてくれた人間は新井星一のほかにいないと。

銀華文学賞　優秀賞　受賞の言葉

高橋惟文

このたびは私の「震災を越えて」を優秀賞に選んでいただきまして深く感謝申しあげます。二〇一一年の文芸思潮第四十一号には東日本大震災の特集が組まれておりました。五十嵐編集長が大震災直後に被災地の東北地域に自ら足を運ばれて取材された記事と膨大な写真は本当に圧巻でした。その旺盛なフィールドワークは、五十嵐さんが若き日に戦乱の東南アジアを駆け巡った体験で身につけられたことが頷けます。また、その第四十一号は著名な文芸評論家による鼎談も併載されており、文芸誌が自然災害を大きく取り上げる編集方針に感動しました。その時、私はこの大震災に翻弄された人間模様をぜひ小説に書こうと思ったのでした。あれから十年が経ち、いまその夢が実現したことを大変嬉しく思います。誠にありがとうございました。

高橋惟文

たかはし　これぶみ

1945 満州・新京で生まれる
68　日本大学法学部卒業
2005　高校教員を定年退職
第1回銀華文学賞優秀賞「箔押所異聞」
08　第55回地上文学賞「晩霜の朝」
11　第7回銀華文学賞「茜色の軌跡」
16　第12回「文芸思潮」エッセイ賞・優秀賞「熱き再会」
山形市在住

第4回「文芸思潮」短歌賞中間発表

●第4回「文芸思潮」短歌賞に御応募いただき、まことにありがとうございました。おかげさまで、日本全国から三九人総数七八編の作品をお寄せいただきました。心から御礼申し上げます。去る一月三一日に締め切らせていただき、厳正な一次・二次・三次予選審査を行ないました。その結果を謹んでここに発表させていただきます。

無印は一次予選通過者、○印は二次予選通過者、◎印は三次予選通過者です。

◎佐山広平　◎竹浪和夫　○清水隆司
◎新井巳喜雄　◎山本　明　◎武藤蓑子
◎柊　二郎　◎葵井禎子　◎宮脇すみれ
◎械冬弱虫　◎平尾三枝子　◎南　大希
◎岩谷隆司　◎華央子　◎海神瑠珂
○福井雅人　◎室町　眞　◎南雲和代
◎風間洋平　◎緋沙　◎熊倉アンナ
◎東家芳寛　◎野葛間
◎岡田美幸　◎泉　葉子
◎坂井　傑　◎東風佳子
◎川名　滓　◎松田早苗
◎渡良瀬愛子　◎陶久　要
○愛闘希　◎上野卓男
○岡野美都留　◎東横恵愛
○愛未知留　◎三井瑛子
◎三ッ木健　◎高橋　良